

太宰府・佐野地区遺跡群 22

—宮ノ本遺跡第11・12・13次調査—

平成18年

太宰府市教育委員会

序

昭和 62 年から始まった「佐野土地区画整理事業」は終わりに近づきました。佐野地区遺跡群として行われた発掘調査により古代大宰府の奥津城であった宮ノ本遺跡や鴻臚館と大宰府を結ぶ官道が発見された前田遺跡をはじめ、旧石器時代から近世までの佐野地区に生きた人々のいとなみの一端が知られることとなりました。

今回の報告は平成 10 年に大字向佐野字宮ノ本で発掘調査したもので、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・近世・近代の遺跡が検出されました。

本書が大宰府の歴史理解に役立ち、地域の人々が先人のいとなみに思いを馳せ、学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解いただきました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成 18 年 3 月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例言

1. 本書は佐野地区区画整理にともない太宰府市大字向佐野字宮ノ本で行われた宮ノ本遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法の第II座標系（旧座標系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は担当者および谷（井上）由紀子が行った。
4. 全体図作成は写真測量によりアジア航測（株）福岡支店に委託した。
5. 遺構の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表壇睦夫）が行った。
6. 13次調査出土木炭樫木炭の科学分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 出土した脆弱遺物の保存処理は下川可容子、安芸朋江、鈴木弘江が行った。
8. 遺物の実測は担当者のほか、下川、松浦智、森若知子が行い、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
9. 近世以降の陶磁器の実測図では文様表現を割愛し、巻末の写真図版とCD-ROM内に示している。
10. 遺物の写真撮影は（有）文化財写真工房（代表岡紀久夫）が行った。
11. 図の浄書は松浦、森若が行った。
12. 本書に用いた分類は以下のとおりである。
須恵器・・・小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁器全集2 日本古代』1979
舟山良一「須恵器の編年 九州」『古墳時代の研究 6』雄山閣 1991
『宮ノ本遺跡II』（太宰府市の文化財 第10集）1992
陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV』（太宰府市の文化財 第49集）2000
『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会）2000
土器・・・『大宰府条坊跡II』（太宰府市の文化財第7集）1983
山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて」『乙益重隆先生古希記念九州上代文化論集』1990
柳田康雄「土師器の編年 九州」『古墳時代の研究 6』雄山閣 1999
坂本嘉弘「東九州の押型文土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器－論攷編－』1998
13. 参考文献は以下のとおりである。
奈良県立橿原考古学研究所『太安萬侶 墓の調査』1979
西本豊弘・松井章『考古学と動物学』1999
狭川真一「古代都市・大宰府の検討」『古文化談叢 23』九州古文化研究会 1990
14. 本書の執筆は城戸康利との協議のもと「V、分析」を下川およびバリノ・サーヴェイ株式会社が、その他を松浦が行い、城戸が編集した。

目 次

I. 遺跡の位置と環境	2
II. 調査体制	5
III. 調査および整理方法	5
IV. 遺跡の内容	
1. 第11次調査	
(1) 調査に至る経過	6
(2) 基本層序	6
(3) 検出遺構	6
(4) 出土遺物	14
(5) 小結	28
2. 第12次調査	
(1) 調査に至る経過	42
(2) 基本層序	42
(3) 検出遺構	42
(4) 出土遺物	44
(5) 小結	52
3. 第13次調査	
(1) 調査に至る経過	56
(2) 基本層序	56
(3) 検出遺構	56
(4) 出土遺物	65
(5) 小結	74
V. 分析	
1. 13ST045 出土方形鏡について	80
2. 13ST045 出土木炭の自然科学分析	86
VI. まとめ	88



図1 宮ノ本遺跡周辺の環境

1. 水城跡 2. 筑前国分尼寺跡 3. 筑前国分寺跡 4. 大宰府政庁跡 5. 観世音寺跡
6. 島本遺跡 7. 神ノ前遺跡 8. 篠振遺跡 9. 原口遺跡 10. 九郎利遺跡 11. 長浦遺跡
12. 日焼遺跡 13. 前田遺跡 14. 宮ノ本遺跡 15. 長ヶ坪遺跡 16. カヤノ遺跡
17. 京ノ尾遺跡 18. 大佐野馬場遺跡 19. 殿城戸遺跡 20. 上川久保遺跡 21. 難川遺跡
22. フケ遺跡 23. 尾崎遺跡 24. 脇道遺跡 25. 杉塚廃寺跡 26. 唐人塚火葬墓
27. 塔原廃寺跡 28. 米囃火葬墓

1. 遺跡の位置と環境

大宰府市は北部九州の中央部に位置している。市域周辺は、北側に大城山に代表される四王寺山地、東には愛賦山から宝満山へ連なる三郡山地、西側には背振山地の前山である牛頭頂山地がある。三方を山地に囲まれている部分は二日市低地帯と呼ばれる谷底平野のつらなりがあり、福岡平野部と筑後平野部を結ぶ境界を成している。大宰府市域を流れる河川の多くが御笠川に合流し、博多湾方面に流れている。今回報告する宮ノ本遺跡は大宰府市の西南部、佐賀県と福岡県の県境をなす背振山地の東側にある牛頭頂山地の丘陵地帯にある。11・12・13次調査区は宮ノ本丘陵の南麓に位置し、丘陵部が平野部に接続する地形の変換点にあたり、標高は38m前後を測る。地質は花崗岩類の基盤岩で形成されている。この調査箇所南側には大佐野川が流れており、東流し次いで北流して御笠川に合流する。過去に何度も侵食と堆積を繰り返していた。

これまでの宮ノ本丘陵周辺の調査では縄文時代早期の押型文土器、前期の骨埴・土器片などがわずかではあるが確認され、古い段階から生活の痕跡が確認されている。縄文時代晩期から弥生時代前期には宮ノ本丘陵東裾部にある前田遺跡で竪穴式住居や貯蔵穴群が営まれ、中期ではその北側の原口遺跡、後期では前田遺跡で集落跡が確認されている。古墳時代になると、宮ノ本丘陵の宮ノ本遺跡では前期から中期にかけて箱式石棺墓や木棺墓・土坑墓で構成される墳墓群が形成され、墓地として土地利用が行われる。副葬品には舶載の獣帯鏡を埋納するものがあり、地域の中・小有力首長の歴代墓として位置づけられている。一方丘陵裾部の尾崎遺跡・原口遺跡・京ノ尾遺跡では竪穴式住居・掘立柱建物などの集落遺構が確認されている。6世紀中頃になると北側の丘陵地帯を中心に九州一の規模を誇る牛頭塚跡群が開窯し、9世紀まで引き続き須恵器生産が行われている。宮ノ本丘陵周辺でも6世紀末から7世紀前半にかけて操業を行った神ノ前窯跡や7世紀から8世紀代にかけて生産を行った長浦窯跡・宮ノ本遺跡・日焼遺跡などがあり、生産地としても利用されるようになった。

大宰府が成立した奈良時代になると、宮ノ本丘陵では引き続き、墓と窯跡群が確認されている。奈良時代の墓は焼骨を骨蔵器に入れた火葬墓が主体になる。この時期の墓は群を形成せずに単体で検出される例が多く、また立地では大宰府条坊の外で平野を取り巻くように丘陵上で造営されているものが多い。大宰府東側の丘陵部では花見ヶ丘火葬墓・結ヶ浦火葬墓・米嘯火葬墓、南側の丘陵地帯では峯火葬墓、西側丘陵の宮ノ本遺跡・篠振遺跡などで確認されている。この時代に平城京で出された『養老喪葬令皇都条』には「およそ皇都および道路付近は、ならびに葬り埋むることを得ざれ」とあり、大宰府もこの規定に倣い、都市部の周囲に墓を造っているようである。平安時代に入っても宮ノ本丘陵では引き続き墳墓の造営が行われるが、次第に墓の主体が火葬墓に代わり木棺墓・土坑墓が造営されるようになる。宮ノ本遺跡1次調査の1号火葬墓からは被葬者と関係ある人物が、被葬者のために土地を買い求めた旨が記録された「買地券」が出土している。奈良時代から平安時代前半にかけては、宮ノ本丘陵の墓の個数が少ないことから、あらかじめ当時の上級陪葬者である官人のための墓域を設定していた可能性が考えられ、大宰府周辺の丘陵部の墓地は官人墓地として扱われていたようである。11世紀後半以降になると宮ノ本丘陵をはじめ、丘陵上では墳墓は造られなくなり、平野部に屋敷墓と呼ばれる土葬墓が出現するようになる。

江戸時代になると宮ノ本遺跡5次調査や宮ノ本遺跡の東に位置する日焼7次調査では肥前系大甕を使用した壘棺・木製の長方形横棺・桶棺などの近世墓が確認されている。日焼7次調査では162基を検出し、明治時代も引き続き埋葬が行なわれていることが判明した。

宮ノ本丘陵は向佐野村の墓地や山林として現代に引き継がれてきたが、県道31号（通称5号線）により分割され、福岡都市圏の拡大にあわせて周辺での開発が進行し、昭和62年からの佐野土地画整理事業によりその地形風貌を大きく変化させた。

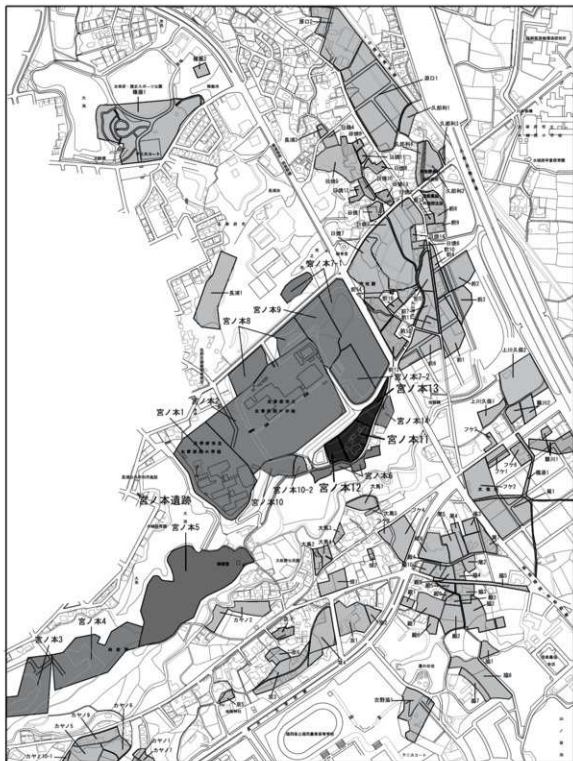


図2 宮ノ本遺跡と周辺遺跡の調査区図

表1 宮ノ本遺跡調査地点一覧

調査次数	主要遺構	備考
1	方墳3・墳丘墓2・方形周溝墓1(古墳前期～中期) 石棺墓1(古墳)・土壌墓1(古墳) 須恵器窯3(7世紀後半～8世紀) 火葬墓1(8世紀後半～10世紀) 木棺墓2(9世紀前半、10世紀前後) 方形石積基壇墓1(8世紀中葉以降) 竪穴式住居1(?)	古墳の主体部は箱式石棺・割竹形木棺・木蓋土壇 5号墳の木蓋土壇より珠文鏡1面が出土 方形石積基壇墓より買地券出土 9世紀前半の木棺墓は炭化物を充填する木炭榑木棺墓
2	方墳5(古墳時代前期～中期) 須恵器窯5(7世紀後半～8世紀) 火葬墓6(8世紀前半～平安中期) 木棺墓1(9世紀) 焼土壇3(?)	方墳の主体部は箱式石棺・割竹形木棺 焼土壇は火葬用施設と考えられている
3	遺構なし	
4	須恵器窯1(8世紀前半)・焼土壇2(?)	焼土壇は火葬施設の可能性がある
5	壘形墓2(江戸)・木棺墓1(江戸)・焼土壇7(?)	焼土壇は火葬用施設、木炭製作用施設と考えられる
6	竪穴式住居7(弥生後期～古墳) 木棺墓1(9世紀前半)	
7-1	円墳1(古墳前期)・土器棺墓2(古墳前期初頭) 石蓋土壇墓1(古墳)・須恵器窯跡1(8世紀前半) 火葬墓1(8世紀前半～中) 木棺墓9(9世紀～10世紀後半)・焼土壇1(?)	円墳の主体部は割竹形木棺墓で獸帯鏡1面が出土 木棺墓9基から黒色土器・土師器・産産須恵器壺・鉄製刀子・ 白磁小碗・八稜鏡が出土している 焼土壇は火葬施設の可能性がある
7-2	方墳2(古墳前期)・円墳1(古墳) 箱式石棺墓5(古墳前期初頭) 木棺墓3(古墳前期初頭) 土器棺墓4(古墳前期初頭) 石蓋土壇墓3(古墳前期初頭) 木蓋土壇墓1(古墳) 木蓋土壇墓1(8世紀前半) 木棺墓10(9世紀～10世紀後半)	古墳の主体部は箱式石棺・割竹形木棺・組み合わせ式木棺 古代の木棺墓から八稜鏡・方形鏡・鉄製毛抜き・越州窯系青磁碗 などが出土している 古代の墳墓は副葬・供献品の差から階層層が見受けられる
8	遺構なし	
9	火葬墓2(8世紀後半)・木棺墓1(9世紀中葉) 木蓋土壇墓なし土壇墓1(9世紀後半)	
10	竪穴式住居5(古墳前期～後期、平安?) 火葬墓1(9世紀)・木棺墓1(9世紀後半)	火葬墓の藤骨器の蓋は緑釉陶器碗を使用
10-2	竪穴式住居3(古墳後期)・火葬墓1(9世紀)	
11	竪穴式住居3(弥生前期～中期、古墳前期) 牛埋葬土壇1(江戸)	
12	竪穴式住居1(古墳中期) 須恵器窯1(古墳～奈良) 木棺墓1(9世紀前半)	
13	竪穴式住居1(古墳前期) 木棺墓7(8世紀後半～10世紀中葉)	9世紀前半の木棺墓1基は炭化物を充填する木炭榑木棺墓で方形鏡 が出土。木棺墓は墓群を形成するが、埋葬時期がそれぞれ異なる
14	溝状遺構3(平安～鎌倉、近現代) 土壇2(弥生・古墳)	

II. 調査体制

調査組織・体制は以下のとおりである。

(平成 10 / 1998 年度)・・・現地作業

総括	教育長	長野治己	
庶務	教育部長	小田勝弥	
	文化財課長	津田秀司	
	文化財保護係長	和田敏信	
	文化財調査係長	山本信夫	
	主任主事	藤井泰人	
	主 事	今村江利子	
	嘱 託	鈴木弘江	
	調査	技術主査	狭川真一
		主任技師	城戸康利、山村信榮、中島恒次郎、井上信正
		技 師	高橋 学、宮崎亮一
技師(嘱託)		下川可容子、森田レイ子	

(平成 17 / 2005 年度)・・・整理報告作業

総括	教育長	關 敏治	
庶務	教育部長	松永栄人	
	文化財課長	木村和美 (～6月30日)	
		齋藤廣之 (7月1日～)	
	保護活用係長	久保山元信	
	調査係長	永尾彰朗	
	主任主査	齋藤実貴男	
	事務主査	大石敬介	
	調査	主任主査	城戸康利、山村信榮、中島恒次郎
		技術主査	井上信正
		主任技師	高橋 学、宮崎亮一
技師(嘱託)		下川可容子、柳 智子、長 直信、松浦 智	

III. 調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群 1』(太宰府市の文化財第 14 集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂)に基づく。

IV. 調査の内容

1. 第11次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字向佐野 207・208・209 に位置する。佐野地区区画整理に伴う工事前の事前実地発掘調査である。調査期間は平成10年4月6日から同年8月7日までである。対象面積は2,224㎡、調査面積は1,186㎡である。調査は城戸康利が担当した。向佐野に属し「川越（コウゴシ）」と呼ばれていた場所で、近代は5戸ほどでクミを形成していた。調査地は宮ノ本丘陵の南麓と大佐野川の間の緩斜面を造成して2軒の旧家（農家）が建っていた。

(2) 基本層序

調査地は近世以前に屋敷地とするための造成が行われており、丘陵側は削平され遺構は残存しない。平地側は河川に向い低くなり遺構は希薄である。したがって調査区は削平を免れた丘陵に沿った狭長なもので、南北に2分割することとなった。隣接する第13次調査区とは北側調査区が連続している。調査区の地形は西から東側に緩やかに落ちる斜面上にある。表土を除去するとその下に花崗岩風化土の薄い包含層（黄色土）が現れ、さらに除去すると弥生時代までの遺構面が同一面で検出された。またこの遺構面の下層で縄文時代の包含層を確認したため、一部を掘り下げた。結果石織・剥片を中心とした石器群と押型文土器などを検出した。この包含層の出自は土質から丘陵部から谷を埋めながら堆積したものと考えている。

(3) 検出遺構

遺構面は現代から弥生時代まで同一面であるが遺構数は少ない。本調査区では弥生時代前期後半から中期前半と古墳時代前期の集落遺構と近世以降の生活痕跡を確認した。弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落は宮ノ本丘陵北東側裾部に位置する前田遺跡でも確認されており、同一の集落と考えるならば広範囲にわたる大きな集落となる。

a. 住居

竪穴式住居を3基確認した。古墳時代前期の住居2基は調査区北側に隣接している。

11S1001（図3・4）

北側調査区北端で検出した竪穴式住居である。第13次調査のS-55と同一遺構のためここでまとめて報告する。平面正方形プランを呈し、長軸6.48m、短軸5.98m、検出面から最下面までの深さ0.4mを測る。床面には貼り床が行なわれており、最下面に黒色土が0.05m位の厚さで堆積し、その上に橙色土を0.05m位の厚さで敷いて、貼り床面を形成している。a, c, e, i, j が支柱穴と考えられ、深さ0.5m前後、柱間は2.9m前後を測る。また住居の東側壁の一部を除いて深さ0.1m前後の壁溝を持つ。住居の南側には屋内土坑と考えられるものが3基認められる。そのうちの1基は底面に粘土塊を置いた状態のものを確認したが用途は不明である。貼り床面を除去すると床面中央が硬化しており、一部火を受けた痕跡が認められた。住居の北西側では深さ0.1m前後の周溝が認められる。

11S1005（図5）

北側調査区の北部に位置し、11S1001の南側に隣接する竪穴式住居である。平面長方形プランを呈し、長軸5.05m、短軸3.8m、検出面からの深さ0.25mを測る。支柱穴に関しては明確な配列がなく、判断が難しい。住居の南西隅に床面からの高さ0.05～0.1mを測るベット状遺構を検出した。貼り床は確認できなかった。

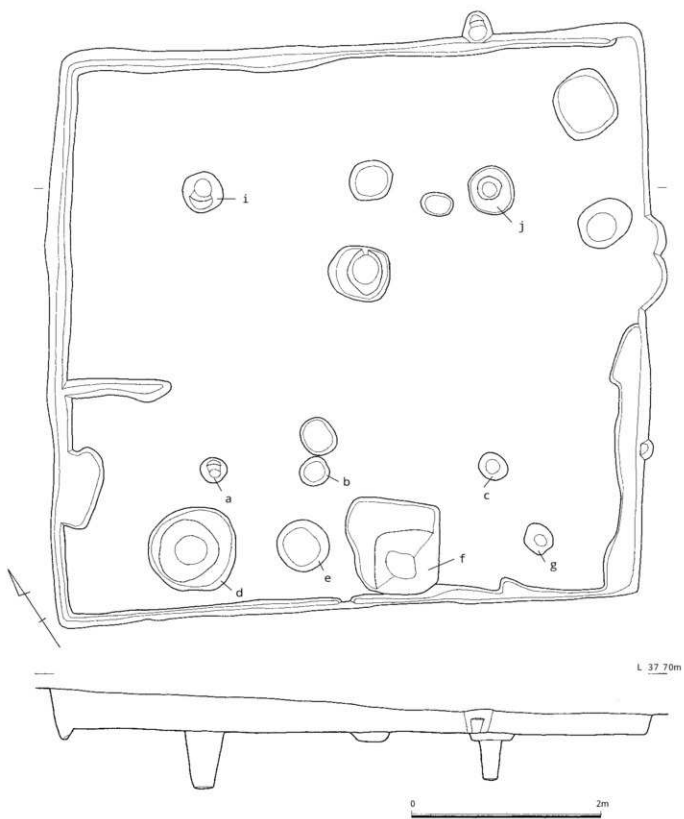


图3 11S1001 実測图① (1/40)

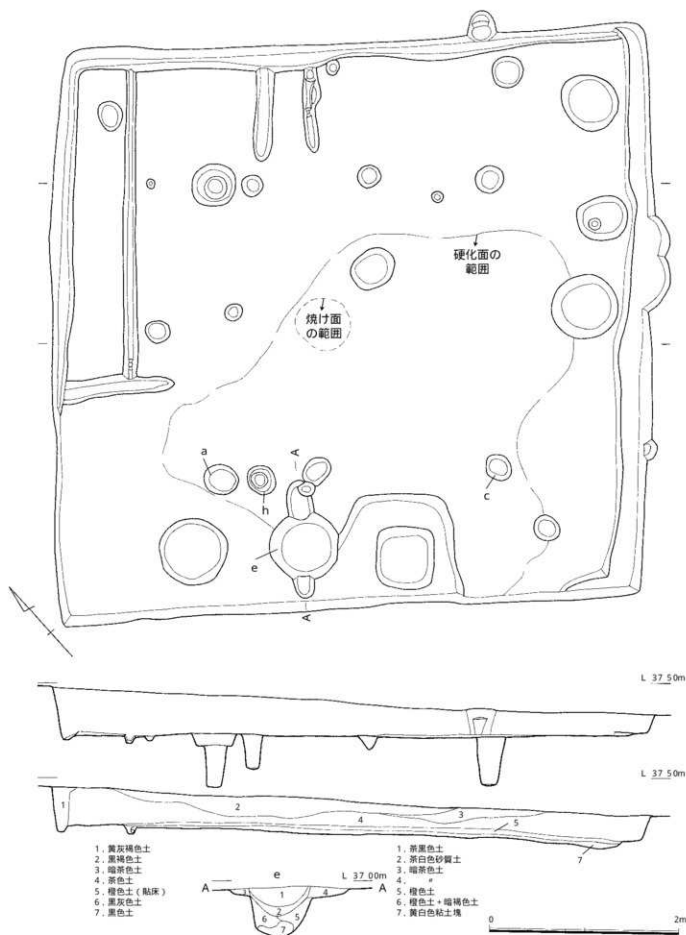


図4 11S1001 実測図② (1/40)

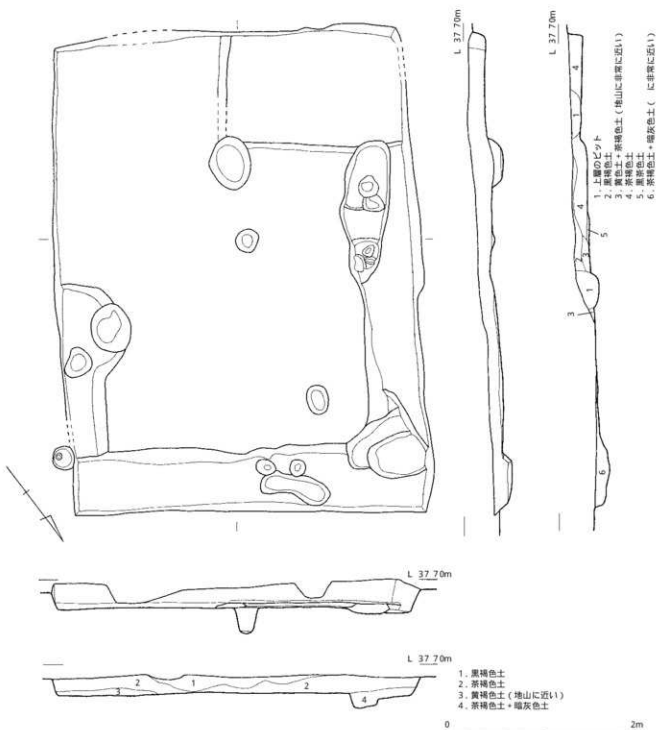


図5 11SI1005 実測図 (1/40)

11SI100 (図6)

南側調査区に位置する円形プランの住居であるが、西側は後世の削平を大きく受けている。当初は西から東へ落ちる小さな段落ちと捉えられて住居跡と認識されていなかった。東側の段下で壁溝様の溝が検出されたことで、対応する主柱穴および中央土坑を探し、円形住居と認定した。直径約6.8m、床面までの深さは0.37mを測る。床面の中心には中央土坑があり、平面楕円形プランを呈し、長軸1.04m、短軸0.75m、深さ0.2mを測る。中央土坑を中心に周囲を6基の主柱穴が囲んでいる。主柱穴は平面円形、

略方形プランなどあるが深さは0.5 m前後を測る。北西壁では深さ0.1 m前後の側溝が認められる。

b. 溝

11SD010

北側調査区北東隅に位置し、11SI001の東側にあり周溝状になっている。東側が調査区外になるが、略半円分を検出した。埋土は砂質土で上層が黒茶色、下層が灰白色をしていた。最大幅2.5 m、最深で0.15 mを測り、非常に浅い。

11SD102

南側調査区の南隅に位置し調査区外に伸びる。褐色土の埋土である。深さは0.15～0.2mである。周辺の遺構に大きく切られている。

c. その他の遺構

11SX015 (図7)

北側調査区の南部に位置する小穴である。平面形プランは楕円形を呈し、長軸1.22 m、短軸0.77 m、深さ0.38 mを測る。穴の上部で土師器の甕と壺が逆さまになった状態で検出された。甕は口を別個体の甕の胸部片で塞いでいた。土層は下層が黒色砂質土で上層が黒茶色砂質土である。甕類は黒色砂質土の上に置かれており意図的な埋納と判断される。

11SX028

北側調査区の北端に位置し、11SI001の東側にある径0.3m、深さ0.3mほどの小穴群である。

11SX058

北側調査区の東側に位置している。平地を造成するため自然地形の斜面を埋めたもの。幅4m、長さ8m分を検出し、深さは0.2～1.3mであり、北から南へ深くなる。

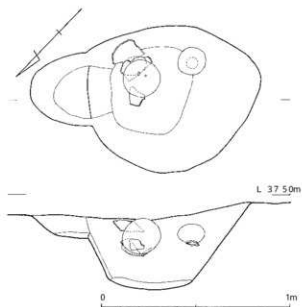


図7 11SX015 遺物出土状況実測図 (1/20)

南側は11SX078に連続すると思われるが11S-63に切断されている。埋土は上層が暗褐色土、下層が白色と暗灰色のまだら土である。

11SX074 (図8)

北側調査区の中央部に位置している。牛を埋葬した土壌である。平面プランは不整楕円形を呈し、長軸1.63 m、短軸1.21 mを測る。前足の末節骨が又状になっていることから牛だと判断できる。牛は横向けに寝かせ、前足と後足を引き付けた状態で埋葬されていた。尾椎から腰椎、左側の寛骨、肋骨などは後世の攪乱で失われている。頭蓋骨は残っておらず、下顎骨と一部の上歯を残すのみである。頸椎と胸椎ははずれているが切断の痕跡は無い。土器などの供献遺物の出土はなかった。骨の残存状態は比較的良好であった。埋葬は近世以降だと考えられる。

11SX077

北側調査区の中央に位置する楕円形の土坑である。長軸 4.35 m、短軸 3.31 m を測る。埋土は灰色砂と黄色土の互層である。

11SX078

北側調査区中央部東側に位置する落ち状遺構である。斜面の西から東側に向かって 1.5 m 程の落差がある。11SX058 と連続するものと考えられ、平地を確保するために斜面を埋めたものと考えられる。埋土は上層が黒褐色土と黄色土の混合で、下層は白黄色粘性土である。上層遺物は近代のものまで含み、下層遺物は中世のものであることから、長期間かかって埋められたものとも考えられる。

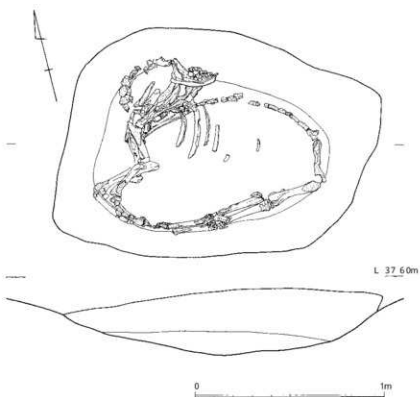


図8 11SX074 牛骨出土状況実測図 (1/20)

11SX122 (図9)

南側調査区北端に位置する土坑である。隅丸長方形を呈し、長軸 1.92 m、短軸 0.87 m、検出面からの深さ 0.31 m を測る。埋土は暗茶色土である。

11SX142

南側調査区東側に位置し、11SX177 を切るたまりである。幅 2.78 m、検出面からの深さは 0.32 m を測る。埋土は暗黒灰色土である。

11SX166

南側調査区に位置し、11SX177 を切る溝状の遺構である。北東から南西方向で、長さ 7.5 m 以上、幅 3.25 m、検出面からの深さは 0.23 m を測る。埋土は暗茶色土である。

11SX177

南側調査区東側に位置し、11SX142・166 に切られるたまりである。深さは 0.18 m を測る。埋土は灰茶色土である。

11SX200

南側調査区に位置する土坑である。平面円形を呈し、長軸 1.02 m、短軸 0.98 m、検出面からの深さ 0.18 m を測る。古式土師器甕と、石製茶臼片が出土している。埋土は灰褐色土である。

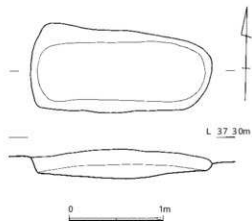


図9 11SX122 実測図 (1/40)

11S-61・63

北側調査区の中央に位置し、北西から南東方向の溝状の遺構で、丘陵から平地へ向けて流れるようになっていたと考えられる。長さ 17.5 m 以上、幅 0.95 m ほどを測る。

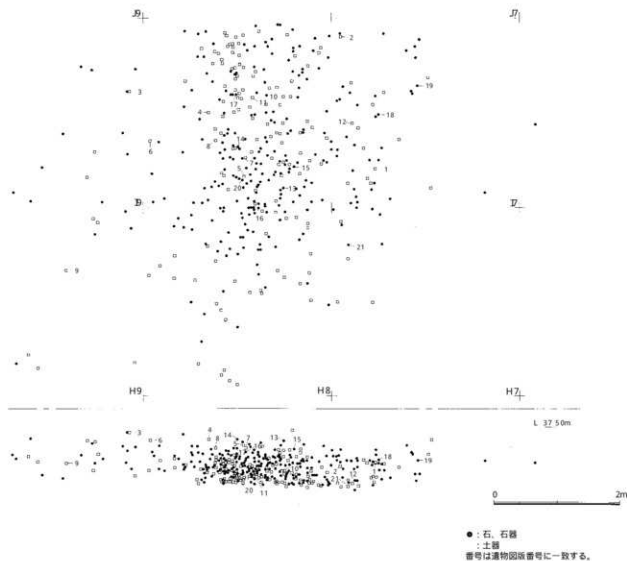


図 10 下層包含層遺物出土状況実測図 (1/60)

古代から近現代までの遺物を含んでいる。特に近世から近代の陶磁器が多く出土している。11S-61と63の区別は5ライン上で遺物を分けて取り上げたためであるが、特に差異は認められなかった。

11S-62

北側調査区の中央に位置し、11S-61・63の南側を並行したように走る溝状の遺構である。長さ16.5m以上、幅1～2.4mほどを測る。11S-61・63と同様の性格のものと考えられる。両者あわせて通路側溝であったことも考えられる。

d. 下層包含層 (図10・11)

弥生時代までの遺構面の上に縄文時代の遺物が包含される層があることを確認したため、当該期の遺物が目立った南調査区のグリッドH I 6～9区の範囲を掘り下げて調査した。花崗岩風化土が自然堆積したと考えられる黄色土や白黄色土の層位からは縄文時代の土器片、黒曜石・安山岩製の打製石器・石器剥片などが約350点出土した。遺物は標高37mを中心に上下0.5mの範囲内で散漫に検出された。丘陵上より土砂とともに流れ落ちてきたと考えられる。

(4) 出土遺物

竪穴式住居

11SI001 茶色土出土遺物 (図12)

土師器

高坏 (1) 口径19.1cmの坏部片である。口縁は外反し、脚部は円錐状に開く。焼成は良好で、色調は橙灰色を呈する。

壺 (2・3) 口径は2が11.9cm、3が10.8cmである。口縁形状は2が内湾気味に直立し、3は直線的に立ち上がる。2・3ともに胴部外面はハケ目調整後ナデを行ない、内面はヘラ削りを行なう。頸部内面には胴部と口縁部を接合した痕跡が認められる。2の胴部外面に黒斑がある。

鉢 (4) 口径9.3cm、器高6.0cmの小型の丸底の鉢である。底部と体部はナデ調整で、口縁部は横ナデが行なわれている。焼成は良好で色調は黄灰～黄茶色を呈する。外面に黒斑の跡が残る。

小鉢 (5・6) 5は口径4.0cm、器高4.6cmを測り、6は口径3.3cm、器高3.2cmを測るミニチュア土器である。5の内外面、6の口縁外面に指頭圧痕が顕

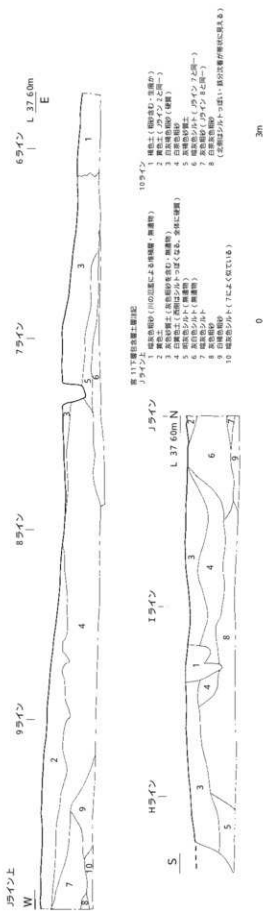


図11 下層包含層土層断面図 (1/60)

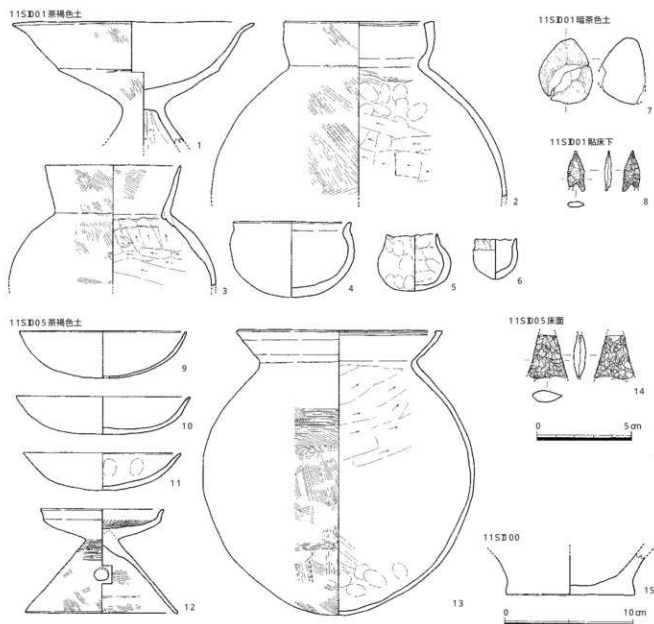


図12 11SI001・005・100 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

著に残っている。どちらも焼成は良好で黄灰～橙色を呈する。

11SI001 暗茶色土出土遺物 (図12)

石製品

丸石 (7) 長さ3.4cm、幅2.8cm、重さ4.6gの卵形をした軽石である。表面は擦られている。

11SI001 貼床下出土遺物 (図12)

石製品

石鏃 (8) 黒曜石製の打製石鏃である。長さ2.1cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm、重さ0.5gを測る。

11SI005 茶褐色土出土遺物 (図12)

土師器

椀 (9～11) 口径12.4～13.8 cm、器高3.0～3.7 cmを測る。9と10の外面はヘラ削り後ハケ状工具によるナデを行い、内面は丁寧な横ナデで仕上げている。11は強いナデを行なった後ハケ状工具で調整し、内面は横ナデで仕上げている。9・10は11と比較すると丁寧に製作されており、胎土も10に白雲母を含むなど精選されている。

小型器台 (12) 口径9.7 cm、器高8.2 cm、脚部径12.0 cmを測る。受け部は端部をつまみ上げた皿状になり、脚部は円錐状にひろく。受け部外面と口縁部は横ナデで仕上げ、受け部内面の見込みに放射状の暗文を施している。受け部と脚部の接合部器面には横方向のミガキが認められる。脚部は内外面ともに斜め方向のハケ目調整後ナデで仕上げている。脚部には2箇所円形透かしがある。

甕 (13) 口径16.2 cm、器高22.5 cm、胴部最大径21.4 cmを測る。胴部は球形を呈し、口縁端部は内面につまみ上げている。胴部外面は縦・横方向のハケ目調整を行い、胴部内面上半部は横方向のヘラ削り、下半部はハケ目調整後ナデで仕上げている。口縁部は横ナデで仕上げている。焼成良好で色調は明黄灰茶色を呈している。外面底部から胴部上半まで炭化物が付着している。

11SI005 床面出土遺物 (図12)**石製品**

石鏃 (14) 黒曜石製の打製石鏃である。現存長2.3cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm、重量2.6gである。先端部が欠損している。

11SI100 出土遺物 (図12)**弥生土器**

甕 (15) 甕の底部片で底径10.2 cmを測る。胎土に金雲母を少量含む。

溝**11SD102 出土遺物 (図13)****石製品**

柱状片刃石斧 (1) 明灰黄色の泥岩製の磨製石斧で、基部が欠損する。現存長4.6cm、幅2.8cm、厚さ2.2cm、重量47.8gである。

その他の遺構**11SX015 出土遺物 (図13)****土師器**

甕 (2) 口径12.9 cm、器高20.8 cm、胴部最大径20.3 cmを測る。胴部は球形を呈し、口縁部は外方に直立している。胴部外面は斜め方向のハケ目調整後部分的にナデを行なっている。胴部内面は横・斜め方向のヘラ削りを行い、底部はナデ調整している。口縁部は横方向のハケ目調整後、横ナデで仕上げている。焼成は良好で色調は橙～黒灰色を呈する。

壺 (3) 胴部最大径14.4 cmを測り、胴部は偏球形を呈する。胴部外面は斜め方向のハケ目調整後不定方向の丁寧なナデで仕上げている。胴部内面は頸部と底部に強いナデを行なっており、その痕跡として指頭圧痕が認められる。焼成良好で色調は橙～黒色を呈する。

11SX028 出土遺物 (図13)**縄文土器**

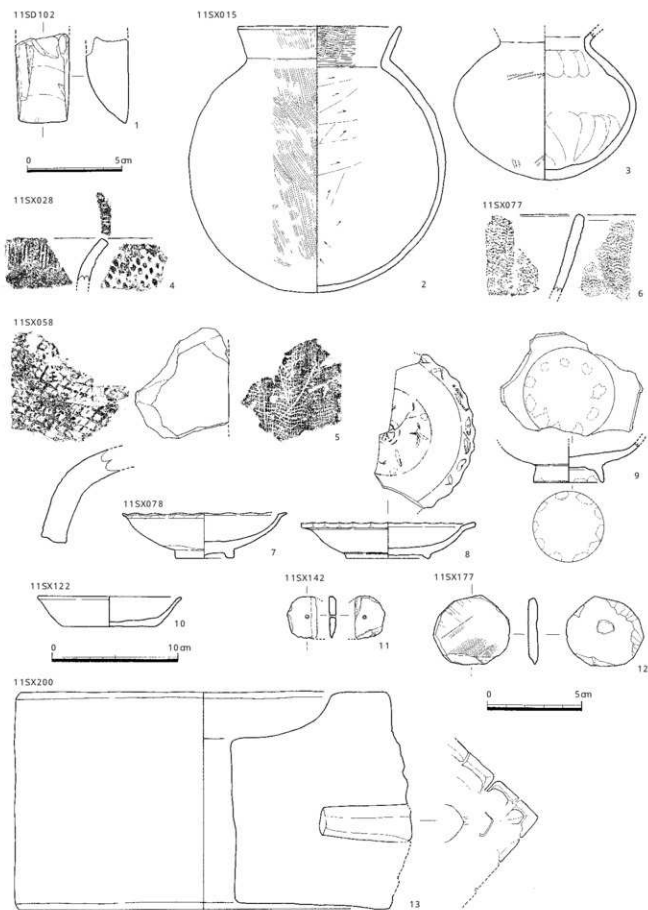


図 13 11SD102・SX015・028・058・077・078・122・142・177・200 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

深鉢 (4) 押型文土器の深鉢口縁部の破片である。外面には粗大な楕円文が施文され、内面には原体条痕による縦の短沈線文がみえる。口縁上端にはヘラ状工具で施したと考えられる刻み目が認められる。胎土に角閃石を少量含んでいる。下層遺物と考えられる。

11SX058 出土遺物 (図 13)

瓦

丸瓦 (5) 凸面には格子目が施され、「王」という銘款が認められる。凹面には布目がみえる。端部は内側に分割の切れ目を入れている。焼成良好で還元されており、色調は褐灰色を呈する。

11SX077 出土遺物 (図 13)

縄文土器

深鉢 (6) 押型文土器の深鉢口縁片である。口縁は直線的に立ち上がる。内外面とも山形文が横位施文されている。焼成はやや良で、色調は暗黒茶色を呈す。

11SX078 出土遺物 (図 13)

国産陶器

皿 (7) 口径 12.9 cm、器高 3.6 cm、高台径 4.6 cm を測る。口縁端部は外反し、輪花形になっている。軸葉は鉄軸で、皿部には施軸されているが、高台部は軸を削って露胎となっている。見込みは蛇ノ目状に軸刺ぎしている。肥前産である。

肥前系磁器

皿 (8) 口径 13.8 cm、器高 2.8 cm、高台径 6.6 cm を測る色絵皿である。体部との境で口縁部が屈折し、口縁端部は輪花状になる。見込みの上絵は剥離しているが暗茶灰色を用いた樹木・緑色を用いた葉・赤色の輪線などが認められる。

李朝磁器

椀 (9) 白磁で高台径 5.6 cm を測る。見込みと高台部に砂目跡が確認できる。軸調は青みを帯びた明白灰色を呈し、高台畳付は無軸である。

11SX122 出土遺物 (図 13)

土師器

坏 a (10) 口径 11.4 cm、器高 2.4 cm、底径 7.2 cm を測る。底部外面はヘラ切り後板状圧痕が認められる。底部内面は不定方向のナデ、体部は横ナデで仕上げている。焼成良好で黄灰～橙灰色を呈する。

11SX142 出土遺物 (図 13)

石製品

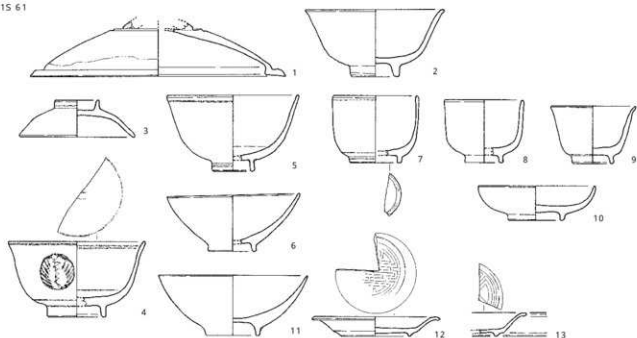
白玉 (11) 滑石製の白玉で、一部欠損している。径約 2.3 cm、厚さ 0.3 cm で、中央には径 0.1 cm の穿孔がある。重量 2.0 g である。

11SX177 出土遺物 (図 13)

石製品

不明品 (12) 滑石製で長さ 4.0 cm、幅 3.6 cm、厚さ 0.5 cm、重量 12.6 g を測る。表面にススが附着している。片面に凹部が残っており 2 次加工のもので、未製品の可能性もある。

11S 61



11S 63

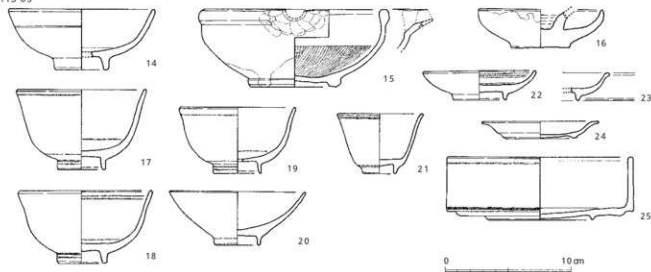


図 14 11S-61・63 出土遺物実測図 (1/3)

11SX200 出土遺物 (図 13)

石製品

茶臼 (13) 砂岩製茶臼の上石の破片で、胴部径 20.0 cm、器高 12.5 cm を測る。底面には茶葉を搗り込むために放射線状のキザミ目が線刻されている。取手を差し込む穿孔跡の周囲には菱形状の陽刻の文様が施されている。

11S-61 出土遺物 (図 14)

国産陶器

蓋 (1) 口径 20.2 cm を測る。口縁部は横に長く屈折している。天井部には取手状のつまみが付いていたが欠損している。体部内外面は回転ナデ後、外面の天井部付近のみ回転ヘラ削りを行なっている。軸調は

素地が見えるほど薄い緑灰色～黄橙色を呈し、口縁部以外に施軸されている。

椀(2) 口径10.9cm、器高5.3cm、高台径3.9cmを測る。見込みにハマを乗せて重ね焼きした痕跡がある。軸調は灰軸で緑白色を呈している。その他に茶緑色軸がかかるが、高台畳付は露胎となっている。肥前産である。

肥前系磁器(染付)

椀蓋(3) 口径9.2cm、器高2.9cmを測る。外面には雲文・草文、見込みに雷文などが呉須で描かれている。

椀(4～6) 口径10.4～10.8cm、器高4.4～6.0cm、高台径3.4～4.6cmを測る。4と5は胴部がやや張り、6は直線的に開いている。4と5は呉須で文様や圏線が描かれている。6はプリント印刷で、胴部外面に赤・青・茶色の文様が施されている。

小坏(7～9) 口径6.3～6.8cm、器高4.5～5.3cm、高台径3.0～4.0cmを測る。7は胴部外面に牡丹の文様を科学呉須で描いている。8の胴部外面には呉須で蝶文が描かれている。9は胴部外面に花・紅葉文がプリント印刷で施文されている。

皿(10) 口径9.3cm、器高2.7cm、高台径4.4cmを測る。見込みに蛇の目軸剥ぎを行う。呉須で草文を描いている。

肥前系磁器(染付以外)

椀(11) 口径11.8cm、器高4.8cm、高台径4.2cmを測る。外面は青緑色の透明軸で内面は無色透明軸になっている。外面には型紙摺の技法で花鳥文が描かれている。

皿(12・13) 12は口径10.1cm、器高1.5cm、高台径5.6cmを測る。ともに白磁小皿で見込みに文様が印刻されている。軸調は透明軸で、素地は乳白色を呈する。

11S-63 出土遺物(図14)

国産陶器

椀(14) 口径11.6cm、器高4.8cm、高台径4.3cmを測る。茶緑色を呈した灰軸を全面施軸しており、畳付は露胎である。見込みに蛇の目軸剥ぎを行なっている。肥前産である。

播鉢(15) 口径15.1cm、器高6.1cm、高台径7.4cmを測る片口の播鉢である。口縁は玉縁状になっている。胴部外面は回転ヘラ削りを行い、口縁部付近は回転ナデで仕上げている。胴部内は櫛描きで描目を施している。鉄軸が底部外面以外に施されている。

灯明皿(16) 受皿の付くもので、上の皿は一部欠損しているが、外反して立ち上がるようである。底部は回転糸切りで、他は回転ナデを施す。軸調は鉄軸で内面を主にして施軸している。肥前産である。

肥前系磁器(染付)

椀(17～20) 口径9.2～10.8cm、器高4.2～6.5cm、高台径3.8～4.0cmを測る。17～19はやや胴が張り内湾しながら立ち上がり、20は直線的に開いている。20の見込みに蛇の目軸剥ぎを行なわれ、体部外面と口縁部外面は型紙摺技法で施文している。

小坏(21) 口径6.8cm、器高4.7cm、高台径2.7cmを測る。外面に呉須で草文を描いている。

皿(22・24) 口径9.0～9.3cm、器高1.3～2.3cm、高台径4.3～5.9cmを測る。22は体部が内湾しながら立ち上がる小皿である。見込みに蛇の目軸剥ぎを行なっている。24は高台が低く、口縁部が外反する。見込みに鳥文が呉須で描かれている。

肥前系磁器(染付以外)

皿(23) 口縁端部がわずかに外反する小皿で、見込みに蝶・トンボ・唐草文をプリント印刷で施文している。

蓋付鉢(25) 口径14.7cm、器高5.0cm、高台径8.4cmを測る。底部と体部の境で大きく屈折し、直線的に立ち上がる。体部外面に赤・緑・茶色などの色絵具で樹木を描いている。口縁端部および底部屈折部は

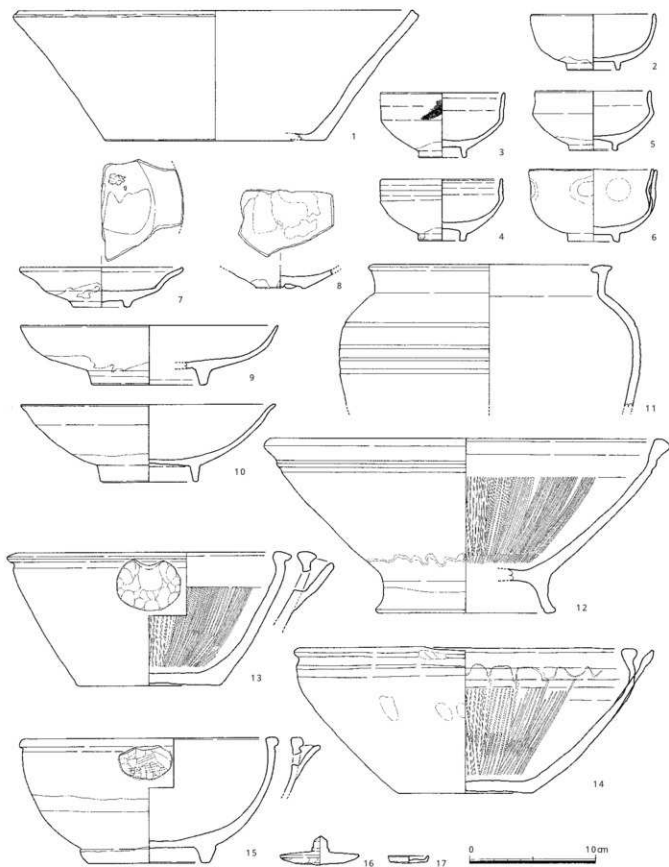


图 15 11S-62 出土遺物実測図① (1/3)

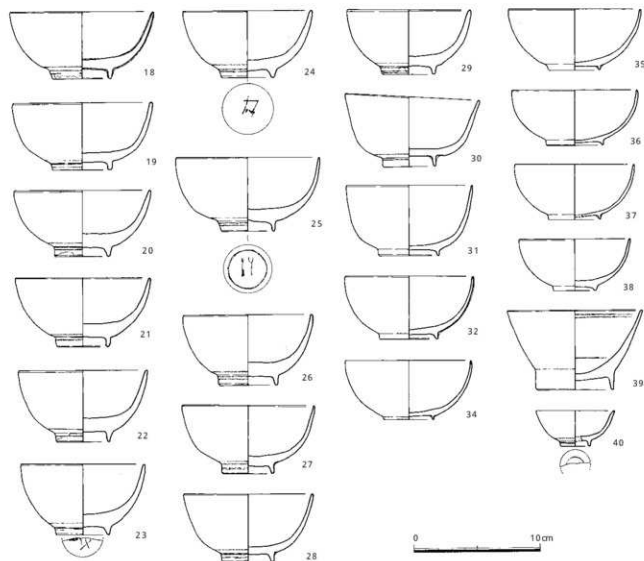


図 16 11S-62 出土遺物実測図② (1/3)

無軸である。

11S-62 出土遺物 (図 15 ~ 17)

土師質土器

鉢 (1) 口径 37.0 cm, 器高 10.2 cm, 底径 17.6 cm を測る。体部は直線的に開く。体部は内外面ともに横ナデを行い、外面はさらにナデで仕上げている。焼成は不良で色調は明黄灰色を呈する。

国産陶器

碗 (2 ~ 6) 口径 9.7 ~ 10.2 cm, 器高 4.3 ~ 5.7 cm, 高台径 3.8 ~ 4.2 cm を測る。2 は京焼風の碗で高台から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、見込みに鉄絵具で文様を描いている。3 ~ 5 は胴部と口縁部の境が内側に「く」の字状に緩く屈曲し、軸に灰釉を使用している。6 は胴部がやや張る碗であるが、胴部をロクロで挽き上げた後口縁部と胴部の境を五方から指で押ししており、口縁部は輪花状になっている。釉薬は鉄釉と灰釉を掛け分けている。

皿 (7 ~ 10) 口径 12.9 ~ 20.3 cm, 器高 3.2 ~ 5.1 cm, 高台径 4.5 ~ 9.2 cm を測る。7 と 8 の見込みに

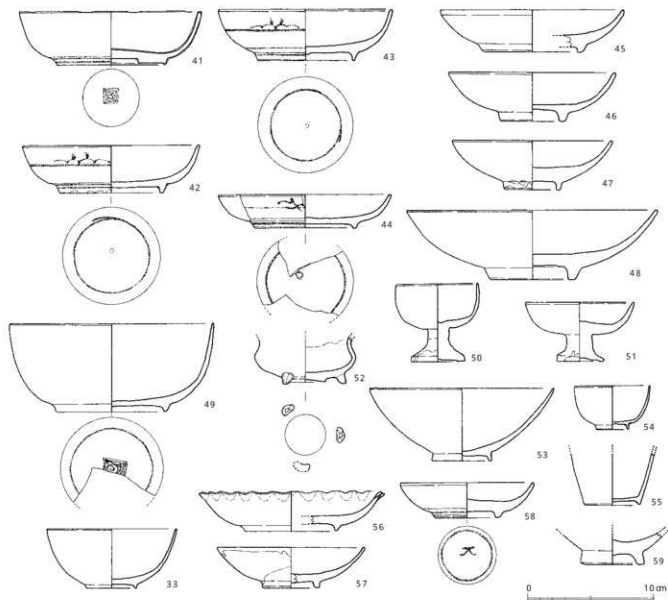


図 17 11S-62 出土遺物実測図③ (1/3)

は砂目積みの跡がある。7は高台から斜め上方に向けて胴部が伸び、口縁部の下方で「く」の字形にゆるく屈折し、口縁部は外反している。8の底部は基筒底状になっている。9と10はやや大きめの肥前産皿である。9の見込みには白化粧土を刷毛で塗った文様と10の見込みには打ち刷毛目文が施され、ともに見込みに蛇の目軸刺ぎを行なっている。

壺 (11) 口径 19.2 cm を測り、口縁部は T 字形を呈する。胴部・口縁部ともに回転ナデで仕上げている。軸葉は鉄軸を使用しており、口縁上端部の軸は回転削りて剥ぎ取っている。肥前産である。

播鉢 (12～14) 口径 22.5～32.0 cm、器高 10.5～13.8 cm、底径 10.6～14.2 cm を測る。ともに外上方に開き、口縁部は玉縁状になっている。播目は櫛描きで、縦方向に施しており、一単位ごとの間隔は狭い。軸葉はどれも鉄軸を使用しており、底部外面以外は施軸されている。12に長脚の高台が付き、13には注口が取り付けられている。

鉢 (15) 口径 20.5 cm、器高 9.9 cm、高台径 9.6 cm を測る片口鉢である。胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は玉縁状になっている。口縁部付近を 1 箇所穿孔し、その部分に注口を取り付けている。胴部外面

上半部と内面は白化粧土で刷毛塗りされている。

瓶蓋 (16) 径6.2cm、高さ2.2cmを測る。宝珠形のつまみが付く。蓋内面は回転糸切り後ナデが行なわれている。蓋外面は鉄軸で施軸されている。

ミニチュア皿 (17) 口径3.2cm、器高0.6cm、底径2.9cmを測る。底部外面はヘラ切り離し、体部は回転ナデで仕上げている。内面に自然軸がかかっている。内外面ともに灰白色を呈する。

肥前系磁器 (染付)

椀 (18～32・34～39) 口径8.8～11.4cm、器高4.1～6.3cm、高台径3.4～6.2cmを測る。18～38は胴部が内湾しながら立ち上がる椀である。18～26のような器壁が肉厚なものと31～32・34～38のような薄手のものがある。18～21の見込みには蛇の目軸剥ぎが行なわれている。26～28はコンニャク印判で施文しており、他は呉須で文様を描いている。また23～25は高台見込みに呉須で文様を描いている。39は広東椀で、外面に呉須で扇子を描いている。

小坏 (40) 口径6.2cm、器高2.8cm、高台径2.4cmを測る。外面に呉須で草花文、高台内に圈線を描いている。

皿 (41～48) 口径12.6～19.8cm、器高2.6～5.5cm、高台径4.4～8.4cmを測る。41～45はやや胴が張り、高台径が大きい皿である。41の見込みには蛇の目軸剥ぎが行われ、高台内に満「福」の銘款がある。42～44の高台内には窯詰めの際に使用したハマのハリ支えの痕跡が認められる。45は見込みを蛇の目軸剥ぎしている。46と47は胴部がわずかに内湾しながら立ち上がり、高台径が小さい皿である。ともに見込みを蛇の目軸剥ぎしている。48はやや大型の皿である。見込みには呉須で花文が描かれ、コンニャク印判で五弁花文が施文されている。また見込みに蛇の目軸剥ぎを行なっている。42・43はセットの一部と考えられる。

鉢 (49) 口径16.2cm、器高6.9cm、高台径8.7cmを測る。高台内には満「福」の銘款が認められる。

仏飯器 (50・51) 50は口径6.4cm、器高6.1cm、脚部径4.2cm、51は口径8.6cm、器高4.6cm、脚部径3.7cmを測る。50は坏部が深く、51は坏部が浅くなっている。高台内は削り出しているが、削り込みは浅い。51の坏部外面には呉須で竹の文様を描かれている。

香炉 (52) 三足が付き、口縁部が欠損している。底径3.2cm、胴部最大径8.0cmを測り、腰の張り出しは丸みを帯びている。底部は回転ヘラ削りを行う。外面は唐草文が呉須で描かれている。内面は無軸で、砂粒が付着している。

肥前系磁器 (染付以外)

椀 (33・53) 色絵椀である。33は口径10.2cm、器高4.7cm、高台径4.0cmを測る。丸い体部外面に朱色で蓮・あやめを描いている。53は口径14.6cm、器高5.8cm、高台径4.7cmを測る。体部は直線的に開く。見込みに赤・黄・緑で牡丹文を描く。

小坏 (54) 白磁で口径6.0cm、器高3.4cm、高台径2.6cmを測る。器壁は薄手である。

そば猪口 (55) 白磁で胴部は直線的に外上方に開く。軸調は明白灰色の半透明軸が内外面ともに施軸されている。高台量付は無軸である。

皿 (56～58) 口径10.6～14.6cm、器高2.8～3.2cm、高台径4.6～7.4cmを測る。56は白磁で、口縁部は指押えで波状に変形させている。57は青磁で、見込みに蛇の目軸剥ぎを行なっている。58は染付色絵皿で、見込みはコンニャク印判で五弁花文や円文などを染付けし本焼きした後、その上から朱色で草花文を描いている。

李朝陶器

椀 (59) 高台径5.0cmを測る。黄灰白色のきめが粗い胎土に明茶灰色の不透明軸が掛かっている。外面体部下半から底部にかけては施軸していない。

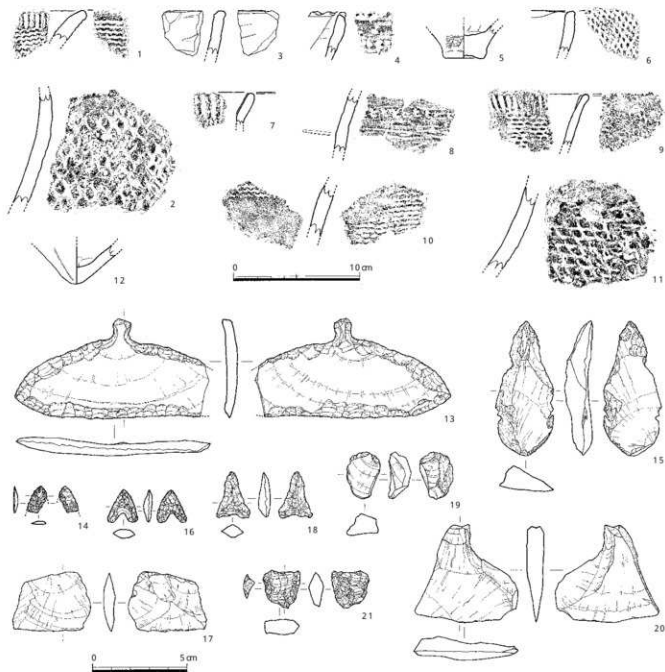


図 18 下層包含層出土遺物実測図 (1/2・1/3)

下層包含層出土遺物 (図 18)

縄文土器

1は押型土器深鉢の口縁部片で、外反している。外面には山形文の施文があり、内面の口縁直下に縦の沈線文が施文され、その下に山形文が横走施文されている。胎土に角閃石を少量含んでいる。取り上げ番号 18。2は押型土器深鉢の胴部破片である。外面には粗大な楕円文が施されている。内面はナデで仕上げている。胎土に角閃石をわずかに含んでいる。取り上げ番号 34。3は無文土器深鉢の口縁片である。内面外面ともに工具によるナデで仕上げている。焼成は良好で、色調は内面が明黄褐色、外面が暗茶褐色を呈する。胎土に角閃石を少量含む。取り上げ番号 56。4は深鉢の口縁部破片である。外面は貝殻腹縁

部を押圧して施文している。口縁上端は横ナデの後、指による押圧成形を行い、凹凸が付いている。胎土に角閃石の微細片を少量含んでいる。取り上げ番号60。6は押型文土器の深鉢口縁片である。外面には楕円文が施文され、内面はナデを行なっている。取り上げ番号67。7は押型文土器の深鉢口縁片である。内面はナデ調整を行い、外面は口縁直下に原体条痕による縦方向の沈線文、その下に山形文を施文している。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐橙色を呈する。取り上げ番号68。8は貝殻条痕文土器の深鉢体部片である。外面には横方向の貝殻条痕文と貝殻縁による刺突文が認められる。内面は工具によるナデで仕上げている。胎土に長石・石英粒を少量含む。取り上げ番号81。9は押型文土器の深鉢口縁片である。体部外面は縦方向の楕円文、体部内面には横方向の楕円文が施文されている。口縁内面直下に縦方向の短沈線文が施文されている。取り上げ番号184。10は押型文土器の深鉢体部片である。内外面に山形文が施文されている。胎土に角閃石の微細片を少量含む。取り上げ番号253。11は押型文土器の深鉢体部片である。外面に粗大な楕円文が施文され、内面はナデで仕上げている。焼成は良好で、色調は外面が褐黒色、内面が橙褐色を呈する。取り上げ番号312。12は深鉢で尖底の底部破片である。外面は工具によるナデ、内面には指頭痕が残る。胎土に石英・長石粒を多く含む。取り上げ番号384。

弥生土器

5は小壺の底部片である。外面は横方向のハケ調整を行い、内面は工具によるナデを行っている。焼成は良好で、色調は外面が明橙褐色、内面が明橙白色を呈する。取り上げ番号64。

石製品

13は安山岩製の打製石匙である。一部欠損しているが長さ10.3cm、幅5.3cm、厚み0.6cm、重量37.1gを測る。横長の翼状剥片を使用している。取り上げ番号29。14は黒曜石製の用途不明品である。長さ1.4cm、幅1.0cm、厚み0.2cm、重量0.2gを測る。表面は刃部の加工を行なっているが、裏面には見られない。欠損した部分に刃部再生のリタッチが入っている。取り上げ番号30。15は玄武岩製の木の葉形尖頭器である。長さ7.1cm、最大幅3.0cm、最大厚1.3cm、重量23.6gを測る。縦長剥片を使用しており、先端部と基部を加工しているが、一部自然面も残っている。取り上げ番号70。16は姫島産黒曜石製の打製石鎌である。長さ1.7cm、幅1.5cm、厚み0.4cm、重量0.6gを測る。基部に深い抉りを持つ。取り上げ番号87。17は安山岩の横長剥片を使用した剥片石器である。長さ3.1cm、幅4.1cm、厚み0.6cm、重量8.4gを測る。側縁部に歯ツブシ加工を行なっている。取り上げ番号123。18は安山岩製の打製石鎌である。長さ2.4cm、幅1.7cm、最大厚み0.6cm、重量1.6gを測る。基部に浅い抉りを持つ。取り上げ番号151。19は針尾島産の黒曜石残核である。長さ2.5cm、幅1.6cm、厚み1.0cmを測る。取り上げ番号152。20は安山岩製の石匙と考えられる。長さ5.2cm、幅5.5cm、厚み0.9cm、重量20.8gを測る。剥片をそのまま利用しており、刃部の加工は特に行っていない。刃部には使用に伴う刃こぼれの痕跡が観察できる。取り上げ番号280。21は黒曜石製の用途不明品である。長さ2.0cm、幅2.0cm、厚み0.8cm、重量2.7gを測る。取り上げ番号376。

黄色土（包含層）出土遺物（図19）

土師質土器

鍋（2） 体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は玉縁状になっている。体部は内外面ともにハケ目調整後ナデで仕上げている。体部外面には全体的にススが厚く付着している。

国産陶器

碗（3） 口径11.4cm、器高4.7cm、高台径4.4cmを測る。釉薬に鉄釉を使用しているが、高台は露胎となっている。また見込みは蛇の目軸剥ぎを行なっている。肥前産である。

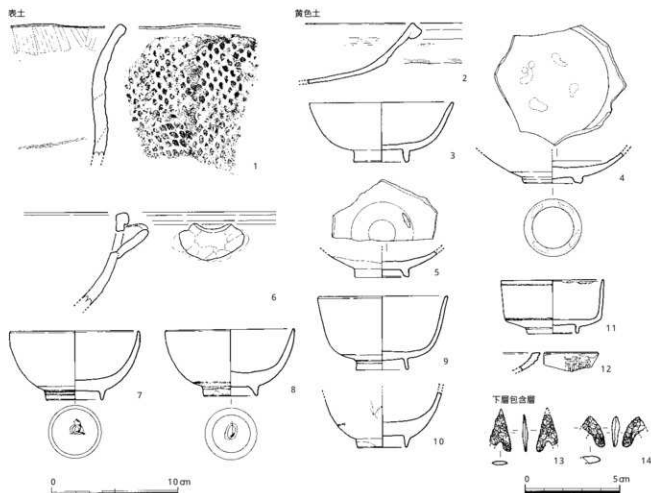


図 19 黄色土・下層包含層・表土出土遺物実測図 (1/2・1/3)

皿 (4・5) 高台径 4.5・4.2 cm を測る。4 は見込みと高台畳付の部分には重ね焼きした際の砂目積みの跡がある。5 は見込みを蛇の目軸剥ぎしており、その部分に磁器を重ね焼きした際についた付着物が認められる。ともに肥前産である。

鉢 (6) 注口が付く片口鉢である。口縁部は玉縁状になっている。器面の装飾は白化粧土で刷毛塗りしている。外面は波状文、内面は横走文である。

肥前系磁器 (染付)

椀 (7～11) 口径 8.2～10.2 cm、器高 4.2～5.8 cm、高台径 3.8～4.4 cm を測る。7～10 は体部が内湾しながら立ち上がる椀である。7 は体部外面にコンニャク印判で桐文を施文している。8 の外面には草花文、9 の外面には網目文、10 の外面には草文が呉須で描かれている。7 と 9 の高台内には文字が崩れた満「福」の銘款が認められる。11 は器高が低い筒型椀である。高台畳付に砂粒が付着している。体部外面に草文が呉須で描かれている。

肥前系磁器 (染付以外)

紅皿 (12) 白磁で外面には型押し成形で、「福」という文字が陽刻されている。

下層包含層出土遺物 (図 19)

取り上げ番号の無い、出土地点不明の遺物である。

石器

石織 (13・14) とともに黒曜石製の打製石織で、13は姫島産である。ともに基部に深い抉りをもつが、13は先端部と基部、14は基部が欠損している。長さ1.9・1.6 cm、幅1.1・1.2 cm、厚み0.2・0.4 cm、重量0.3・0.4 gを測る。

表土出土遺物 (図 19)

縄文土器

深鉢 (1) 押型文土器の深鉢片で、口縁部は外反している。外面は粗大な楕円文が縦・斜め方向に施文されている。口縁部内面には縦位の原体条痕が施され、胴部内面はナデで仕上げている。胎土に角閃石を少量含む。

(5) 小結

1) 各遺構の時期について

竪穴式住居

11S1001 高坏・壺・鉢が出土している。高坏は体部で段を持ちそこから口縁部までやや外反しながら立ち上がり、脚部は円錐状になっている。壺の口縁は直立に立ち、頸部径が胴部最大径の50%前後と細くなっている。これらの特徴からⅢ a 期にあたり、4世紀代後半の時期が考えられる。

11S1005 丸底坏・小型器台・甕が出土している。丸底坏の体部外面はヘラ削り後ハケ状工具でナデを行い、体部内面は丁寧な横ナデで仕上げている。小型器台は端部をつまみ上げた皿状の受け部と円錐状の台部をもつ庄内式特有のものである。甕は胴部が球胴形を呈し、口縁部は端部を内面につまみ上げている特徴をもつ。Ⅱ b 期の段階のもので、4世紀代前半の時期が考えられる。

11S1100 出土遺物は弥生土器甕の底部片1点のみである。遺構の平面プランが円形であることから弥生時代前期後半から中期前半にかけての時期が考えられる。

その他の遺構

11S-61・63 国産陶器では肥前産の椀・灯明皿が出土している。また肥前系磁器では染付の椀蓋・椀・小坏・皿、染付以外では色絵蓋付鉢・青磁椀・白磁皿などが出土している。もっとも出土量が多い染付磁器の椀・小坏・皿を見てみると直線的に開く椀、高台脇より高台内が深くなっているもの、型紙摺りで施文したもの、文様に雷文を用いたものなどⅣ～Ⅴ期の18世紀から幕末にかけての特徴を持つものが多いようである。中には科学兵須やプリント印刷で施文したのがあり、明治時代以降の磁器もある。

11S-62 主な出土遺物は肥前産陶器の椀・皿・壺、肥前系磁器の椀・皿・大椀・仏飯具などの染付製品、染付以外では色絵椀、白磁の皿・小坏・そば猪口などが出土している。出土量が多い染付椀・皿を見てみると見込みで蛇の目輪刺ぎを行ったり、コンニャク印判、薄手の椀、広東椀などⅣ～Ⅴ期の18世紀から幕末にかけての特徴を持つ。11S-61・63・62は近世末から近代にかけての遺物が廃棄される場所でありその後も現代まで使用されていたと考えられる。

下層包含層 縄文土器の押型文土器、無文土器と弥生土器片が出土している。押型文土器は縄文時代早期に位置付けられる土器であるが、口縁部が直線的に立ち上がり体部に山形文が横位施文されている稲荷山式、口縁部がやや開き気味に立ち上がり口縁部内面に原体条痕が施され外面の押型文文様が縦方向の楕円文になる下管生B式、粗大な楕円文が付く田村式などいくつかの形式がある。

2) 牛の埋葬について

11SX074からは牛骨が一体検出された。近世以降の牛は農耕用・運搬用・挽車用や家畜用として重宝されているが、一般的に前者の役割を終えた老牛や家畜用の牛は皮・骨角製品や肉などの有効資源として利用するため屠殺し解体するのが一般的であったようで、解体されないで埋葬されることはむしろ稀である。

今回検出された牛骨は本来の原型を保ち、骨には斧など骨や肉を取るために解体した痕跡が認められない。老衰や病気などで死に至り、そのままの埋葬したものと考えられる。同様な牛の埋葬土壌は、宮ノ本丘陵裾部に位置する前田遺跡 14 次調査（未報告）でも確認されている。

3) まとめ

本調査では弥生時代前期後半から中期前半の竪穴式住居 1 棟と古墳時代前期の竪穴式住居を 2 棟、近世以降の牛埋葬墓 1 基、東西方向に並行して走る 2 本の溝状遺構などを検出した。宮ノ本遺跡や丘陵裾部の前田遺跡は近年の区画整理事業によって広範囲にわたる調査が行なわれているが、弥生時代前期後半から中期にかけての集落は原口遺跡に次ぐものである。今回確認した住居は微高地で見晴らしのよい場所に単独で形成されている。古墳時代前期の住居は宮ノ本遺跡・前田遺跡、大佐野川対岸の尾崎遺跡などで確認されており、この時期は比較的広範囲にわたって集落が形成されていたようである。

宮ノ本遺跡は古代の官人墓地遺跡としても位置付けされているが、今次の調査では確認できなかった。下層包含層からは縄文時代の押型文土器・無文土器・打製石器が数多く出土した。宮ノ本丘陵では縄文時代早期の集落などの遺構は確認できていないが、押型文土器の中で大きく 3 形式に分けることができ、周辺地域に継続的に集落が形成されていた可能性が考えられる。

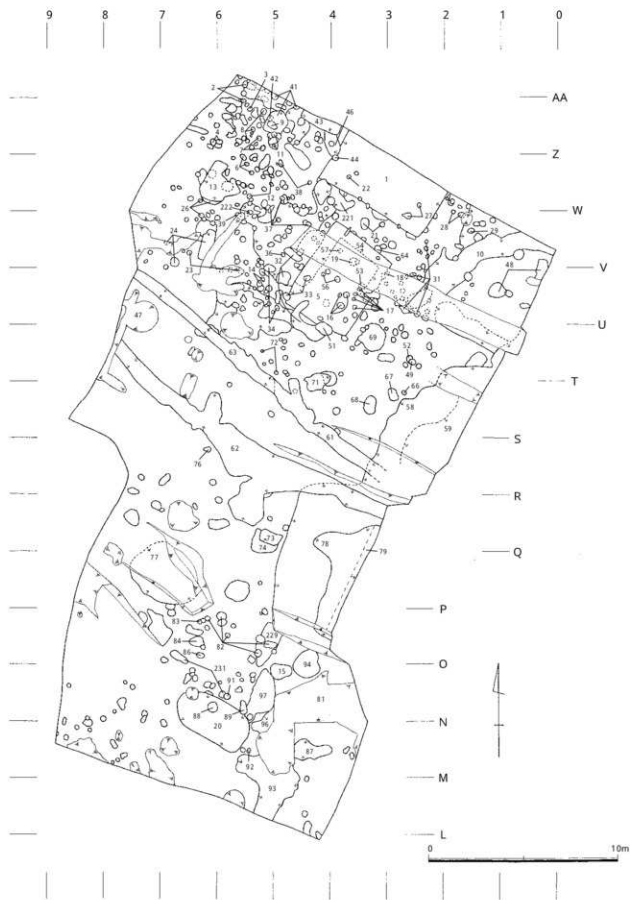


図20 第11次調査略測図① (1/200)

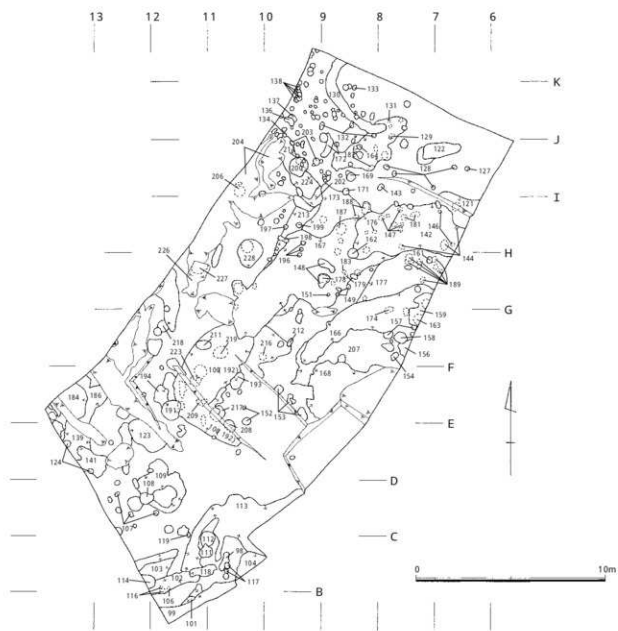


図21 第11次調査略測図② (1/200)

第 11 次調査遺構一覧①

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年表に基づく。

S-番号	遺構番号	遺構種別	埋土状況(古→新)	前後関係(古→新)	時期	備考	地区番号
1	11S1001	竪穴式住居	a、e、c→下層 黒色土→下層橙色土→ h→黒色土→橙色土→ a、b、c、d、e、f、g →茶色土→暗茶色土→ 黒褐色土	1→22・27・46	古墳前期	柱穴・浅い側溝・貼り 床有り	W3
2		小穴群					AA5
3		小穴				攪乱?	Z5
4		小穴群			中世		Z5
5	11S1005	竪穴式住居	暗灰色土(小穴)→茶 褐色土→黒褐色土	53・54・ 64→5→16・17・ 33・51・56	古墳前期	ベット状遺構有り	U3
6		小穴群				2段穴(落とし穴の棒 立て穴か)	W5
7		小穴群				2段穴(落とし穴の棒 立て穴か)	Z5
8		小穴群			奈良		Z5
9		小穴	淡茶灰色土	41→9			Z5
10	11SD010	溝	灰白色砂質土→黒茶色 砂質土		奈良		V1
11		小穴群	淡茶灰色土	41→11			Z5
12		小穴群					W5
13		たまり	黒褐色土	26→13			W5
14		小穴群					U5
15	11SX015	小穴	褐色土		古墳前期 (布留 式)		N4
16		小穴群		5→16			U3
17		小穴群		5→17			U3
18		小穴					U3
19		小穴	淡茶灰色土	5→19			V3
20		土坑	灰茶色土	20→88	古墳		N6
21		小穴群			弥生中		V3
22		小穴		1→22			W3
23		小穴群					U5
24		小穴及び溝 (攪乱)					V6
25		欠番					
26		小穴群	茶色土まだら	26→13			W6
27		小穴群		1→27	古墳		V2
28	11SX028	小穴群					V1
29		小穴					V1
30							
31		小穴群					U2
32		小穴群(攪 乱?)			近現代	レンガ・豆炭出土	U4
33		小穴群		5→33	古墳前期		U4
34		小穴群					U4
35		欠番					
36		小穴					V4
37		小穴群					V4
38		小穴群					W4
39		小穴			古墳前期		V5
40		欠番					
41		小穴群		42→41	奈良		Z4
42		小穴		42→41			Z5
43		土坑		46→43			Z4
44		小穴			古墳前期		W3
45		欠番					
46		土坑		1→46→43	古墳		Z4
47		攪乱					T7
48		小穴群			古墳		U0
49		小穴		52→49	古墳前期		T2
50		欠番					

第 11 次調査遺構一覧②

S-番号	遺構番号	遺構種別	埋土状況(古→新)	前後関係(古→新)	時期	備考	地区番号
51		土坑		5→32→51	近代	近代瓦出土	T4
52		小穴		52→49			T2
53		小穴	茶褐色土		古墳前期	S-5に伴う小穴	U3
54		住居側溝	茶褐色土+暗灰色土		古墳前期	S-5に伴う側溝	V3
55		欠番					
56		小穴		5→56			U4
57		小穴		57→5			U4
58	11SX058	落ち	暗褐色土	58→59	近現代	古い落ちを埋めたもの	東側沿い
59	11SX058	落ち	白色土+暗灰色土	58→59	近現代	59の下層にあたる	東側沿い
60		欠番					
61	11S-61	攪乱溝			近現代	S-63と同一	R3
62	11S-62	攪乱溝			近現代	S-61・62と並行	S6
63	11S-63	攪乱溝			近現代	S-61と同一	T6
64		小穴	黒色土	5→64	古墳		V3
65		欠番					
66		小穴	黒色土				S2
67		小穴	茶色土				S2
68		土坑	茶色土				S3
69		土坑	茶色土				T3
70		欠番					
71		たまり	黒色土+黄色土		古墳		T4
72		小穴群	茶色土				T5
73		土坑	灰色土+黄色土	74→73		攪乱か?	Q5
74	11SX074	土坑	黒茶色土	74→73	近現代	牛を埋葬した土坑	Q5
75		欠番					
76		小穴	灰色土		古墳		R6
77	11SX077	たまり	灰色砂+黄色土		近現代	攪乱か?	P6
78	11SX078	落ち	黄色土+黒褐色土	79→78	近現代	S-58とは異なる	P3
79	11SX079	落ち	白黄色粘質土	79→78	中世		P3
80		欠番					
81		攪乱		96・97→81			N4
82		小穴群	茶色土・褐色土	229→82			O5
83		小穴	暗灰色土				O6
84		小穴	こげ茶色土				O6
85		欠番					
86		小穴	黒色土				O6
87		土坑	茶色土				M4
88		小穴	黒色土	20→88			N6
89		小穴	黒色土	97→20→89			N5
90		欠番					
91		小穴	褐色土	231→91			N5
92		小穴	黒色土				M5
93		たまり	暗茶土		近現代		M5
94		土坑	茶色土		近世		O4
95		欠番					
96		たまり	茶色土	96→81			N5
97		たまり	白色土+黒色土+まだら	97→81・89・20			N5
98		たまり?	淡茶色土	98→117			B10
99		落ち	茶褐色土	101→99			A11
100	11S1100	竪穴式住居	黒色土→茶黄色土→淡茶灰色土→茶色土	208・209・216・217・219・223→100(192)→167・191・193・211・212	弥生前期後半～中期	円形プラン、柱穴・中央土坑有り。S-192と同一。	E11
101		小穴?	茶色土	101→99			A11
102	11SD102	溝状	褐色土	103・106・116→102→113・114・118	古墳		B11
103		溝状	茶色土	103→102→114			B11
104		たまり	暗灰色土+黄色土				B10
105		欠番					

第11次調査遺構一覧③

S-番号	遺構番号	遺構種別	埋土状況(古→新)	前後関係(古→新)	時期	備考	地区番号
106		小穴	黒褐色土	106→102			B11
107		小穴群	黒色土・灰色土				C12
108		小穴	明茶色土	109→108			C12
109		周溝	暗灰色土+黄灰色土	109→108			C11
110		欠番					
111		小穴	黒色土	113→112→111			B11
112		小穴	茶色土	113→112→111			B11
113		たまり	茶色土+黄色土~青灰色砂質土	102→113→111 ・112・118			C10
114		小穴	褐色土	103→102→114			B12
115		欠番					
116		小穴群	黒褐色土	116→102			B11
117		小穴群	褐色土	98→117			B10
118		小穴	褐色土+黄色土	102→113→118			B11
119		小穴	茶色土				C11
120		欠番					
121		落ち	暗褐色土				H6
122	11SX122	土坑	暗茶色土		平安前期	土坑墓の可能性有り	16
123		土坑	青黄灰色土				D12
124		小穴群	灰色土	139→141→124	現代	木の根穴?	D13
125		欠番					
126		たまり	黒茶まだら色土	129・131・ 182→126→130 ・132・164			J7
127		小穴	淡灰色土		古墳前期		16
128		小穴群	茶色土・灰色土・暗褐色土・黒色土				17
129		小穴	茶色土	129→126			17
130		溝	黒色土	126→130	古代	浅い	18
131		小穴	黒色土	131→126			17
132		小穴	灰色土・暗灰色土・暗茶色土	126→132→130			J8
133		小穴	暗灰色土				J8
134		小穴	灰色土	224→134			J9
135		欠番					
136		小穴	灰色土	137→136			J9
137		小穴	茶色土	137→136			J9
138		小穴群	茶色土・灰色土				J9
139		たまり	暗茶灰色土	139→141→124			D13
140		欠番					
141		たまり	暗褐色土	139→141→124		土坑?	D13
142	11SX142	たまり	暗黒灰色土	173・144・146・ 147・167・176・ 177・ 181→142→162		包含層	H7
143		小穴	灰黄色土				17
144		小穴群	黒色土	144→142		根穴か?	H6
145		欠番					
146		小穴群	暗茶色土・褐色土	146→142			H6
147		小穴群	暗茶色土	147→142	古墳		H7
148		土坑群	褐色土	178→167→148	古墳		G8
149		小穴群	褐色土・茶色土	167→149			G8
150		欠番					
151		小穴		167→151			G8
152	11SI100	小穴群	暗茶色土・黄茶色土				E10
153	11SI100	小穴群	褐色土・茶色土・淡茶色土				E9
154		小穴	茶色土	207→154			F7
155		欠番					
156		小穴	茶色土	207→156→158			F7
157		小穴群	灰色土・灰茶色土	207→166→157			F7
158		小穴	こげ茶色土	207→166→156 →158			F7
159		土坑	褐色土	166・163→159	古墳		F7
160		欠番					
161		小穴	暗茶色土	189→177→161			G7
162		小穴	灰色土	167→142→162		攪乱?	H8
163		小穴	暗灰茶色土	166・163→159	古墳前期		F7
164		小穴	茶色土	182→126→164			18
165		欠番					

第 11 次調査遺構一覧④

S-番号	遺構番号	遺構種別	埋土状況(古→新)	前後関係(古→新)	時 期	備 考	地区番号
166	11SX166	溝状	マサ土+暗茶色土	174・177・ 207→166→159	古墳前期		G8
167		たまり	茶黄色土→暗茶～茶色土	173→178・179・ 183・187・188・ 192・ 213→167→142・ 148・149・151・ 162・196・198	古墳	包含層、S-142と同 一?	H8
168		たまり	茶色土	207→168	中世	包含層、S-142と同 一?	E8
169		小穴	灰色土				I8
170		欠番					
171		小穴	灰茶色土	173→171			I8
172		小穴群	灰色土				I8
173		たまり(包 含層)	茶色土	188・202・ 213→173→171			H8
174		小穴	暗茶色土	174→166			G7
175		欠番					
176		小穴	黒色土	176→142			H8
177	11SX177	たまり	灰茶色土	149・ 189→177→142・ 161・166			G7
178		小穴	茶色土	178→167→148			G8
179		小穴	黒色土	179→167			G8
180		欠番					
181		小穴群	淡茶色土	181→142			H7
182		小穴群	灰色土・茶色土	182→126			I8
183		小穴	黒色土	183→167			G8
184		たまり	灰茶色土	186→184	中世		E13
185		欠番					
186		たまり		186→184			E13
187		小穴	茶色土	187→167			H8
188		小穴群	暗茶色土	188→173→167			H8
189		小穴群	茶色土・褐色土	189→177→161			G7
190		欠番					
191		土坑	暗茶色土+暗灰色土	192・194→191			E11
192	11SI100	竪穴式住居	黒色土→茶黄色土→茶 色土	208・209・216・ 217・219・ 223→192 (100)→191・ 193・211・212	弥生	掘り下げ途中で円形住 居と判明、S-100に変 更	E11
193	11SI100	小穴	黒色土	192(100) →193	弥生	11SI100の炉の可能性 有り	E10
194		土坑	暗灰色土	192(100)・ 194→191			E11
195		欠番					
196		小穴群	暗灰色土	167→196			H9
197		小穴	褐色土	213→197			H9
198		小穴群	暗灰色土	213→167→198			H9
199		小穴	黒色土	213→199			H9
200	11SX200	土坑	灰褐色土	214・224→200			I9
201		小穴	灰色土	213→201			G9
202		土坑	暗褐色土	213・ 224→202→173			I9
203		小穴群	茶色土	224→203			I9
204		たまり	灰～黒色土	224→204→226		攪乱?	I9
205		欠番					
206		小穴	褐色土	206→204			I10
207		たまり	茶まだら色土	207→154・ 156・157・158・ 166・168			E9
208		小穴	濃茶色土	208→192 (100)	弥生	11SI100の炉の可能性 有り	E10
209		小穴	暗灰色土	209→192 (100)	弥生		F11
210		欠番					

第11次調査遺構一覧⑤

S-番号	遺構番号	遺構種別	埋土状況(古→新)	前後関係(古→新)	時期	備考	地区番号
211		小穴	暗灰色土	192(100) →211			F11
212		小穴	暗灰色土	192(100) →212			F9
213		たまり	淡茶灰色土	213→167・173・ 197・198・199・ 201・202			H9
214		小穴	暗褐色土	214→200			I9
215		欠番					
216	11S1100	小穴		216→192 (100)	弥生	11S1100の柱穴	F10
217	11S1100	小穴	淡灰茶色土	217→192 (100)	弥生	11S1100の柱穴	E10
218		小穴					F11
219	11S1100	小穴		219→192 (100)	弥生	11S1100の柱穴	F10
220							
221		土坑	白灰色土	221→1			W3
222		小穴					W5
223	11S1100	小穴		223→192 (100)	弥生	11S1100の柱穴	E11
224		土坑	灰色土+黄色土	224→134・200・ 202・203・204			I9
225		欠番					
226		たまり	暗灰色土	204・227→226			G11
227		小穴		227→226			G11
228		小穴	灰色土				H10
229		土坑	黒色砂質土	229→58・82			O5
230		欠番					
231		小穴群		231→91			N6

第 11 次調査出土遺物一覧表①

5-1a [*] 土 師 陶片	5-6 土 師 陶片	5-26 土 師 陶片
5-1a 土 師 陶片	5-7 土 師 陶片	5-31 土 師 陶器台、壺×壺 弥生土 陶片
5-1g 土 師 陶片	5-8 須 惠 焼杯 土 師 陶片	5-32 須 惠 焼杯蓋1 土 師 陶器、壺 瓦 質 土 師器鉢、片 須 惠 焼 壺 弥 生 土 陶片 土 師 高レンガ、瓦 (近代~) そ の 他 瓦葺
5-1a [*] 土 師 陶片	5-9 土 師 陶片	5-33 土 師 陶器 (布甕) 、 壺
5-a [*] 土 師 陶片	5-10 須 惠 焼壺×壺 土 師 焼杯a、壺、壺 弥 生 土 陶器、壺	5-34 土 師 陶器、壺
5-1a [*] 褐色土 土 師 陶片	5-11 土 師 陶片	5-36 土 師 陶器 (布甕)
5-17 緑褐色土 石 製 品 丸石	5-12 土 師 陶片	5-38 須 惠 焼杯蓋1
5-1d 土 師 陶 小型丸底壺、壺 縄 文 土 陶片?	5-13 須 惠 焼壺 土 師 陶片	5-37 土 師 陶器×壺
5-1h 石 製 品 フレイク (sh)	5-14 土 師 陶片	5-38 土 師 陶片
5-1f 土 師 陶片	5-15 土 師 陶器 (布甕) 、 壺 (蓋口) 、 壺 (陶底)	5-39 土 師 陶器 (布甕)
5-1 灰色土 土 師 陶 高坪、部分、壺、小型丸底壺、壺 石 製 品 丸石 陶 産 陶 陶片 弥 生 土 陶器、壺	5-16 土 師 陶片 弥 生 土 陶器	5-41 須 惠 焼鉢a 土 師 陶片 瓦 陶片
5-1 緑褐色土 土 師 陶 高坪、部分、壺 (ラッパ口) 、 壺 (布甕) 、 小型丸底壺、鉢、小鉢 (平ずく鉢) 石 製 品 フレイク (sh+and)、石鏃 (sh)、丸石 弥 生 土 陶器、片 そ の 他 花崗岩類、石英	5-17 土 師 陶器、壺	5-42 白 磁 壺×壺
5-1 黒褐色土 土 師 陶 高坪、壺 (布甕) 蓋り、壺口、壺、小型丸底壺 弥 生 土 陶器 赤 黒 陶 品 鉄釘	5-18 土 師 陶片	5-43 土 師 焼杯 (ヘラ) 、 壺、壺
5-1 灰色土 土 師 陶片 肥前 高 陶 陶器 (漆付)	5-19 土 師 陶器、片	5-44 土 師 陶器、片 弥 生 土 陶片
5-2 土 師 陶片	5-20 土 師 陶 高坪C型、壺、壺 石 製 品 石鏃 (sh)、チップ (sh)	5-46 土 師 陶 高坪、壺、片 弥 生 土 陶器
5-3 土 師 陶片	5-21 弥 生 土 陶器、壺	5-47 土 師 陶片
5-4 瓦 質 土 師 次壺	5-22 土 師 陶片	5-48 須 惠 陶器×壺 土 師 陶片 弥 生 土 陶片
5-5 漆器 石 製 品 石鏃 (sh) 赤 黒 陶 品 鉄釘	5-23 土 師 陶片	5-49 土 師 陶器、鉢、片
5-5 緑褐色土 須 惠 陶片 土 師 陶 鉢、高坪、小型器台、壺 (布甕) 、 壺り、壺 石 製 品 フレイク (sh) 弥 生 土 陶器×壺 (成形レンズ状) 、 蓋口、壺G 土 師 品 人形	5-24 土 師 陶器 (布甕) 、 壺 瓦 質 土 師片? 弥 生 土 陶器	5-51 土 師 陶器、片 瓦 陶片 (近代~)
5-6 緑褐色土 土 師 陶 高坪、壺、壺 (布甕) 弥 生 土 陶器、壺 (陶光口縁)	5-26 土 師 陶片	5-52 土 師 陶片
	5-27 土 師 陶 高坪、壺、壺、片	5-53 土 師 陶鉢
	5-28 土 師 陶片 縄 文 土 師器鉢 (押型文)	5-54 土 師 陶器、片 弥 生 土 師器台、壺、壺 (漆器) 、 片

第 11 次調査出土遺物一覧表③

5-114	土 師 器 片 弥 生 土 器 片	5-136	土 師 器 片	5-167	須 惠 器 伊 集、片 土 師 器 高 坪、器 台、壺、甕、片 石 製 品 フレイク (and・ob)、残 核 (ob) 弥 生 土 器 器 片 そ の 他 石 瓦 塊
5-118	土 師 器 器、片	5-139	土 師 器 器 片	5-168	須 惠 器 須 惠×壺、片 土 師 器 器 片×(イト) 高 坪、器 台、壺、甕、片 瓦 質 土 師 器 片 弥 生 土 師 器、壺、器 胎 (中 期)
5-117	土 師 器 器 片 弥 生 土 師 器 片	5-141	土 師 器 器 片 弥 生 土 師 器 片	5-169	須 惠 器 須 惠×壺、片 土 師 器 器 片×(イト) 高 坪、器 台、壺、甕、片 瓦 質 土 師 器 片 弥 生 土 師 器、壺、器 胎 (中 期)
5-119	土 師 器 器 石 製 品 フレイク (and) 弥 生 土 師 器 片	5-142	須 惠 器 器 片 土 師 器 器 台、壺、甕、片 石 製 品 フレイク (and)、チップ (ob)、臼 底 (薄 石) 弥 生 土 師 器 (後 期)	5-170	須 惠 器 須 惠×壺、片 土 師 器 器 片 石 製 品 フレイク (and)
5-121	土 師 器 器 片 弥 生 土 師 器 片	5-143	石 製 品 チップ (ob)	5-171	土 師 器 器 片 石 製 品 フレイク (and)
5-122	須 惠 器 器 片 土 師 器 器 片×(ヘラ)、片	5-144	土 師 器 器 器、鉢 (壺 口)、片	5-172	土 師 器 器 片
5-123	土 師 器 器 片	5-146	土 師 器 器 器、片	5-173	土 師 器 器 器 台、壺 石 製 品 フレイク (and・ob) 弥 生 土 師 器 片
5-124	土 師 器 器 片 瓦 器 片 (いぶし) 石 製 品 平 瓦 石 陶 器 陶 器 片 弥 生 土 師 器 片	5-148	土 師 器 器 片 弥 生 土 師 器 片	5-174	土 師 器 器 片
5-126	土 師 器 器 片	5-149	土 師 器 器 片 弥 生 土 師 器 片	5-177	須 惠 器 須 惠 壺 土 師 器 器 高 坪、壺、甕、器 胎 手 石 製 品 チップ (ob)、不 明 品 (薄 石)
5-127	土 師 器 器 器 A3b (山 崎 高)	5-151	土 師 器 器 器、片 石 製 品 フレイク (ob)	5-178	土 師 器 器 片
5-128	須 惠 器 器 片 土 師 器 器 片	5-152	土 師 器 器 片	5-179	土 師 器 器 片
5-129	石 製 品 フレイク (and)、チップ (and)	5-153	土 師 器 器 片 石 製 品 フレイク (and)	5-181	土 師 器 器 片
5-130	須 惠 器 器 器、片 土 師 器 器 片×小 皿 a、片、壺、甕、片 弥 生 土 師 器 片 縄 文 土 師 器 片	5-156	土 師 器 器 器、鉢 石 製 品 丸 石 (磨 石)	5-182	土 師 器 器 片
5-131	土 師 器 器 片 弥 生 土 師 器 片	5-157	土 師 器 器 片	5-184	土 師 器 器 小 皿 a (イト)、片
5-132	須 惠 器 器 片 (古 代 7) 土 師 器 器 片	5-158	土 師 器 器 器、壺、小 鉢 (平 づ ね)	5-186	須 惠 器 器 片 土 師 器 器 片
5-133	土 師 器 器 片	5-159	土 師 器 器 高 坪、壺、鉢 弥 生 土 師 器 器、壺 (中 期)、片	5-187	土 師 器 器 片
5-134	土 師 器 器 片	5-161	土 師 器 器 片	5-188	土 師 器 器 片 縄 文 土 師 器 片
5-136	土 師 器 器 片 陶 器 陶 器 片	5-162	土 師 器 器 片	5-189	土 師 器 器 高 坪、壺、甕、片
5-137	須 惠 器 土 師 器 器 片	5-163	土 師 器 器 小 皿 丸 底 器	5-191	土 師 器 器 器、壺 弥 生 土 師 器 片
		5-164	土 師 器 器 片	5-192	土 師 器 器 片 石 製 品 フレイク (and・ob) 弥 生 土 師 器 片 縄 文 土 師 器 片
		5-166	土 師 器 器 器 台、壺、甕、鉢 石 製 品 フレイク (and・ob)、チップ (ob)、砥 石 (磨 石)		

第 11 次調査出土遺物一覧表④

5-193	弥生土 破片	5-221	黄土 石 製 品 陶器 (ob) 弥生土 破片
5-194	弥生土 陶器	5-222	土 器 破片
5-196	土 器 破片	5-224	土 器 陶器、片 石 製 品 チップ (ob)
5-197	弥生土 陶器	5-226	土 器 破片 弥生土 陶器、片
5-198	縄 文 土 器 破片 土 器 破片	5-227	土 器 破片 石 製 品 陶器 (ob)、磁石 (砂岩) 弥生土 陶器、片
5-199	土 器 破片	5-228	土 器 破片
5-200暗褐色土	土 器 破片	5-229	縄 文 土 器 片
5-200淡褐色土	土 器 破片	5-231	土 器 破片 縄 文 土 器 片
5-200	石 製 品 石臼 (砂岩) 弥生土 陶器	5-232	黄褐色土 縄 文 土 器 破片、埴土、埴、片 土 器 埴土、埴土、小皿s(イ)、高坪、壺、壺、鉢、 小鉢 (手づくわ)、片 黒色土 埴石 片 瓦 埴小皿s 瓦 埴中瓦 (いぶし)、陶器瓦 (現代瓦)、セメント瓦 石 製 品 フレイク (and・ob)、チップ (and・ob)、白雲石、 石盤 (and・ob)、磁石、丸玉、陶器 土 器 瓦土 器 埴土、埴土、埴土カメ、片 縄 文 土 器 埴土、片 瓦 質 土 器 埴土、片 陶 器 陶 器、埴土、埴土、壺 陶 器 埴土 近畿系陶器 埴土 (埴付)、紅土 (白磁) 弥生土 陶器、壺 縄 文 土 器 埴土 (埴付文)、片 赤 土 器 品 (河原町系埴土品) 土 器 品 土瓦、埴土塊 そ の 他 磁石
5-201	土 器 破片	5-233	黄褐色土 土 器 陶器、片
5-202	土 器 破片 弥生土 陶器×壺	5-234	埴土 土 器 破片 瓦 埴土器瓦 (現代瓦) 近畿系陶器 埴土 (埴付) その 他 埴土
5-203	土 器 破片	5-235	土 器 破片
5-204	土 器 破片 石 製 品 フレイク (ob)	5-236	土 器 破片 石 製 品 フレイク (and)、陶器 (土器破片)、石盤 (ob・and)、 埴土品 瓦 質 土 器 片 縄 文 土 器 埴土 (埴付文) 土 器 品 土瓦、埴土塊 そ の 他 磁石
5-206	土 器 破片 弥生土 陶器s2s	5-237	土 器 破片 石 製 品 フレイク (ob)
5-207	土 器 破片 弥生土 陶器×壺 (甲産)	5-238	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片
5-208	石 製 品 丸石 弥生土 破片 (丹波ワ)	5-239	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片
5-209	弥生土 陶器 (甲産)	5-240	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片
5-211	土 器 陶器、片	5-241	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片
5-212	土 器 破片	5-242	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片
5-214	土 器 破片	5-243	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片
5-216	弥生土 破片	5-244	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片
5-218	土 器 破片 弥生土 破片	5-245	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片
5-219	弥生土 破片	5-246	土 器 破片 土 器 破片 土 器 破片

2. 第12次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字向佐野 206 - 1 で 11 次調査地の南西側に位置している。調査前は宅地に隣接する畑と裏山の竹林であった。発掘調査は平成 10 年 7 月 8 日から同年 9 月 4 日までの期間で調査を行なった。開発対象面積は 770 m²、調査面積 500 m²である。調査は城戸康利が行なった。

(2) 基本層序 (図 22)

地形は宮ノ本丘陵の南斜面裾にあり、11 次調査と同様、北から南に向かって緩やかに傾斜している。調査地は斜面を削平し平坦にした南側と丘陵が残っている北側に分かれる。丘陵部は表土を除去するとすぐに花崗岩風化土の基盤層が現れ、窯跡を 1 基検出した。南側平坦部の丘陵側は表土を取り除くと新鮮な花崗岩風化土が現れ、遺構は確認できなかった。平坦部の南側は表土を除去すると旧地形が現れ、調査地の南側にある水路に向かって低くなっている。西側は花崗岩風化土、東側は砂である。この面が遺構面で古墳時代から現代までの遺構を検出した。

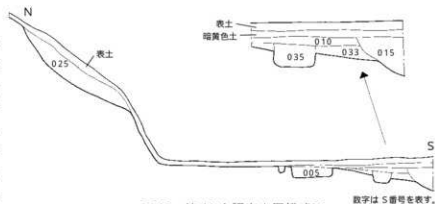


図 22 第 12 次調査土層模式図

(3) 検出遺構

a. 住居

12S1005 (図 23)

調査区西側で検出した竪穴式住居で南側が調査区外に出ている。平面形は方形と考えられ、一辺 4.7m

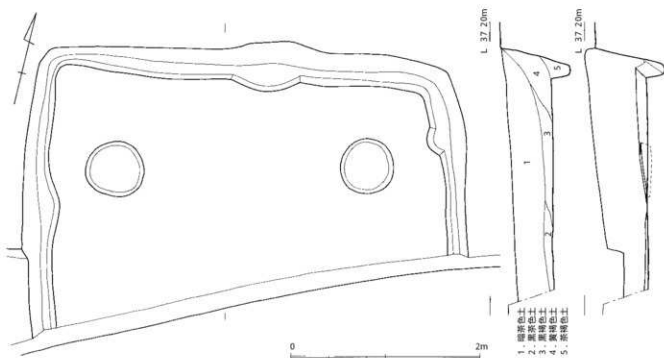


図 23 12S1005 実測図 (1/40)

と 3.0m 以上を測る。検出面からの深さは 0.6 m である。床面には主柱穴と考えられるピット 2 基を検出した。ピットは径 0.6 m 前後を測るが、床面からの深さは 0.1 m 前後と浅い。また壁溝が 0.2m 前後の深さで巡る。貼り床は確認されなかった。

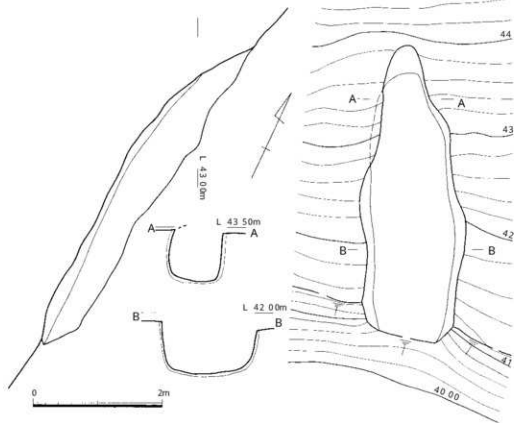


図 24 12SX025 実測図 (1/60)

壁を削り抜いて構築している。燃烧部は残存長 4.2 m、最大幅 1.6 m を測る。煙道付近になると幅が狭くなり 0.7 m 前後となる。斜面の中位で傾斜が変わり、下半で 27°、上半で 47° である。壁や床の地山面は焼成の影響を受けて赤変し、焼け締まっている。補修の痕跡は確認できなかった。煙道は天井が崩落しているため規模は不明である。壁面は焼成部同様に火を強く受けて赤変している。遺物は検出しなかったが、形状や周辺の状況から須恵器を焼く窯と考えられる。

b. 窯

12SX025 (図 24)

北側斜面上で確認した窯跡である。燃烧部以下は削平されており、焼成部から煙道付近を残すのみで、天井も崩落している。残存長は 4.6 m を測る。地下式無階無段登窯と思われる。標高 41 ~ 44 m の地点に位置し、主軸方向は N-28°34'-W である。花崗岩風化土の地

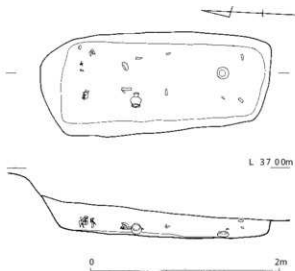


図 25 12ST035 実測図 (1/40)

c. 墓

12ST035 (図 25)

調査区中央に位置し、12SX033 を切る木棺墓である。墓壇は平面隅丸長方形を呈し、長軸 2.4 m、短軸 1.1 m、検出面からの深さ 0.6 m を測る。主軸は N-5°12'-W をとる。埋土中から鉄釘 22 本を検出し、出土状況から木棺と判断した。木棺の大きさは長軸 1.7 m、短軸 0.5 m 程度であり、鉄釘に付着した棺材の痕跡から棺の厚さは 2 cm 前後であったと推測される。土師器皿・須恵器壺・鉄製刀子が出土している。

d. 溝

12SD004

調査区西側に位置し、東西方向に走る溝である。長さ 6.0 m 以上、最大幅 0.7 m、検出面からの深さ 0.15 m を測る。

e. その他の遺構

12SX006 (図 26)

調査区西側に位置する 2 段掘りの小穴である。1 段目の掘り込みは平面楕円形を呈し、長軸 0.9 m、短軸 0.6 m、検出面からの深さ 0.2 m を測る。2 段目の掘り込みは平面円形を呈し、直径 0.3 m、深さ 0.35 m を測る。1 段目に布留式の甕が逆さ向きに 1 個入っていた。埋土は 1 段目暗茶色土、2 段目暗灰色土である。

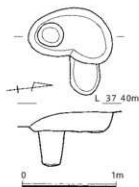


図 26 12SX006 実測図 (1/40)

12SX010

調査区東側に広がる大きなたまりで、12ST035 や 12SX033 を覆っている。幅約 14 m を測る。埋土は黒茶色土である。南側の S-15 や下層の 12SX033 と似た性格の遺構であると考えられる。

12SX033

12SX010 や 12ST035 に切られる大きなたまりである。12SX010 と似た範囲に広がっている。埋土は暗茶黄色土である。

12SX034

調査区の東側隅で確認した小穴である。平面円形を呈し、径約 0.95m、検出面からの深さ 0.8 m を測る。埋土は茶色土である。S-15 を除去後検出した。

12SX036

調査区東側に位置し、12SX033 に切られる竪穴状遺構である。平面方形を呈し、長軸 4.25 m、短軸 3.5 m 以上、検出面からの深さ 0.19 m を測る。埋土は暗茶色土である。底面から小穴は確認できなかった。また底面中央で焼土や炭化物片を確認した。形態などから竪穴式住居である可能性が考えられる。

(4) 出土遺物

竪穴式住居

12SI005 出土遺物 (図 27・28)

土師器

碗 (1) 口径 12.2 cm、器高 5.1 cm を測る。体部から口縁部まで内湾しながら立ち上がる。体部外面は縦方向のハケ目調整を行い、他はナデで仕上げている。胎土に長石・石英粒を多く含む。焼成良好で淡橙色を呈する。

高坏 (2) 口径 21.2 cm、器高 14 cm 前後を測る。坏部は体部から口縁部にかけて外反気味に開いている。体部内外面とも横方向のハケ目調整後にナデを行っている。脚部内面は削りを行なっている。胎土に金雲母をわずかに含む。

甕 (3～6) 3 は口径 16.1 cm、器高 23.5 cm、胴部最大径 22.1 cm を測る。胴部は球形を呈し、口縁は

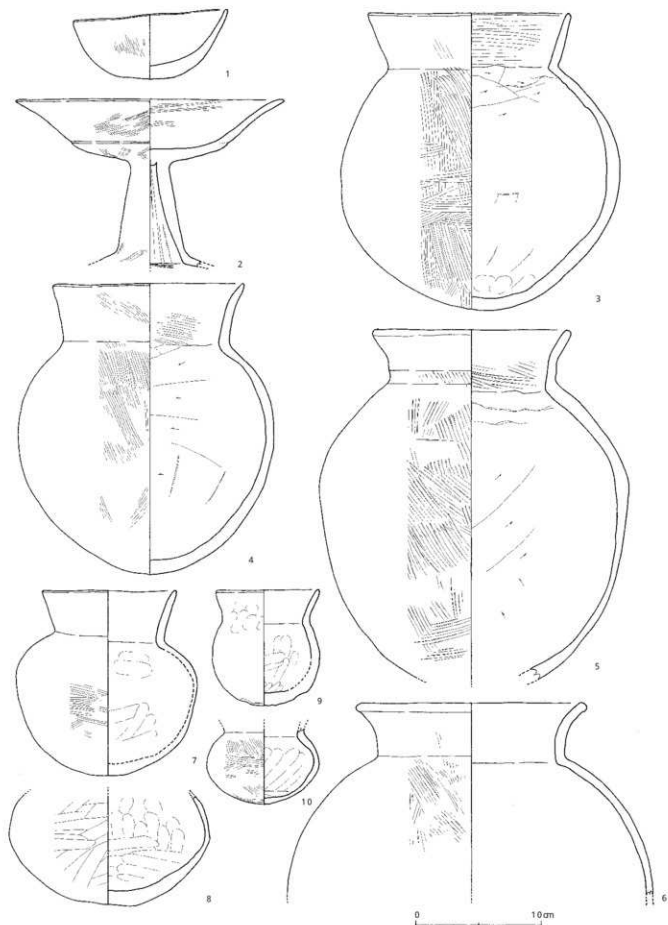


图 27 12S1005 出土遺物実測図① (1/3)

直口している。4は口径15.2 cm、器高23.0 cm、胴部最大径20.2 cmを測り、口縁はわずかに外反している。5は3・4と比較すると胴部は長胴形になり、口縁は外反している。胴部外面は縦・横方向のハケ目調整を行い、内面にはへら削りが認められる。口縁部は横方向のハケ目や横ナデで仕上げている。6は口径18.2 cmで外反する口縁をもつ。3・4・6は胴部に黒斑がある。

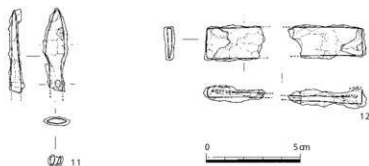


図 28 12SI005 出土遺物実測図② (1/2)

壺 (7・8) 7は口径10.6 cm、器高14.7 cm、胴部最大径は14.2 cmを測る。肩部がやや張り、口縁部は直立している。体部外面にハケ目調整が行なわれる。8は外面にナデ、内面に指による強いナデが顕著に認められる。底部外面に黒斑が認められる。

小型丸底壺 (9・10) 9は口径8.1 cm、器高9.2 cmを測る。胴部外面は9にはナデが、10にはハケ目調整が行なわれる。胴部内面はどちらも指による強いナデが顕著である。9は口縁を横ナデで仕上げており、底部外面に黒斑の痕跡が認められる。

鉄製品

鉄鏃 (11) 鉄鏃の刃先部分と考えられ、基部は一部欠損している。長さ4.2 cm以上、刃部の最大幅1.0 cm、刃部の厚さ0.3 cmを測る。

手鏡 (12) 幅1.6 cm、厚み0.3 cmを測る。片側面に刃が付いていて、両端部は折り曲がっている。

墓

12ST035 出土遺物 (図 29)

須恵器

小壺 (1) 完形品で口径5.9 cm、器高12.9 cm、高台径8.2 cmを測る。肩部はやや張り、口縁部は大きく外反している。肩部から上は回転ナデで仕上げ、胴部外面は回転へら削りを行なっている。頸部内面には絞り痕が認められる。頸部や胴部外面には一部自然軸がかかる。焼成は良好で色調は明灰褐色を呈する。

土師器

坏 a (2~5) 口径11.6~12.0 cm、器高2.7~3.2 cmを測る。体部と底部の境は若干丸みを帯び、そのまま口縁部まで立ち上がる。底部外面は回転へら切り後ナデを行なっている。体部は回転ナデで仕上げる。いずれも焼成は良好で色調は明黄白色を呈する。

石製品

石鏃 (6) 安山岩製の打製石鏃である。先端部が欠損しており、基部に抉りをもつ。長さ約1.8 cm、幅1.8 cm、厚さ0.3 cmである。遺構とは直接関係無く、埋土に入ったものと考えられる。

鉄製品

刀子 (7) 長さ12.4 cm、刃部の幅1.0 cm、刃部の厚み0.3 cmを測る。よく使い込まれたと思われ、刃部はすっかり研ぎで減っている。

釘 (8~29) 木棺に使用された釘である。8・10・12・13・15・16・23が完形品で、長さ8.1~4.4 cm、幅0.6~0.3 cmとバリエーションがある。鉄釘に付着した錆の木目の観察から棺材の厚さは2~3 cm前後であったと推測される。

溝

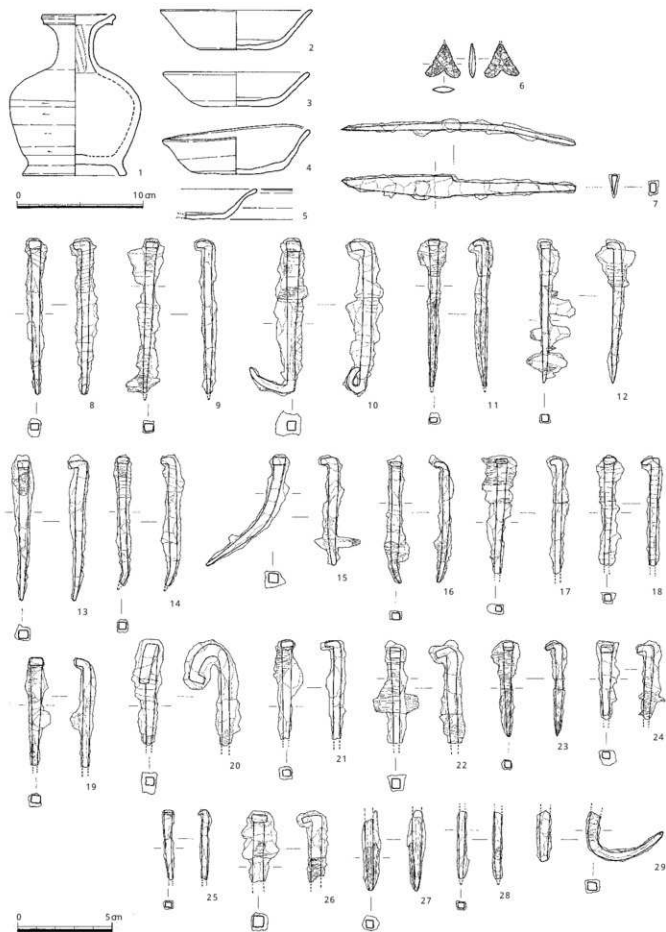


图 29 12ST035 出土物实测图 (1/2 · 1/3)

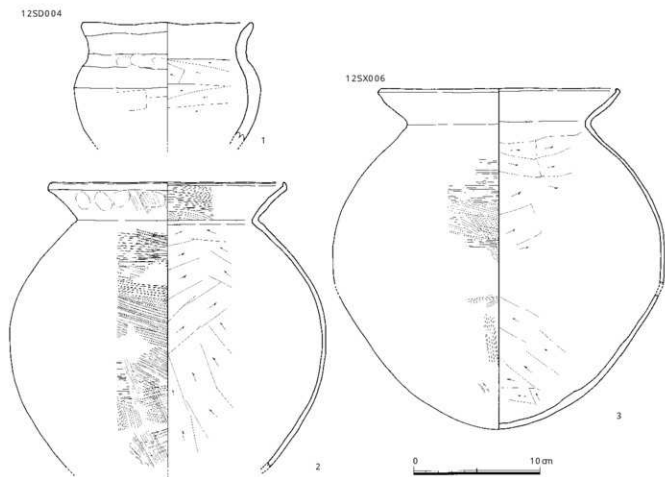


図30 12SD004・SX006 出土遺物実測図 (1/3)

12SD004 出土遺物 (図30)

土師器

甕 (1) 口径 13.6 cm を測る。胴部外面は工具による横方向のナデ、胴部内面には横方向のヘラ削りが認められる。口縁部は横ナデで仕上げている。胴部外面にはススが付着している。

その他の遺構

12SX006 出土遺物 (図30)

土師器

甕 (2・3) 2は口径 19.2 cm、胴部最大径 25 cm を測る。3は口径 19.1 cm、復元器高 27 cm 前後、胴部最大径 26 cm を測る。ともに胴部は球形を呈し、口縁部は「く」の字状になり、端部をつまみ上げている。2の胴部外面には平行タタキ痕が認められ、3の胴部外面は横・縦方向のハケ目調整後ナデを行なっている。内面はともにヘラ削りを行なっている。いずれも焼成良好で色調は灰黄色を呈し、外面に黒斑がある。

12SX010 出土遺物 (図31・32)

時代幅が広く多様な遺物が出土した。

須恵器

坏蓋 (1・2) 1の口縁端部は内傾する段を持つ。2の口縁端部断面は短い三角形を呈している。

椀c (3) 高台部の破片である。焼成は良好で、色調は灰茶色を呈す。

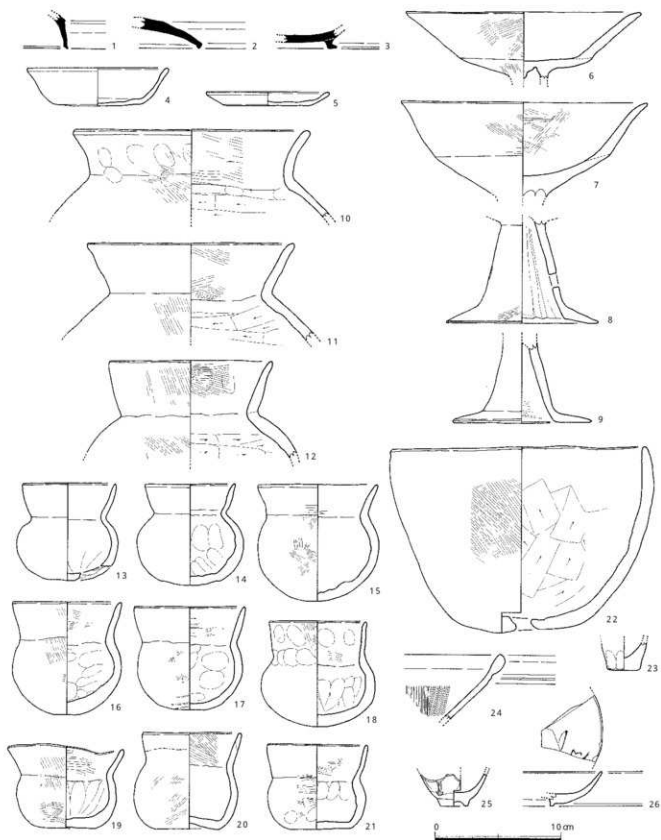


図 31 12SX010 出土遺物実測図① (1/3)

土師器

坏 a (4) 口径 11.2 cm、器高 3 cm、底径 6.8 cm を測る。底部外面には回転ヘラ切り後板状圧痕が認められる。焼成良好で黄白色を呈する。

小皿 a (5) 口径 9.4 cm、器高 1.1 cm、底径 7.1 cm を測る。底部外面は回転ヘラ切り後に板状圧痕が認められる。

高坏 (6～9) 6 と 7 は坏部で、ともに体部はハケ目調整の後横ナデで仕上げている。口径は 6 が 18.6 cm で、7 は 19.5 cm を測る。7 はやや深く、外面に黒斑がある。焼成良好で明橙色を呈する。8・9 は脚部である。脚部径 12・11 cm を測る。8 の内面は削りを行い、9 の内面はハケ目調整後ナデを行なっている。9 の胎土には白雲母を多く含む。

甕 (10) 口径 18.8 cm を測る。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。胴部外面と口縁部はハケ目調整後ナデもしくは横ナデで仕上げている。胴部内面は横方向のヘラ削りを行なっている。

壺 (11・12) 両者とも口縁部は外上方に開いている。胴部外面と口縁部はハケ目調整後ナデもしくは横ナデで仕上げている。胴部内面は横方向のヘラ削りを行なっている。口径 16.4・13.0 cm を測る。

小型丸底壺 (13～21) 口径 7.2～9.4 cm、器高 4.5～9.2 cm を測る。13 や 14 のように口縁が内湾気味に立ち上がるものと 18 や 20 のように直立気味に立ち上がるものがある。胴部も球形のもの、扁平したものがある。13 には内部からの焼成後の穿孔と考えられる穴がある。胴部外面と口縁部はハケ調整後ナデで仕上げている。胴部内面には指頭圧痕が顕著に認められる。

甕 (22) 鉢形で口径 20.0 cm、器高 14.6 cm を測る。底部は扁平の丸底で単孔がある。体部外面はハケ目調整を行い、体部内面は斜め方向のヘラ削りを行なっている。口縁部は横ナデで仕上げている。体部外面下半に黒斑が認められる。

ミニチュア土器 (23) 底部の破片である。外面に指頭圧痕が認められる。

国産陶器

播鉢 (24) 口縁部は玉縁状で、口縁下面に 2 条の平行沈線文を巡らす。体部内面には播目が残る。全面施釉されており、色調は黒褐色を呈している。

肥前系磁器 (染付)

小坏 (25) 高台径 2.2 cm を測る。

皿 (26) 畳付の軸は削られている。内面に呉須で文様を描いている。

石器

スクレイパー (27) 安山岩製で、長さ 8.5 cm、幅 7.2 cm、最大厚さ 1.3 cm を測る。原石表面が残る。

石鏃 (28) 黒曜石製の打製石鏃である。基部に抉りを作らない。長さ 2.7 cm、幅 1.8 cm、厚さ 0.3 cm である。

鉄製品

鉄鏃 (29) 長さ 7.4 cm 以上、刃部幅 1.0 cm、刃部厚 0.4 cm、茎部幅 0.8 cm、厚さ 0.5 cm を測る。茎部が一部欠損する。

不明品 (30・31) 30 はヘラ状になっており、先端が丸く屈曲する。毛抜きの先端か。31 は断面方形の棒状製品である。先端は少し薄くなっている。長さ 20.5 cm、最大幅 1.0 cm を測る。

12SX033 黒茶色土出土遺物 (図 32)**土師器**

甕 (32) 口縁は「く」の字状になり、端部をややつまみ上げている。口縁部や胴部外面は縦方向のハケ目調整後横ナデで仕上げている。内面は横方向のヘラ削りを行なっている。

鉢 (33) 内外面に粗いミガキが認められる。内外面ともにススが付着している。

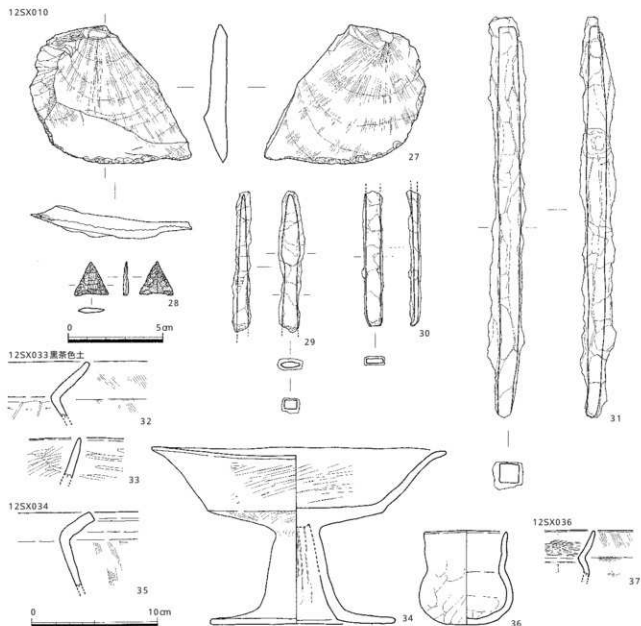


図 32 12SX010 出土遺物実測図②・12SX033・034・036 出土遺物実測図 (1/3)

12SX034 出土遺物 (図 32)

土師器

高坏 (34) 口径 23.3 cm、器高 13.7 cm、脚部径 14.6 cm を測る。坏部は内外面ともにハケ目調整の後横ナデで仕上げている。脚部はナデ・横ナデで仕上げている。焼成良好で淡橙色を呈する。

甕 (35) 口縁部は「く」の字状になっている。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデを行なっている。口縁部は横ナデで仕上げている。胴部外面にはススが附着している。

小型丸底壺 (36・37) 36 は口径 6.6 cm、器高 7.9 cm を測る。口縁部は直立している。胴部はナデで、口縁部は横ナデで仕上げている。

12SX036 出土遺物 (図 32)

土師器

小型丸底壺 (37) 内外面ともにハケ目調整を行い、口縁部は横ナデで仕上げている。

暗黄色土出土遺物 (図 33)

包含層の出土遺物である。

土師器

壺 (1) 胴部は球形を呈し、胴部最大径 12.7 cm を測る。胴部外面はハケ目調整後ナデを行なっている。胴部内面は斜め方向のヘラ削りを行い、底部内面には指頭圧痕が顕著に残る。胴部外面にはススが附着しており、部分的に赤変している箇所も認められる。胎土に角閃石を少量含む。

小型丸底壺 (2) 口径 6.6 cm、器高 7.0 cm を測る。底部は平底で、口縁部は直立している。口縁部は横方向のハケ目調整後横ナデで仕上げている。胴部外面はナデ、内面は指による強いナデで仕上げている。

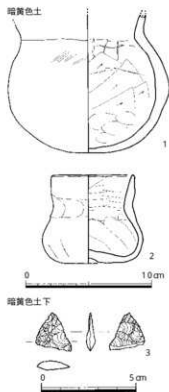


図 33 暗黄色土・暗黄色土下出土遺物実測図 (1/2・1/3)

暗黄色土下出土遺物 (図 33)

遺構面下層で検出した遺物である。11 次調査同様の縄文時代を中心とした包含層が推定される。

石製品

石鏃 (3) 黒曜石製の打製石鏃である。長さ 3.0 cm 以上、幅 1.9 cm 以上である。基部が欠損している。

(5) 小結

1) 各遺構の時期について

住居

12SI005 遺物は坏・高坏・壺・甕・鉄鏃・鉄鎌が出土している。坏は全体に丸みを持つ丸底の鉢で、ハケ目調整を行なっている。甕は長胴形で口縁部が緩やかに外反しているものがある。布留式系の高坏・球胴形の甕などやや古いタイプの土器も出土しているが、これらの特徴からⅢ b 期～Ⅳ期にあたり、5 世紀前半から中葉にかけての時期が考えられる。

窯

12SX025 埋土中から遺物は出土しなかったが、12 次調査区のすぐ北側に位置する宮ノ本 1・2 次調査区では 7 世紀後半～8 世紀後半にかけて操業した須恵器窯が 8 基確認されており、窯構造が類似していることから古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器窯と考えられる。

墓

12ST035 出土遺物は須恵器壺 1 点、土師器坏 a 4 点、鉄釘 22 点、刀子 1 点、打製石鏃 1 点である。供献土器である土師器坏 a 4 点の形態から、Ⅵ期で 9 世紀前半に造営されたと考えられる。

その他の遺構

12SX010 大きなたまり状遺構で、古墳・奈良・江戸時代以降の遺物が混在している。9 世紀代造営の 12ST035 を覆っていることからそれ以降の時期が考えられるが、古墳・奈良時代の遺物が数多く混入している。古墳時代の遺物は 12SX010 の下層にある古墳時代前期と考えられる堅穴状遺構 (12SX036) に付随する出土遺物だった可能性が考えられる。

12SX033 たまり状遺構である。古墳時代前期の遺物が出土している。12SX010 同様に 12SX036 の遺物が混入している可能性が考えられる。9 世紀代の墓 (12ST035) に切られているため古墳から奈良時代の範

隣に収まると考えられる。

12SX036 12SX033 に切られる竪穴状遺構で、形態から竪穴式住居の可能性が考えられる。年代を推定しうる遺物は鉢 1 点しかないが、体部が屈折して大きく開く口縁部を持つもので古墳時代前期の時期が考えられる。

2) 小結

12 次調査では古墳時代中期の竪穴式住居 1 基、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器窯 1 基、9 世紀代の木棺墓 1 基、大きなたまり状遺構 2 基、竪穴状遺構 1 基などを検出した。古墳時代の竪穴式住居は 12 次調査区の南側に隣接する 6 次調査区やすぐ東側に位置する 10・10-2 次調査区で前期と後期の住居群が確認されている。今回中期の住居が検出されたことで、宮ノ本遺跡群という狭い範囲であるが、連続して集落が営まれていたことが確認できた。木棺墓は単独であり、隣接する 6・10・10-2 次調査区でも 9 世紀代の火葬墓もしくは木棺墓が検出されているが、各地点単独で造営されているようである。調査区西側は砂地であり 12SX010・33、S-15 など何度も流されては堆積する不安定な場所であったと考えられる。

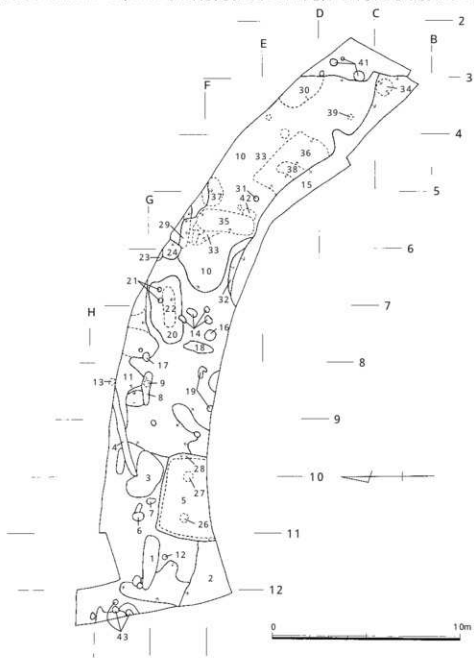


図 34 第 12 次調査略測図 (1/200)

第 12 次調査遺構一覧表

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	遺構種別	埋土状況(古→新)	前後関係(古→新)	遺構面	時期	備考	地区番号
1		たまり	暗褐色土		1	奈良		G11
2		たまり	灰黄色土	2→5	1			F12
3		たまり	灰黄色土+灰色土まだら		1			G10
4	12SD004	溝	暗茶色土		1			G9
5	12S1005	住居	黄褐色土→茶褐色土→ 黒褐色土→黒茶色土→ 暗茶色土	2・26・27・28→5	1	古墳中期	鉄鏝・鉄鎌出土	F10
6	12SX006	小穴	暗灰色土→暗茶色土		1	古墳		G10
7		小穴			1			G10
8		土坑		9→11→8	1			G8
9		小穴		9→8	1			G8
10	12SX010	たまり	黒茶色土	29・30・33・36・ 37・38・39・ 42→33→15・ 24・31・35→10	1	近世		C3
11		たまり	暗茶色土まだら	11→8・17	1			G8
12		小穴	茶色土		1			F11
13		小穴			1			G8
14		小穴群	灰色土	20→14	1	奈良		E7
15		落ち	暗灰砂質土	10・32・34・36・ 38→15	1	中世～近世?		D5
16		小穴	暗茶色土		1			E7
17		小穴	灰色土	11→17	1	平安		G7
18		土坑	暗灰色土まだら		1			F7
19		小穴群	灰色土		1			E8
20		たまり	暗茶色土	22→20→14・21	1			F7
21		小穴群	灰色土	20→21	1			F6
22		たまり	暗茶色土	22→20	1			F6
23		小穴	黒茶色土	24→23	1			F6
24		小穴	茶色土	10→24→23	1			F6
25	12SX025	竈			1	古墳・古代	半地下式無階無段登壇	調査区外 北側
26		小穴		26→5	1		S-5の主柱穴	F10
27		小穴		27→5	1		S-5の主柱穴	F10
28		住居壁溝		28→5	1		S-5の壁溝	F10
29		土坑		29→10	1			F5
30		土坑	黒色粗砂	30→10	1			D3
31		小穴	灰色土	10→31	1			E5
32		土坑	灰茶色土	32→15	1	平安		E6
33	12SX033	たまり	黒茶色土→黄色土	38・36→33 →10	1	奈良以前		E5
34	12SX034	小穴	茶色土	34→15	1	古墳		B3
35	12ST035	木棺墓	灰色土	33→35→10	1	9世紀	鉄釘・鉄製刀子出土	E5
36	12SX036	竈穴状遺構	暗茶色土	38・36→33 →10	1	古墳前期	竈穴式住居か? S-38 と同一遺構か	D4
37		小穴	暗黄色土	37→10	1			F5
38		たまり	黒色土	38・36→33 →10	1	古墳前期	黒色土の下に焼け面有り	D4
39		小穴		39→10	1			C3
40	欠番				1			
41		小穴群		41→10	1			C2
42		小穴	黒色土	42→10→35	1			E5
43		小穴群	茶色土		1			G12

第 12 次調査出土遺物一覧表

5-1	<p>調査 銅 押高1、押高2、片</p> <p>土 器 銅 高坪、磨台、片</p> <p>弥生土 銅 磨、片</p> <p>その他 焼土塊</p>	5-13	<p>調査 銅 押高c、押高1、片磨、坪a、坪c、磨×磨、磨、片</p> <p>土 器 銅 坪a(イト)、丸坪a、小皿a(ヘラ)、小皿b、 碗c、高坪、磨、磨、小型丸底磨</p> <p>黒色土 銅 鉄</p> <p>黒色土 磨 鉄c</p> <p>瓦 製 品 鉄釘</p> <p>土 器 質 土 銅 磨×磨</p> <p>漆 裏 質 土 銅 片</p> <p>瓦 質 土 銅 鉢</p> <p>漆 質 土 銅 片</p> <p>泥 瓦 陶 銅 鉢、磨</p> <p>白 磁 鉄釘、皿片</p> <p>弥生土 銅 磨(中磨)</p> <p>銅 文 土 銅 片</p> <p>その他 焼土塊</p>	5-35	<p>調査 銅 押高1、坪c、磨、小磨、片</p> <p>土 器 銅 磨台、坪a(ヘラ)、磨台、磨</p> <p>瓦 製 品 石 磨 (and)、磁石、片</p> <p>弥生土 銅 片</p> <p>漆 裏 質 品 刀子、鉄釘</p>
5-2	<p>調査 銅 磨</p> <p>土 器 銅 磨台、磨、磨、片</p>	5-14	<p>土 器 銅 高坪、磨</p>	5-36	<p>調査 銅 磨台、磨(有蓋)、小型丸底磨、鉢</p> <p>弥生土 銅 磨(中磨)</p>
5-3	<p>土 器 銅 片</p> <p>瓦 製 品 丸石(砂磨?)</p>	5-15	<p>土 器 銅 高坪、磨</p>	5-37	<p>土 器 銅 片</p>
5-4	<p>土 器 銅 坪、磨、磨、片</p> <p>弥生土 銅 磨、磨</p>	5-16	<p>土 器 銅 高坪、磨</p>	5-38	<p>土 器 銅 磨(有蓋)、小型丸底磨</p> <p>弥生土 銅 磨、磨(中磨)</p>
5-5	<p>土 器 銅 碗、高坪、磨台、磨(有蓋)、磨、小型丸底磨</p> <p>瓦 製 品 チップ(ab)</p> <p>弥生土 銅 磨、磨(中磨)、片</p> <p>漆 裏 質 品 鉄鉢、鉄磨</p>	5-17	<p>調査 銅 片</p> <p>土 器 銅 坪(平安~)、片</p>	5-39	<p>土 器 銅 磨</p>
5-6	<p>土 器 銅 磨、片</p>	5-18	<p>土 器 銅 片</p>	5-40	<p>調査 銅 高坪、磨、磨、片</p>
5-7	<p>土 器 銅 片</p>	5-19	<p>調査 銅 押高、片</p> <p>土 器 銅 片</p>	5-41	<p>土 器 銅 磨、片</p>
5-8	<p>土 器 銅 片</p>	5-20	<p>土 器 銅 高坪、磨、片</p> <p>弥生土 銅 磨(内磨?)、磨</p>	5-42	<p>土 器 銅 高坪、磨、磨、片</p>
5-9	<p>土 器 銅 片</p>	5-21	<p>土 器 銅 磨、片</p>	5-43	<p>土 器 銅 磨、片</p>
5-10	<p>調査 銅 押高c、碗c、坪×皿、磨×磨、片</p> <p>土 器 銅 坪a、小皿a(ヘラ)、高坪、磨台、磨(有蓋)、 磨、磨(磨台口縁)、小型丸底磨、鉢、磨</p> <p>黒色土 銅 鉄</p> <p>瓦 製 品 フレイク(ab・and)、スクレイパー(ab)、 石磨(ab)、すり石(丸底磨)、磁石(高坪)、 丸石(砂磨)、高坪(石磨)</p> <p>泥 瓦 陶 銅 鉢</p> <p>泥 瓦 陶 磁 銅 碗、小坪、皿、磨(磨台)</p> <p>弥生土 銅 高坪、磨、磨(中磨)</p> <p>漆 裏 質 品 鉄鉢、鉄釘、不明品</p>	5-22	<p>土 器 銅 磨台、磨</p> <p>弥生土 銅 磨</p>	漆 裏 質 土	<p>調査 銅 押高1、坪c、磨、磨</p> <p>土 器 銅 小皿a(ヘラ)、高坪、磨台、磨、磨、 小型丸底磨、鉢</p> <p>黒色土 磨 鉄</p> <p>瓦 製 品 セメント瓦</p> <p>土 器 品 石 磨 (ab)、すり石(砂磨)</p> <p>泥 瓦 陶 銅 鉢、磨</p> <p>白 磁 鉄釘</p> <p>弥生土 銅 磨、磨(内磨?)</p> <p>漆 裏 質 品 不明磨製品</p>
5-11	<p>調査 銅 片</p> <p>土 器 銅 片</p> <p>弥生土 銅 磨</p>	5-23	<p>土 器 銅 片</p>	5-44	<p>調査 銅 磨×磨</p> <p>土 器 銅 磨、片</p>
5-12	<p>土 器 銅 片</p> <p>弥生土 銅 片</p>	5-24	<p>土 器 銅 磨、片</p> <p>弥生土 銅 片</p>	5-45	<p>土 器 銅 磨、片</p>
5-13	<p>土 器 銅 片</p>	5-25	<p>土 器 銅 片</p>	5-46	<p>土 器 銅 磨、片</p>
5-14	<p>調査 銅 坪、磨</p> <p>土 器 銅 片</p> <p>弥生土 銅 磨</p>	5-26	<p>土 器 銅 片</p>	5-47	<p>土 器 銅 磨、片</p>
5-15	<p>調査 銅 押高1、片</p> <p>土 器 銅 坪a、高坪、磨、磨(磨口)、丸底磨、片</p> <p>瓦 製 品 チップ(ab)</p> <p>弥生土 銅 磨(内磨?)、片</p>	5-27	<p>土 器 銅 小皿a、磨</p>	5-48	<p>調査 銅 押高1、片</p> <p>土 器 銅 坪a、高坪、磨、磨(磨口)、丸底磨、片</p> <p>瓦 製 品 チップ(ab)</p> <p>弥生土 銅 磨(内磨?)、片</p>
5-16	<p>土 器 銅 高坪、磨台、磨、小型丸底磨</p>	5-28	<p>調査 黒色土</p> <p>土 器 銅 高坪、磨台、磨、磨、鉢</p>	5-49	<p>調査 銅 押高1、片</p> <p>土 器 銅 坪a、高坪、磨、磨(磨口)、丸底磨、片</p> <p>瓦 製 品 チップ(ab)</p> <p>弥生土 銅 磨(内磨?)、片</p>
5-17	<p>土 器 銅 高坪、磨台、磨、小型丸底磨</p>	5-29	<p>調査 銅 高坪、磨台、磨、小型丸底磨</p>	5-50	<p>調査 銅 高坪、磨台、磨、小型丸底磨</p>

3. 第13次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字向佐野 391・392 外で、現況は畑地であった。佐野地区区画整理事業に伴い事前の発掘調査を実施した。11次調査地の北東側で隣接しているため調査区は連続させた。平成10年7月29日から同年9月30日までの期間で行なった。開発対象面積は618㎡、調査面積550㎡を測る。調査は城戸康利が担当した。

(2) 基本層序 (図35)

調査区は宮ノ本丘陵の南東斜面低位に位置し、標高37～39mを測る。立地は北西側が尾根、南東側が斜面になっており、緩やかに傾斜している。南西側はそのまま11次調査区に連続する。調査区は丘陵斜面を切り盛りして平坦地を確保した場所である。したがって丘陵側は削平が甚だしく花崗岩が風化した新鮮な地盤が露出し、遺構は検出されなかった。盛った部分で表土を除去すると、薄い暗黄色土の包含層下で住居や墓などの遺構を検出した。

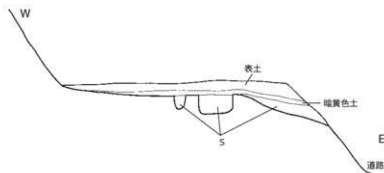


図35 第13次調査土層模式図

(3) 検出遺構

古墳時代の竪穴式住居2基、奈良時代から平安時代中期にかけての土葬墓7基、たまり状遺構、小穴群を検出した。竪穴式住居2基は調査区の南側に位置し、土葬墓は調査区の北側の削平面が終わり、丘陵斜面に移行するあたりに集中して分布している。また小穴が数多く確認され、掘立柱建物や柵列があったと考えられるが、認識できなかった。

a. 住居

調査区の南側で2基の竪穴式住居を確認した。S-55は第11次調査の11S1005に接合する同一遺構で、第11次調査分で紹介している。

13S1035 (図36)

調査区中央、標高37m付近で検出した竪穴式住居である。平面方形プランを呈し、長軸4.84m、短軸4.68m、検出面からの深さ0.4mを測る。床面の中央には主柱穴と考えられる小穴を4基確認した。主柱穴は深さ0.2～0.6m前後を測り、柱間は1.9m前後を測る。また住居の南西・南東・北西壁には深さ0.05～0.1m前後の壁溝がある。南側には屋内土坑と考えられる段掘りの土坑があり、隅丸長方形を呈し、長軸1.02m、短軸0.72m、住居床面からの深さ0.52mを測る。住居北側の床面直上には高坏・甕・壺片が散在しており、北西側では土器片とともに床が火を受けている痕跡を確認した。貼り床は行われていなかった。埋土は丘陵尾根の北東側から南西斜面に向かって崩落土が自然堆積している。

b. 墓

調査区の北側で土葬墓が7基集中しているのを確認した。標高38m前後の所に等高線に沿って帯状に分布している。

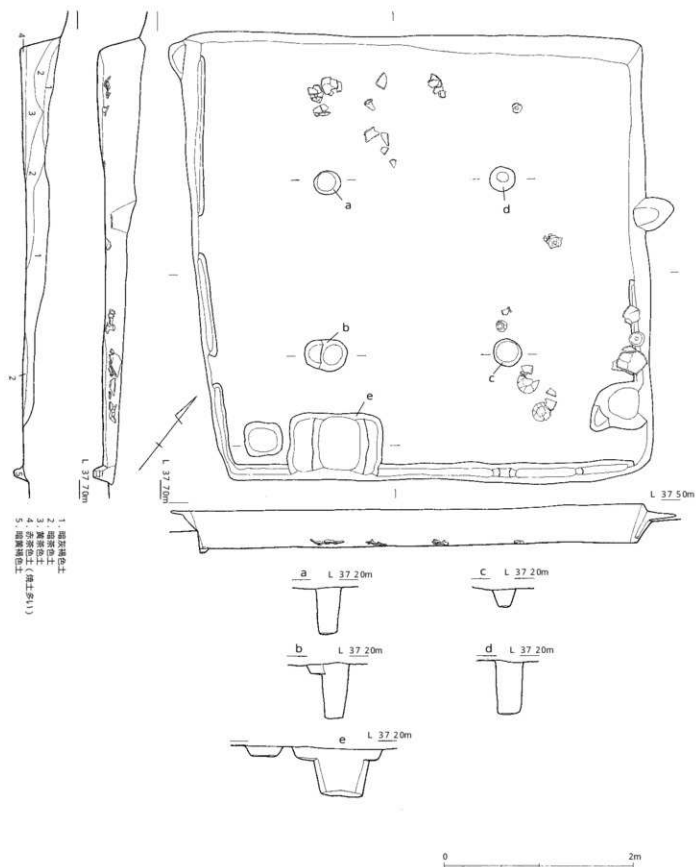


图 36 13S1035 实测图 (1/40)

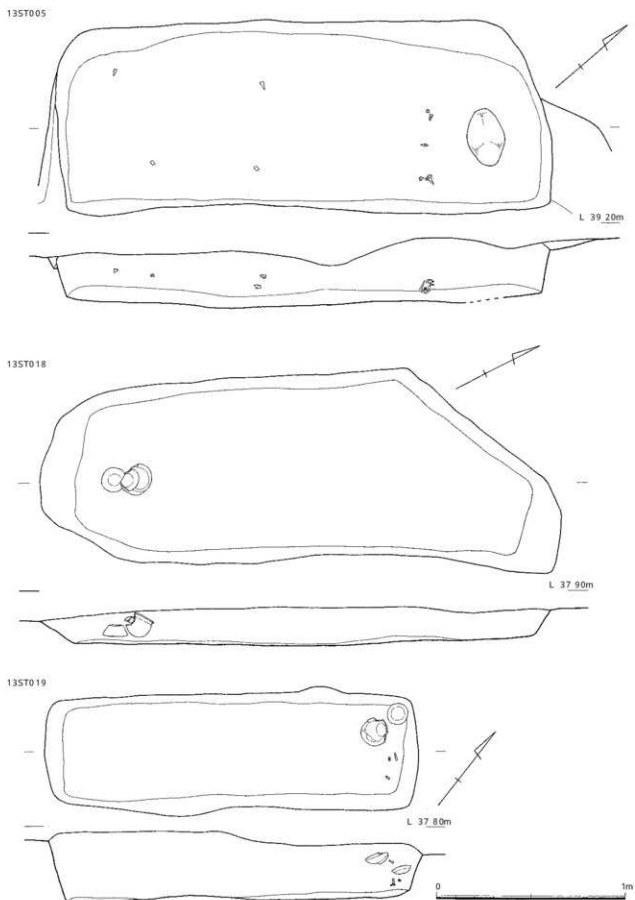
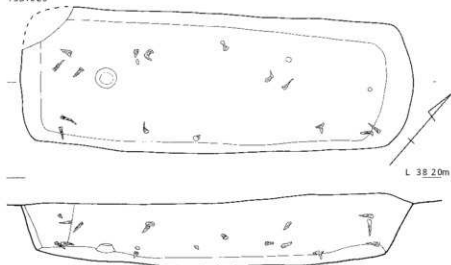


図 37 13ST005・018・019 実測図 (1/20)

13ST005 (図 37)

調査区の北側にあり、13SX002 に切られている。木棺墓と考えられる。主軸は $N-35^{\circ} 32' -E$ をとり、検出面の標高は 39.2 m を測る。墓壇は平面長方形を呈し、長軸 2.61 m、短軸 1.0 m、検出面からの深さは 0.36 m を測る。棺材は残存していなかったが、埋土中から木棺に使用したと考えられる 9 本の鉄釘片を検出した。出土状況から木棺の規模は長軸 1.7 m 前後、短軸 0.5 m 前後と推測される。鉄釘に付着した錆の木目の観察から棺材の厚さは 2.0 cm 前後であったと推測される。供献遺物は出土しなかった。埋土は黒灰色土で床面直上には暗黄色土が堆積していた。床を 5cm ほど掘りすぎている。

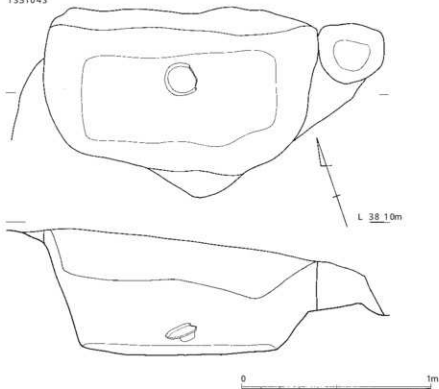
13ST025



13ST018 (図 37)

調査区のほぼ中央に位置し、13ST019 の南側に隣接している。S-15 がかぶっている。墓壇の主軸は $N-29^{\circ} 59' -E$ をとり、標高 37.8 m を測る。墓壇は平面略長方形を呈し、長軸 2.73 m、短軸 0.98 m、検出面からの深さ 0.2 m を測る。鉄釘は残存していなかったが、供献土器が床から浮いた状態で出土した。出土遺物は南側より土師器杯 a 2 点、鉢 1 点が出土している。

13ST043



13ST019 (図 37)

調査区のほぼ中央に位置し、13ST018・43 に隣接している。S-15 がかぶっている。木棺墓と考えられる。主軸は $N-52^{\circ} 21' -E$ をとり、標高 37.7 m を測る。墓壇は平面長方形を呈し、長軸 1.97 m、短軸 0.65 m、検出面からの深さ 0.37 m を測る。北東側から木棺に使用したと考えられる鉄釘と毛抜きの鉄製品が 1 点ずつ出土している。また北東側からは土師器杯 c と小皿 a 各 1 点が宙に浮いた状態で出土している。埋土は茶褐色土である。

図 38 13ST025・043 実測図 (1/20)

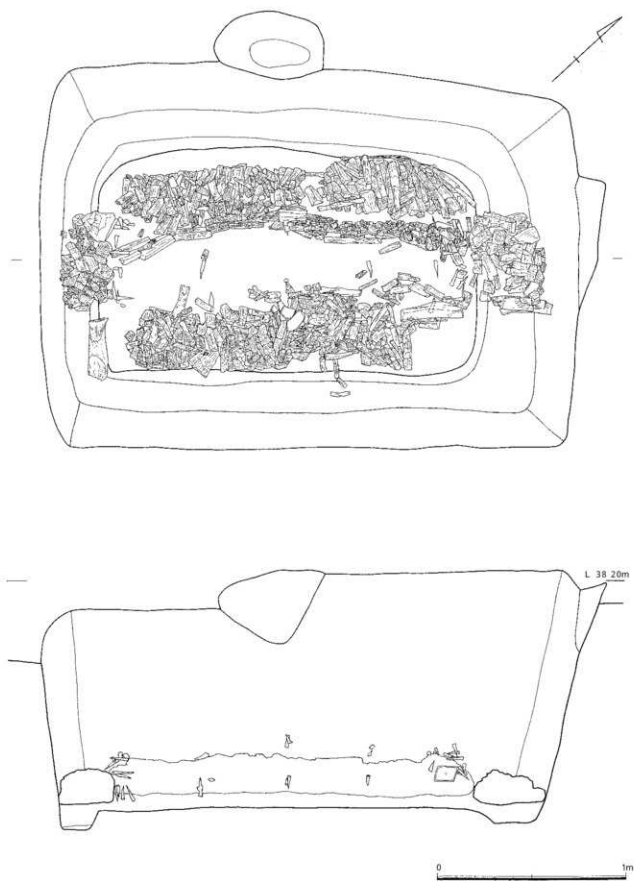
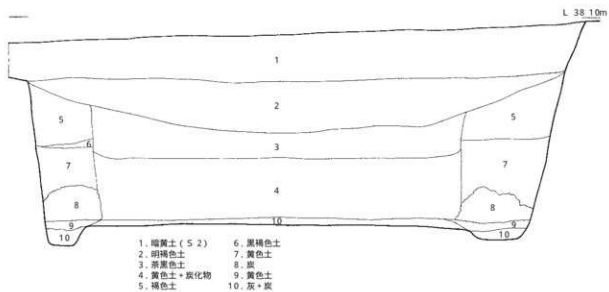
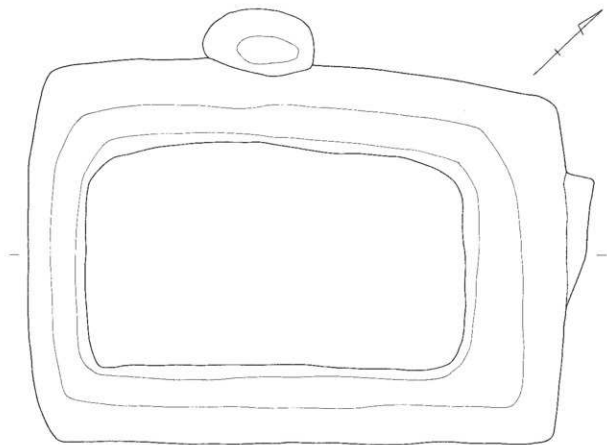


图 39 13ST045 实测图① (1/20)



0 1m

图 40 13ST045 実測图② (1/20)

13ST025 (図 38)

調査区北側の 13SX002 の下層で検出し、13SX030 に切られている。木棺墓と考えられる。墓壇の主軸は $N-47^{\circ} 34' - E$ をとり、標高は 38.1 m を測る。平面長方形を呈し、長軸 2.07 m、短軸 0.75 m、検出面からの深さ 0.37 m を測る。出土遺物は鉄釘 20 本、墨書のある土師器坏 a 1 点である。鉄釘の出土状況から木棺の規模は長さ 1.7 m 前後、幅 0.5 m 前後と推定される。また鉄釘の錆に残った木目の観察から棺材の厚さが 1.8 cm 前後であったと推測される。埋土は上層から黒茶色土・灰褐色土・明褐色土・明黄褐色土・淡黄褐色土に分けられ、黒茶色土へ明褐色土までが棺の陥没に伴う上層土の落ち込み、明黄褐色土・淡黄褐色土が当初の埋土と考えられる。土師器坏 a は床面直上でひっくり返った状態で検出した。

13ST043 (図 38)

調査区の中央に位置し、13SX008 がかぶっている。墓壇の主軸は $N-74^{\circ} 17' - W$ をとり、標高は 38.1 m を測る。墓壇は平面長方形を呈し、長軸 1.45 m 以上、短軸 0.97 m、検出面からの深さ 0.65 m を測る。出土遺物は土師器の坏・皿 a 各 1 点が床面から浮いた状態で出土している。

13ST045 (図 39・40)

調査区はやや北側に位置し、13SX002・008 に切られる木炭榑木棺墓である。墓壇の主軸は $N-43^{\circ} - E$ をとり、標高 38.2 m を測る。墓壇は平面長方形を呈し、長軸 2.95 m、短軸 2.04 m、検出面からの深さ 1.22 m を測り、同調査区では際立って大きな墓壇である。木棺に使用されたと考えられる鉄釘が 41 点出土しており、出土状況からその規模は長さ 1.9 m 前後、幅 0.5 m 前後を測るものと想定される。鉄釘に残る木目の観察から棺材の厚さが 3.5 cm 前後であったと推測される。墓壇床面は周囲が低くなり棺が乗る中央が 5 ~ 10 cm ほど高く台状になっている。この面に厚さ 5 cm の木炭層があり、さらに薄く土をかぶせた上に棺を安置している。棺の周囲には側面と小口を中心に棺に直行して木炭が積まれていた。木炭榑と考えられる。その上を大きな土層単位で埋めている。13SX002・008 がかぶっていたこともあり外標施設は確認できなかった。遺物は木棺を留めていた鉄釘のほか、棺北側より漆の箱に入ったと考えられる青銅製方形鏡が棺内北端から、土師器坏 c と小皿 a 各 1 点が南東側の木炭を積んだ上から出土した。人骨・着衣等は残存していなかった。

13ST050 (図 41)

調査区の北側で 13SX002 の下で検出した。一部調査区外にのびている。主軸は $N-72^{\circ} 28' - E$ をとり、標高 37.8 m を測る。平面長方形を呈し、長軸 1.7 m 以上、短軸 0.85 m、検出面からの深さ 0.25 m を測る。床面西側から鉄製品の毛抜き 1 点、鉄 1 点、鉄釘 2 点、硫黄の小塊 1 点が出土している。土師器皿 2 点が北脇側から出土している。これらの状況から墓と判断した。

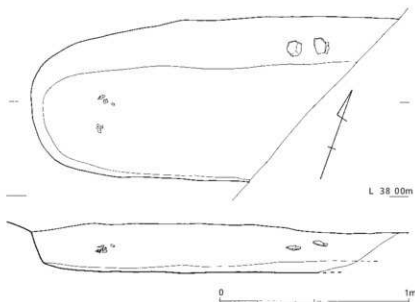


図 41 13ST050 実測図 (1/20)

c. その他の遺構

13SX002

調査区の北東側にある大きなたまり状の遺構である。地形に沿って西側から東側に向かって堆積している。埋土は茶黒色をしている。平坦に造成する以前の旧表土と考えられる。

13SX008

調査区の中央に位置し、13SX002を切っている。旧表土もしくは畑の耕作跡と考えられる。黒茶色土の埋土である。

13SX010

調査区の北側に位置し、13SX002の下で検出した。平面長方形プランを呈し、長軸2.2m、短軸0.88m、検出面からの深さ0.35mを測る。遺物は出土していない。埋土は黒色土の単一層である。周辺の遺構状況から墓の可能性が考えられる。

13SX020

調査区の中央に位置し、13SX008に切られるたまりである。平面は長円形を呈し、長軸1.48m、短軸0.72m、検出面からの深さは0.19mを測る。埋土は灰茶色土を呈する。

13SX030

調査区の北側に位置し、13SX002の下で検出した。13ST025を切る土坑である。平面長方形を呈し、長軸1.6m、短軸0.8m、検出面からの深さ0.35mを測る。墨書のある須恵器が出土した。墓の可能性も考えられる。

13SX033

調査区の南側に位置する小穴である。

13SX036

調査区の南側に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸2.55m、短軸0.73m、検出面からの深さ0.23mを測る。土師器片a1点出土した。墓の可能性が考えられる。

13SX039

調査区の南側に位置する小穴である。

13SX049

調査区中央に位置する、13SX002の下で検出したたまり状の遺構である。調査区外にのびている。埋土中に花崗岩の円礫を含んでいる。斜面の堆積土と考えられる。幅3.25m、検出面からの深さ0.6mを測る。

13SX056

調査区中央に位置する、13SX002の下で検出したたまり状の遺構である。不整形を呈し、検出面からの深さ0.42mを測る。

13SX060

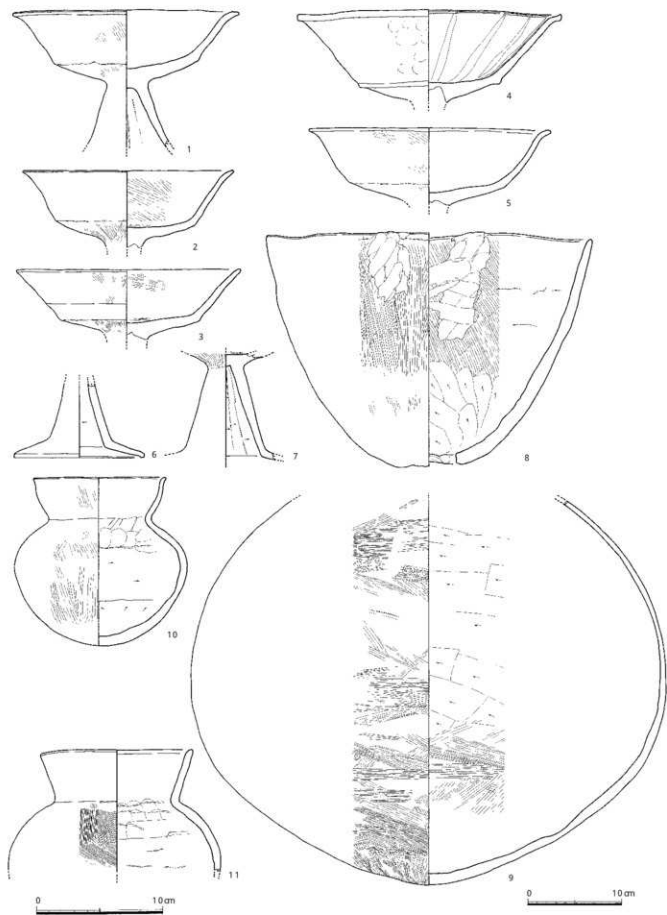


图 42 13SI035 出土遺物実測図① (1/3・1/4)

調査区の南側に位置する遺構である。長方形を呈し、長軸 1.28 m、短軸 0.6 m、検出面からの深さ 0.32 m を測る。

13SX067

調査区中央に位置し、13SX056 に切られているためである。略円形を呈し、検出面からの深さは 0.42 m を測る。調査区外にのびている。

13SX078

調査区の南側に位置する、13SX060 周辺にある小穴群である。

(4) 出土遺物

竪穴式住居

13SI035 出土遺物 (図 42・43)

土師器

高坏 (1～7) 口径 16.7～20.9 cm を測る。体部に明瞭な段が付き、口縁部はわずかに外反する。1・5 は体部外面にハケ調整が残っており、3・4 の外面はハケ調整をナデで擦り消している。4 の内面には暗文が施されている。6 は脚部で、脚端部径 10.3 cm を測る。脚はどれも端部付近を横ナデし、脚部外面はナデ、脚部内面は横方向のヘラ削りを行なっている。

甗 (8) 口径 25.8 cm、器高 18.5 cm を測る。形態は鉢形を呈し、底部は丸底で径 5 cm の単孔がある。外面は縦方向のハケ目、内面上部は斜め方向のハケ目、底部から体部にかけては斜め方向のヘラ削りが行なわれている。体部上面に焼成前に施された補修痕が残り、粘土を貼り付けた跡が明瞭である。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

壺 (9～11) 9 は口縁部を欠く大型の壺である。胴部は球形を呈し、胴部最大径は 50.2 cm を測る。外面は底部付近が縦方向のハケ目、胴部は横・斜め方向のハケ目後ナデが行なわれている。内面は底部付近にナデが行なわれ、胴部には横方向のヘラ削りが行なわれている。胴部外面下半にはススが顕著に残る。10・11 は小型の壺である。10 は器高 13.3 cm、胴部最大径 13.6 cm である。10 の口縁はわずかに内湾しながら立ち上がり、11 の口縁は直立している。胴部外面はハケ目調整を行い、口縁部はハケ目調整後横ナデで仕上げている。頸部内面に粘土紐のナデ接合痕がある。外面には底部から胴部にかけて二次焼成によるススが附着している。

ミニチュア土器 (12・13) 12 は口径 4.8 cm、器高 3.8 cm、13 は口径 3.8 cm、器高 2.2 cm を測る。ともに手捏ねによる成形で、指圧によるナデ痕が顕著に残っている。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

13SI035 屋内土坑出土遺物 (図 43)

高坏 (14) 坏部片である。底部と体部の境に段が付き、口縁部は外反気味になる。内外面ともにハケ目調整を行い、体部外面はその後横ナデで仕上げている。

鉢 (15) 口径 12.0 cm、器高 5.6 cm を測る小型の丸底鉢である。口縁はわずかに外反する。内面には底部



図 43 13SI035 出土遺物実測図② (1/3)

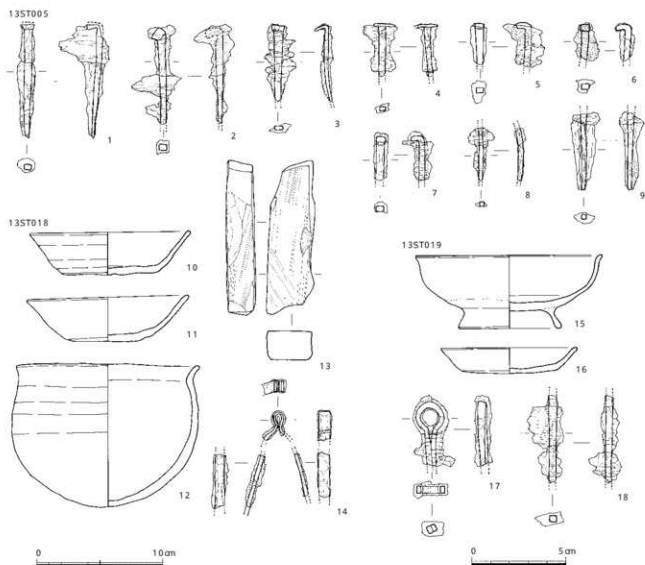


図 44 13ST005・018・019 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

から体部にかけて縦方向の強いナデ調整が行なわれており、内面の見込みは花弁状に見える。外面にはススが附着している。

墓

13ST005 出土遺物 (図 44)

鉄製品

釘 (1～9) 完存するものはない。長いもので、長さ 6.0cm 程度である。

13ST018 出土遺物 (図 44)

土師器

坏 a (10・11) 10 は口径 12.7 cm、器高 3.4 cm、11 は完形で口径 12.7 cm、器高 3.5 cm を測る。体部と底部の境は若干丸みを帯び、そのまま口縁部まで立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切りで、11 には板状圧痕が残る。体部は回転ナデで仕上げている。ともに焼成は良好で、色調は内外面とも黄褐色を呈している。

鉢 (12) 口径 14.5 cm、器高 11.3 cm を測る。胴部は球形で、端部がやや外反している。内外面とも底部はナデで、体部から口縁部にかけては回転ナデを行なっている。外面にススが附着している。口縁部を一

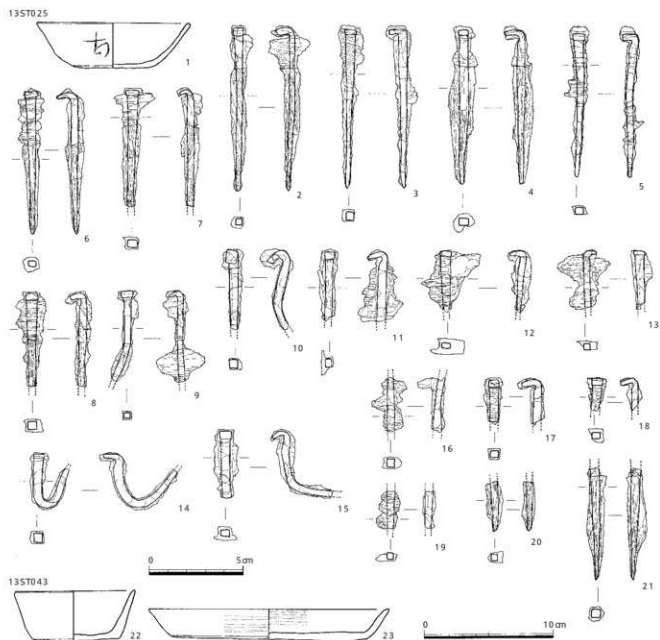


図 45 13ST025・043 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

部欠損する。焼成は良好で淡橙色を呈する。

石製品

砥石 (13) 最大長 8.1 cm、最大幅 2.6 cm、厚さ 1.5 cm、重量 57 g の泥岩製の砥石である。正面と側面の 2 面を使用している。

鉄製品

毛抜き (14) 要の部分と軸部分が残る。幅 0.6 cm、厚さ 0.2 cm を測る。

13ST019 出土遺物 (図 44)

土師器

碗 c (15) 体部は丸みを帯び、口縁端部はわずかに外反する。底部は回転ヘラ切り後、細長い高台を貼付している。体部は回転ナデで仕上げている。

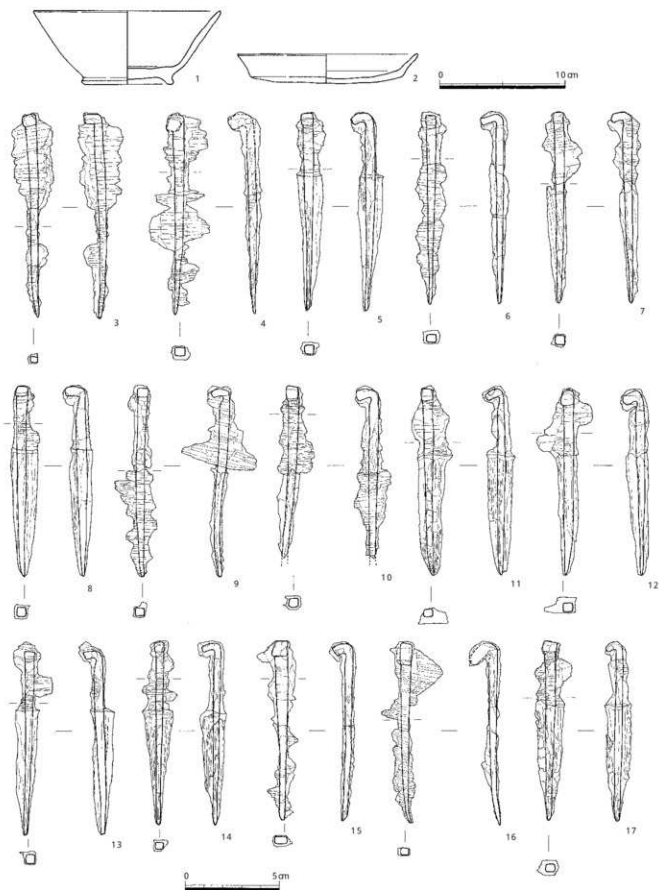


図 46 13ST045 出土遺物実測図① (1/2・1/3)

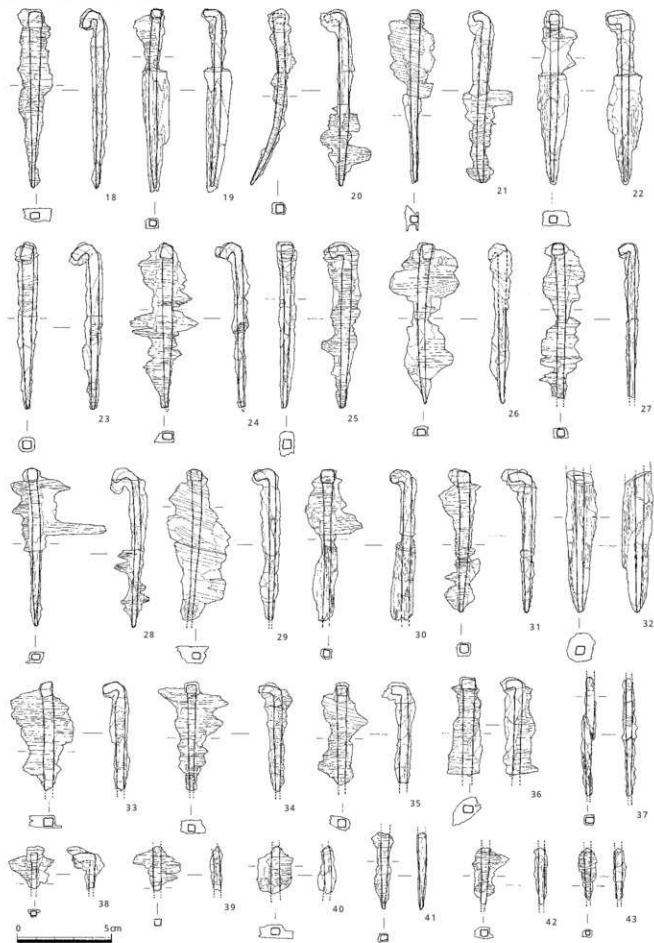


図 47 13ST045 出土遺物実測図② (1/2)

坏 a (16) 口径 10.7 cm、器高 2.0 cm を測る。底部外面は回転ヘラ切り離し、体部は回転ナデで仕上げている。胎土に金雲母片を少量含む。

鉄製品

不明製品 (17) 残存長 3.5 cm を測る。錆の中に見える木質の痕跡から、木製品に打ち込まれた軸受けやフックの可能性が考えられる。

釘 (18) 頭部・先端ともに欠損している。残存長 4.5 cm である。

13ST025 出土遺物 (図 45)

土師器

坏 a (1) 口径 12.2 cm、器高 3.5 cm、底径 3.3 cm を測る。体部と底部の境はすこし丸みを帯び、そのまま口縁部まで立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切り後、ナデを行い、体部は回転ナデで仕上げている。焼成はやや不良で、色調は内外ともに明黄灰色を呈する。体部外面に墨書があるが判読できない。

鉄製品

釘 (2～21) 2～6 までが完形品である。先端は尖っており、頭部は逆 L 字状につくられている。断面は方形になっている。14・15 のように大きく変形したものもある。

13ST043 出土遺物 (図 45)

土師器

坏 e (22) 口径 9.5 cm、器高 3.9 cm、底径 6.8 cm を測る。底部は平坦で、体部は直線的にのびる。底部は回転ヘラ切りで、体部は内外面ともに回転ナデ。胎土は白雲母片を多く含んでいる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明橙灰色を呈する。

皿 a (23) 口径 9.5 cm、器高 2.5 cm、底径 15.6 cm を測る。底部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りを行なっている。内外面にミガキ a を施す。

13ST045 出土遺物 (図 46～48)

土師器

坏 c (1) 口径 14.8 cm、器高 5.8 cm、高台径 7.2 cm を測る。底部と体部の境はやや丸みを帯び、そのまま口縁部まで直線的にのびる。底部外面は回転ヘラ切り後、高台を貼付けている。焼成は良好で淡黄灰色を呈する。

皿 a (2) 口径 14.2 cm、器高 2.3 cm、底径 12.0 cm を測る。底部外面は回転ヘラ切り後ナデを行なっている。体部は回転ナデで仕上げている。焼成は良好で、明黄橙色を呈する。

鉄製品

釘 (3～43) 計 41 点が出土した。3～9・11～26・28・31 の 25 点が完形品である。完形品の法量は長さ 7.4～10.7 cm、幅 0.4～0.6 cm、厚み 0.3～0.5 cm を測る。どれも先端は尖っており、頭部は逆 L 字状になっている。ほとんどに棺材の木質痕跡がある。

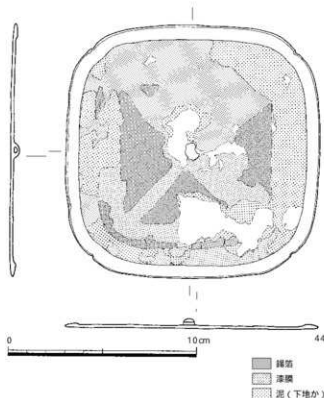


図 48 13ST045 出土遺物実測図③ (1/2)

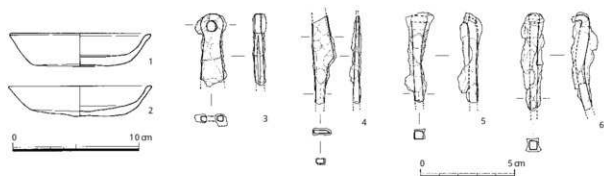


図 49 13ST050 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

青銅製品

鏡 (44) 一辺 14.3cm を測る方形鏡である。鏡胎の厚み 0.15cm、外縁部厚 0.2～0.25cm、鈕厚 0.5cm を測る。角に入隅がある。背面に漆と錫箔による装飾がある。平脱方形鏡と考える。鏡がちょうど入るサイズの漆塗りの木箱に入っていたと考えられるが、木質はほとんど消失し漆膜が残存している状態であった。木箱は外面が黒漆塗り、内面は圧痕から布貼りであったと可能性がある。

13ST050 出土遺物 (図 49)

土師器

坏 a (1・2) 口径 11.2・11.3cm、器高 2.6・2.4cm、底径 7.1・7.5cm を測る。ともに底部外面は回転ヘラ切りで、2 には板状圧痕が残る。底部内面はナデ、体部は回転ナデを行なっている。ともに焼成は良好で、色調は明黄灰白色を呈する。

鉄製品

不明製品 (3) 頭部に孔がある。把手部分か。残存長 3.8cm、厚さ 0.3cm ほどである。

鉄 (4) 鉄の刃部分と考えられる。片刃で最大幅 1.0cm、厚さ 0.3cm を測る。

釘 (5・6) 残存長 4.5・5.5cm である。木質の痕跡が残る。

その他の遺構

13SX002 出土遺物 (図 50)

土師質土器

播鉢 (1) 口縁部の破片である。口縁端部上面は平坦になっている。内外面ともにハケ目調整後にナデ調整を行なっている。内面にはヘラ描きで播目が施されている。焼成は良好で、色調は内面が明黄橙色、外面が明橙色を呈する。

石製品

石鏃 (2・3) 2 は黒曜石製の打製石鏃で基部に抉りをもたない。3 は安山岩製の打製石鏃で基部に浅い抉りをもっている。

金属製品

銅銭 (4) 明銭の「永楽通宝」である。重さ 2.8g を測る。

13SX020 出土遺物 (図 50)

土師器

坏 a (5) 口径 13.0cm、器高 3.9cm、底径 8.1cm を測る。口縁端部が肥厚していて、底部外面はヘラ切り離し調整を行なっている。焼成良好で色調は灰黄色を呈する。

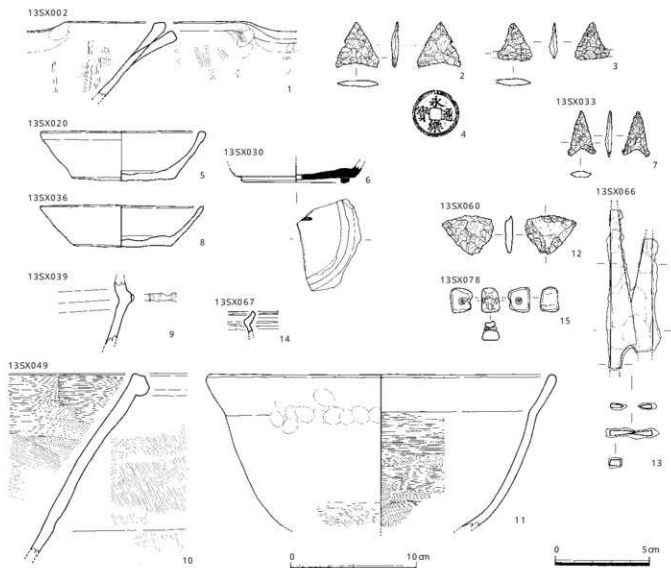


図50 13SX002・008・009・020・030・033・036・039・049・056・060・067・078 出土遺物実測図 (1/2・1/3)
13SX030 出土遺物 (図50)

須恵器

坏c (6) 底部片である。外底部に墨痕がある。胎土に2mm弱の黒色粒を少量含む。

13SX033 出土遺物 (図50)

石製品

打製石鏃 (7) 安山岩製の打製石鏃である。長さ2.8cm、最大幅1.4cm、厚み0.4cmを測る。基部に抉りをもつ。

13SX036 出土遺物 (図50)

土師器

坏a (8) 口径12.9cm、器高3.3cmを測る。底部外面は回転ヘラ切り、底部内面はナデ、体部は横ナデを行なっている。胎土に茶褐色粒、黒褐色粒を少量含む。

13SX039 出土遺物 (図50)

縄文土器

鉢 (9) 胴部上半部分の破片である。くの字形に屈曲し、その部分にキザミ目突帯を貼り付けている。色調は内面が暗黒茶色、外面が黄灰茶色を呈する。胎土に角閃石をわずかに含む。

13SX049 出土遺物 (図 50)

土師質土器

鍋 (10) 体部および口縁部の破片である。口縁は玉縁状になっている。外面は縦方向のハケ目調整、内面には横方向のハケ目調整で仕上げている。外面全体にススが付着している。

鉢 (11) 復元口径 27.6 cm を測る。口縁端部が上方にひらいている。外面の体部と口縁部の境には指頭痕が付いている。体部内面には横方向のハケ目調整が行なわれ、ススが付着している。

13SX060 出土遺物 (図 50)

石製品

ラウンドスクレーパー (12) 安山岩製の打製搔器である。片面縁部調整で、表面のほぼすべてと裏面の縁部のみが調整されている。

13SX066 出土遺物 (図 50)

鉄製品

鉄 (13) 鉄の刃の部分である。先端と握り手の部分を欠損する。残存長 8.5 cm である。

13SX067 出土遺物 (図 50)

縄文土器

浅鉢 (14) 口縁部の破片で、くの字状に外反している。精製土器で、内外面に丁寧な横ナデ調整が行なわれている。焼成は良好で、色調は黒褐色を呈している。

13SX078 出土遺物 (図 50)

石製品

不明製品 (15) 粘板岩製の扁平な直方体である。中央に穿孔があり、それは両面から行なわれている。側面に十字形の溝状の削痕が入る。裏面には細い削痕が 2 条入っている。用途は不明である。

暗黄色土出土遺物 (図 51)

土師器

ミニチュア土器 (1) 口径 3.6 cm、器高 2.4 cm を測る。手捏ね成形で、内外面に指頭痕が残る。胎土に白雲母片と赤褐色粒を少量含む。

石製品

石鏃 (2・3) 黒曜石製の打製石鏃である。基部に抉りをもつ。

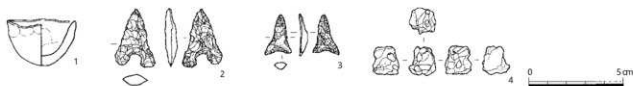


図 51 暗黄色土出土遺物実測図 (1/2)

土製品

不明製品 (4) 高さ、厚み、幅ともに1.4 cm前後を測る。任意の方向でチューブ状の空洞や窪みがある。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。

(5) 小結

1) 遺構の時期について

住居

13SI035 遺物は高坏・壺・小型丸底壺・甎が出土している。高坏は布留式系の高坏で体部はハケ目調整が行なわれている。小型丸底壺の体部は球形を呈し、口縁端部はわずかに外反している。これらの特徴からⅡc期～Ⅲa期にあたり、4世紀中から4世紀後半の時期が考えられる。

墓

墓全体の配置状況を見てみると南北方向に並ぶ形で、ひとつの墓地を形成しているが、造営時期は幅がある。

13ST005 墳墓群の中では最北端に位置する木棺墓である。鉄釘が9点出土したのみで、供献土器は出土していない。造営時期は不明である。

13ST018 供献土器は土師器杯a2点・鉢1点で構成される。Ⅶ期のもので造営時期は9世紀後半と考えられる。

13ST019 供献土器は土師器碗c1点と皿a1点である。Ⅸ期で造営時期は10世紀中葉から後半にかけての年代が考えられる。

13ST025 墨書土師器杯a1点が出土しており、Ⅶ期のもので造営時期は9世紀後半と考えられる。

13ST043 供献土器は土師器杯eと皿が1点ずつ出土しており、造営時期はⅣ～Ⅴ期の8世紀後半が考えられる。調査区の中では最も古いものである。

13ST045 供献土器からⅥb期で、造営時期は9世紀前半と考えられる。木炭榑木棺墓と呼ばれる埋葬形態であるが、宮ノ本遺跡では1次調査の2号墓について2例目である。2号墓は上面に花崗岩石を利用して平面長方形に積んだ列石壇を持ち、墓壇は長軸2.6 m、短軸1.6 m、深さ1.8 mとやはり大きい。床面に木炭を敷きその上に棺を安置し、細かい層で丁寧に埋めている。13ST045より木炭の量は少ないようである。また棺を安置した後の埋土は大きな単位で埋めている。さらに、削平されていることもあるが、外標施設は検出されなかった。

13ST050 供献土器から、Ⅹ期で11世紀初頭前後の時期が考えられる。調査区の中では最も埋葬時期が新しい。

その他の遺構

13SX002 土師質土器鉢と明銭の「永楽通宝」が出土している。「永楽通宝」の初鋳年は1408年である。

13SX030 13ST025に切られている土坑で、形態と出土遺物から墓の可能性が考えられる。埋土中から須恵器杯c1点が出土している。8世紀中葉の時期が考えられる。

13SX036 形態と出土遺物から墓の可能性がある。8世紀代の土師器杯aが出土している。

2) まとめ

今回の調査では、古墳時代前期の住居1基、8世紀から10世紀にかけての墳墓7基、斜面の自然堆積層などを検出した。宮ノ本丘陵に広がる古代の墳墓造営の範囲が裾部までさらに広がることを確認した。調査区中央から北側に集中しているが、造営時期は長期にわたる。埋納品の格差や埋葬形態の違いを階層差と考えるならば、それによる埋葬場所の区別はなく混在している状況である。また斜面の重層する堆積は中世以降の開発等により地形改変が随時行なわれていたことを示している。



図 52 第 13 次調査略測図 (1/200)

第 13 次調査遺構一覧表 (1)

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年順に基づく。

S-番号	遺構番号	遺構種別	埋土状況 (古→新)	前後関係 (古→新)	遺構面	時期	備考	地区番号
1		たまり	明白色土	4→2→1	1		新しい	K4
2	13SX002	法面の落ち (たまり)	茶黑色土	4・5・6・7・10・25・29・30・45・49・50・56・68→2→1・8	1	中世	旧表土?	3ライン
3		小穴	灰色土		1		鉄器片出土	K5
4		小穴群	茶色土	4→2→1	1			K3
5	13ST005	木棺墓	炭化物+黄色土→茶黑色土→明褐色土→暗茶色土 (S-2)	5→2	1	不明	鉄釘出土	M2
6		溝	灰色土	8→6	1	近代	畑の境か?	I7
7		小穴	灰色土	2→7	1		宋銭有り	K4
8	13SX008	攪乱	黒茶色土	2・12・15・19・43・46・56・66→8→6・9	1		畑の耕作土	H6
9	13SX008	攪乱	黒茶色土	8・11・15・20・23・24→9	1		畑の耕作土	G8
10	13SX010	土壌	黒色土	10→2	1		土壌墓の可能性あり	K3
11		たまり	黒色土まだら	20・14→11→9	1			H9
12		小穴	黒色土・茶色土	12→8	1	古墳		H7
13		小穴	茶色土	13→9	1			G9
14		小穴	灰色土	14→11	1			G9
15		たまり	黒色土	17・18・19・21・22→15→8・9	1	中世		G8
16		小穴群	茶色土・灰色土	2→16	1			J4
17		土壌	茶色土	17→15	1	古墳		G8
18	13ST018	木棺墓	茶色土	18→15	1	9 C		G7
19	13ST019	木棺墓	茶色土	19→15→8	1	10 C	鉄釘・鉄製毛抜き出土	G7
20	13SX020	たまり	灰茶色土	20→11→9	1	9 C		G8
21		小穴	明茶色土	21→15	1	古墳		G7
22		小穴群	黒色土	22→15	1	平安		G8
23		小穴群	灰色土	23→9	1	古代		F10
24		小穴	茶色土		1	古代		F8
25	13ST025	木棺墓	淡褐色土→灰褐色土→明黄褐色土→明褐色土→褐色土→黒茶色土	25→2	1	9 C	鉄釘出土	J4
26		小穴	灰色土	15→26	1			F8
27		小穴	茶色土		1			F8
28		小穴	茶色土		1			F8
29		小穴		29→2→1	1	古墳		K4
30	13SX030	土壌		30→2	1	平安前期	土壌墓の可能性あり	J4
31		小穴群			1			E11
32		小穴群	黒色土・灰色土		1			E11
33	13SX033	小穴			1			E9
34		小穴群			1			E9
35	13S1035	竪穴式住居	赤茶色土・暗黄褐色土→暗茶色土→黒茶色土	70→35→42・76	1	古墳前期		F7
36	13SX036	土壌			1	平安前期	土壌墓の可能性あり	E9
37		小穴	灰色土		1			E10
38		小穴群			1			D10
39	13SX039	小穴			1	縄文晩期		D9
40		土壌	茶褐色土		1	古代		G6
41		小穴			1			D10
42		小穴群	暗灰色土・黒色土	35→42	1	古代		F6
43	13ST043	木棺墓	茶褐色土	43→8	1	奈良		H6
44		小穴群			1	平安後期		D10
45	13ST045	木棺墓	明黄色土黒まだら→黒褐色土→褐色土→炭+黄色土→茶黒色土→明褐色土		1	9 C	鉄釘・青銅製方形鏡出土、木炭椰木棺墓	I5
46		小穴		46→2	1		根穴	H6
47		小穴			1			G6
48		小穴群			1			E8
49	13SX049	たまり	花崗岩破入り	49→2	1	中世	13SX002の一部か?	I4
50	13ST050	木棺墓	暗黄まだら色土→黒茶色土	50→2	1	11 C	鉄製刀子・鉄釘出土	J3

第 13 次調査遺構一覧表 (2)

S-番号	遺構番号	遺構種別	埋土状況 (古→新)	前後関係 (古→新)	遺構面	時 期	備 考	地区番号
51		たまり	暗茶色土		1			B6
52		小穴		55→52	1	古代		B7
53		小穴			1			B7
54		小穴群			1	古代		C6
55	11S1005	竪穴式住居	黒黄色土→白灰色土 砂混じり→黒茶色土	58・61・ 63→55→52・ 59・75	1	古墳前期	11S1005の続き	C8
56	13SX056	たまり	明灰色土	56→2→9	1	中世		H5
57		小穴群			1			C7
58		小穴		58→55	1	古墳	11S1005の主柱穴	C8
59		小穴		55→59	1	古墳		C7
60	13SX060	土壇		60→78	1	奈良	平面長方形	D8
61		小穴		61→55	1			C8
62		小穴		62→56	1			H5
63		小穴		63→55	1		11S1005の主柱穴	B8
64		小穴			1			C8
65		小穴群		65→69	1			F4
66		小穴	明灰色土	66→8	1			G5
67	13SX067	たまり	茶黒色土→黄色土	67→56	1	縄文晩期		G5
68		小穴		68→2→8	1			H4
69		小穴群		65→69	1	奈良		F5
70		小穴	黒茶色土→暗茶褐色	70→35→76	1	古墳	13S1035床面上の小穴	E6
71		小穴群			1			F5
72		小穴群			1			D6
73		小穴		73→74	1			E5
74		小穴		73→74	1	古墳		E5
75		小穴群		55→75	1	古墳		C8
76		小穴群		70→35→76	1	奈良		E6
77		小穴		35→77	1			F5
78	13SX078	小穴群		60→78	1	奈良		D8
79		土壇	茶色土		1			D7

第 13 次調査出土遺物一覧表 (1)

5-1	土 器 銅管, 片	5-19	須 恵 銅 押e (ヘラ), 軸c, 管, 片 土 器 銅押a, 管 (ヘラ, 刃部), 管 金 属 器 品 包接子, 鉄釘	5-29	編 文 土 器 鉢 (編文陶器)
5-2	須 恵 銅 押管a1, 押a (刃部), 押a, 押c, 押×器a, 管, 管a 土 器 銅押a, 押a (ヘラ), 押a (器身), 押d, 小皿a (ヘラ) の底a (イド), 小皿b, 高坪, 管, 管, 軸 (中管) 黒色土 器 灰 石 製 品 石鏝 (ab+and), 鏝 (刃部) 土 師 實 土 師 磁器, 鉢 (中管) 白 磁 磁片 弥 生 土 師 管, 管 金 属 器 品 銅線, 鉄釘, 銅線 そ の 他 磁片	5-20	土 器 銅押a (ヘラ, 器身), 軸 (玉鏝)	5-40	須 恵 銅 押管, 管 土 器 銅押 (北後半), 高坪, 管, 管 石 製 品 フレイタ (and)
5-3	土 器 銅片 金 属 器 品 不明鉄製品	5-21	土 器 銅高坪, 片	5-41	須 恵 銅 管×管 土 器 銅押 (北後半), 高坪, 管, 管 石 製 品 フレイタ (and)
5-4	土 器 銅片	5-22	須 恵 銅 鉢 土 器 銅押a (平安朝~), 管, 片	5-42	土 器 銅高坪, 片
5-5	土 器 銅片 金 属 器 品 鉄釘	5-23	須 恵 銅 片 土 器 銅 片	5-43	土 器 銅押a, 皿a (ヘラ, びりょう)
5-6	土 器 銅管×管, 片 須 恵 陶 銅片	5-24	須 恵 銅 片 土 器 銅 片	5-44	須 恵 銅 片 土 器 銅 片 (イド), 管, 管
5-7	土 器 銅片 金 属 器 品 銅線	5-25	須 恵 銅 管×管, 片 土 器 銅押a (ヘラ, 器身, 刃部), 片 金 属 器 品 鉄釘	5-45	須 恵 銅 押管, 管, 管 土 器 銅押a, 皿a (ヘラ, びりょう), 管, 片 そ の 他 磁片
5-8	須 恵 銅 管 土 器 銅押×器, 片	5-26	土 器 銅高坪, 管×管	5-46	5-45 須 恵 土 須 恵 銅 片 土 器 銅 片 金 属 器 品 鉄釘
5-9	須 恵 銅 高坪, 管, 片 土 器 銅押a, 押c, 高坪, 管 土 師 實 土 師 管, 鉢, 管 弥 生 土 師 管 (中管)	5-27	土 器 銅管, 片	5-47	5-45 須 恵 土 須 恵 銅 片 土 器 銅 片 金 属 器 品 鉄釘
5-10	土 器 銅片	5-28	須 恵 銅 押 (器身) 土 器 銅 管	5-48	5-47 須 恵 土 土 器 銅 片
5-11	須 恵 銅 片 土 器 銅 中型丸底器, 片	5-29	須 恵 銅 押a (器) 土 器 銅 管	5-49	須 恵 銅 押管, 管 土 器 銅 片
5-12	須 恵 銅 押a, 皿×管, 管 土 器 銅高坪, 管×管, 片	5-30	須 恵 銅 押a (器), 押c (器身, 器身及びV) 土 器 銅 管, 管, 片 石 製 品 フレイタ (ab)	5-50	土 器 銅 片
5-13	土 器 銅片	5-31	土 器 銅 片 須 恵 陶 磁器	5-51	須 恵 銅 押管, 片 土 器 銅 片
5-14	土 器 銅片	5-32	須 恵 銅 片 土 器 銅 片 石 製 品 フレイタ (ab)	5-52	須 恵 銅 押a (北後半) 土 器 銅押a (ヘラ, びりょう), 高坪, 管 土 師 實 土 師 磁, 鉢 (中管) 白 磁 磁片 弥 生 土 師 管 (中管)
5-15	須 恵 銅 管, 片 土 器 銅押, 小皿a, 管 (透形押片), 管×管	5-33	石 製 品 石鏝 (and)	5-53	土 器 銅 片
5-16	土 器 銅片 編 文 土 器 鉢	5-34	土 器 銅 片	5-54	土 器 銅高坪, 管
5-17	土 器 銅管, 管, 小型丸底器 (複製品)	5-35	5-35 須 恵 土 土 器 銅 管		
5-18	須 恵 銅 片 土 器 銅押a (ヘラ), 管 (平安朝前), 管, 鉢 (陶器) 片 石 製 品 砥石 (刃部) 金 属 器 品 包接子	5-36	土 器 銅押a (ヘラ, 器身), 管		
		5-37	土 器 銅 片		
		5-38	須 恵 銅 片 土 器 銅 管, 片		

V. 分析

1. 宮ノ本遺跡第13次調査 13ST045 木棺墓出土の鏡について

下川可容子

はじめに

近年、宮ノ本丘陵上に営まれた平安時代の木棺墓群から、鏡や漆製品などの副葬品の出土が相次いでいる³¹⁾。今回報告する方形鏡も9世紀後半とされる木棺墓内の床面で検出された。鏡の周囲からは漆のような膜や木質が検出されており、箱状のものに収めて副葬されたものと考えられる。(Pl.a.1) 出土状況の詳細については本文を参照されたい。

さて、鏡は漆膜や木質を含む土ごと遺構から切り離され室内に運び込まれたが、すでに乾燥が始まっており、鏡背面側の最上層にあった膜には亀裂が生じ、端部がカールしていた。(Pl.a.2) また、鏡面側でも少量だが漆膜や木質が確認できた。

ひとまずその状態のままX線を鏡を観察したところ、X線フィルム上で内区部分に白く写し出される部分を確認した。通常みられる鏡型による鏡の文様成形部分とは異なる写り方をしており、この時点では写真の透過の具合から銅よりもX線を吸収する鉛や錫、銀、金といった物質の存在を想定するのみで、その意味するところはよくわからなかった。

こうした状況を踏まえ本資料の調査・保存方針を次のように決定した。鏡について十分な調査・保存を最優先して行う為に、鏡箱については関連する情報を可能な限り記録として残した後は鏡から分離して別途処理する。鏡への対応は分離後の状況を見て判断する事とした。

一連の作業を通してX線写真で確認された部分がどの段階で現れるかに留意しながらの慎重な作業となった。以下にその内容について詳述する。

1. 鏡箱の調査

まず肉眼で鏡背面の観察を行った。上述したように、暗茶色の漆のような膜や箱隅部分とみられる端部が湾曲した木質が確認され、それらの残存範囲や形状から鏡がちょうど収まるサイズの方形の鏡箱が想定でき、残存しているのはその蓋部分と考えられた。

次に箱の構造を知るために、同一層と思われる層毎に実測図を書いては取り上げて、それをコピーした紙面上に置いていった。現在もその状態で保管中である。層毎の特徴を最上層から順に以下に説明する。

最上層：暗茶色を呈する非常に薄い膜状の層。透過光による断面の顕微鏡観察では約35 μ mの比較的均一な厚みを持つ黄～黄褐色の層が認められ、中には空隙が多数みられた。上部は凹凸がある。化学分析は行っていないので断定できないが漆であろうか。膜の裏には土壌が薄く附着している。(Pl.a.3)

2層目：厚みが1.0mm程の均一な土壌の層。固まってはいるが非常に脆く、すでに細片・粉状化した部分がある。

3層目：木質層。乾燥してしまっている為厚さは不明だが、鏡背面上の約1/3程の範囲に残存している。樹種の特定は行ってない。

4層目：再び2層目と同様の均質な土壌層。何となく格子状の織りを感じさせる痕跡らしきものが認められる。これについては木質の圧痕の可能性もある。

各層を観察した結果、4層目の土壌は鏡を包んだ布あるいは蓋裏に貼られた布の可能性のあるものの、確実に繊維とみられるものが確認できておらず断定できない。2層目の土壌はきめ細かい泥状だが、下地などに使用されるような調整されたものではなく径が大きい砂粒なども含まれる。また木質の圧痕なども観察出来ることから埋没中に雨水などにより箱内部に染みこんだ土壌の沈殿・堆積物、箱材の木地が腐

食により土壌化したものと判断したい。木質の下には漆膜のようなものは存在せず、箱蓋内側には塗装しなかったと考えた方が自然である。(後述するが、実際は4層目を取り除くと漆膜が確認できたが、漆膜の鏡との密着の仕方からその膜は鏡本体に属するものと判断した。)

鏡面に残っていた膜と木質、圧縮されたような土壌層は、すでに鏡からは剥離しバラバラになっており層序を確認する事はできなかった。

以上で鏡箱を復元してみると、素地には木を用い、鏡がちょうど収まる大きさで方形、蓋付き、蓋には外面のみ漆状の塗料を下地無しで直接塗ったものと考えられる。身の塗装状況について判断できなかった。

2. 鏡について

肉眼で観察し得る形態的な特徴として、鈕が非常に小さく、鏡胎の厚みは約1.5mmと薄い事が挙げられる。縁部には緑錆の下に明瞭な研磨の痕跡が認められる。

箱の構成材を取り除いたあとで鏡背面側をクリーニングしてみると、X線で確認したとおり、明らかに鈕を意識して配されたと思いき白色物質層による模様が、黒褐色の漆膜状の層の上ののっている状態が確認できた。(Pla. 4) その模様は外向きの半円が連続する線で構成される台形状を呈し、鈕を中心に4つ配されている。その外側にも連続する波形のような模様があり(Pla. 5)、こちらは緑青色で板状を呈している。白色部分については、当初箱蓋裏の文様や鏡を包んだ布なども想定したが、繊維らしきものが全く確認されなかった事や、文様の配置状況から鏡に付随すると考えた方が自然である。また、白色物質の直下に膜が位置し、その膜は鏡の外縁と内区の間を無くすように存在する事から鏡胎に塗られたものと判断した。

以上の事から、鏡の内区部分には漆を用いて2種類の文様が施されているという前提の元に以後の作業を進めた。

(1) 文様の表し方

鏡背面上での漆膜および白色物質の層序や状態を把握するために、確実に元の位置が分かる剥落片を使って顕微鏡用の断面サンプルを作成し観察した。以下はその結果である。

①白色物質がのっている膜 (Pla. 6)

3層が確認できる。上から、白色物質、漆膜、土壌の順である。白色物質は上も下も平滑な面を持つきれいな板状をなし、最も厚い部分で約30 μm 。その直下の漆膜は厚み25 μm で茶褐色、垂直方向に多数の亀裂が認められる。さらにその下の土壌層は何らかの膠着材で泥を混ぜ合わせたような印象を受けるがよくわからない。

②鏡背直上の土壌と漆膜が層状に確認できる部分 (Pla. 7)

サンプルの下部は鏡から生じた錆で、すぐ上に土壌層がある。さらにその上に薄くて確認しづらいが厚み10 μm の漆膜がのっている。土壌層は厚み200 μm で、微細な鉱物が認められる。

①②により土壌層を挟んだ一連の層序が確認でき、それによると鏡背上には3つの層がある事が分かった。つまり鏡胎側から順に、膠着物質が含まれると思いき土壌層→漆膜→白色物質である。また波形の文様は白色物質と同一層と考えられる。これらから、鏡の内区部分に泥を用いた下地を施し、漆を塗って乾燥しないうちに板状(厚みからいえば箔状)のものを置いたと考えられ、模式的に表すとFig. 1のようになる。



Fig. 1 鏡断面模式図

(2) 文様部分の材料

では、文様と考えられる白色物質層と波形を呈する板状部分の正体は何か。蛍光X線分析による材質分析²⁾の結果、いずれも銅・錫・鉛などの成分を検出し、中でも錫のピークが非常に顕著に表れている。(Fig. 2) X線写真の様子や断面観察の結果と合わせて考えると、2種類の文様とも、残存する色味や状態は異なるが錫箔の可能性が高い。またごく僅かながら台形の文様の内部には刻線が確認できる部分があり、何らか

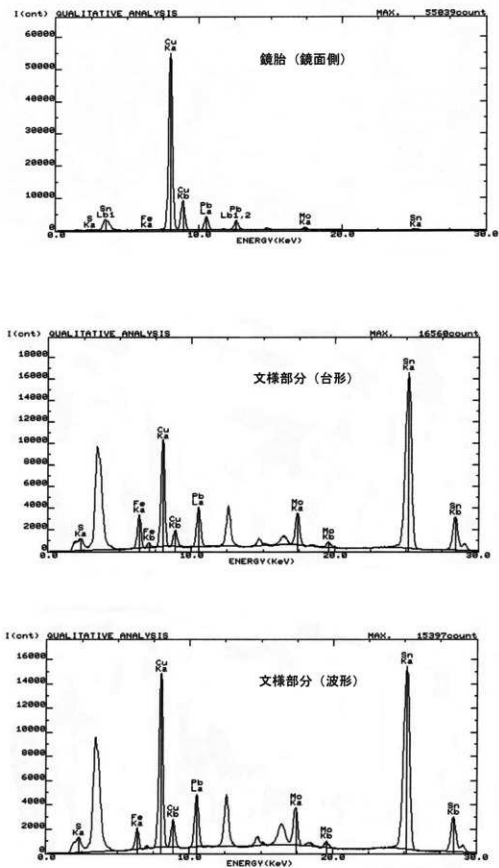


Fig. 2 蛍光 X 線分析結果

の模様は刻まれていた事を窺わせる。(Pl.a.8) つまり文様の形に切り抜いた錫箔が腐食した結果、白く見えているものと推測される。元々は錫の銀色の輝きが映える鏡であったことであろう。錫は工芸品の材料として古くから使用された材料であり、漆芸品にあつては蒔絵粉、箔として利用されている。

文様の形に切り抜いた金や銀などの金属箔を漆で貼り付けて装飾する技法は平脱(平文)技法³⁾と呼ばれ、優品は正倉院宝物中に見られる。本資料は金や銀といった材料の代わりに、銀と同じような輝きを持つ錫が用いられた平脱鏡といえる。

(3) 平脱鏡の出土例

本資料と類似した資料について、廣川守氏(泉屋博物館)から中国で出土した例をご教示頂いた。河南省偃師杏園 2003 号墓(8世紀後半～9世紀初頭)出土のもの⁹⁾やユーモルホブロス・コレクション鏡などである。いずれも入隅の方形鏡で、蝶や鳳凰などの文様に切り抜いた金や銀の箔を鈕を中心に配して漆で貼り付けている。注目されるのは波形の文様部分で、本資料と全く同じ形のもが中央の文様を取り囲むように貼り付けられている。この波形の文様の意味は不明との事であるが、こうした平脱鏡に用いられる文様の一つであるといえるであろう。また、かつて宮ノ本 7-2 次調査 ST300 から出土した方形鏡も平脱鏡の底鏡であると報告しているが¹⁰⁾、今回出土した方形鏡と比較するためにもう一度鏡背面を観察したところ、わずかではあるが漆膜とその直下の土壌層が確認でき¹¹⁾、本資料と同一の技法による可能性が出てきた。

国内における出土例では平安時代初めの頃の墓とされる、京都市山科区の西野山古墳の出土遺物(国宝)中に円形の金銀平脱双鳳鏡(京都大学総合博物館蔵)があり、正倉院の平脱鏡に比肩しうるものとして貴重とされる。

平脱技法による鏡は、文様部分に漆や薄い箔を用いているため、埋没環境の条件によっては完全に消失し、素文と判断されてしまう可能性がある。元々希有な鏡ではあるが、出土例があまり見出されないのもそのような要因によるものかもしれない。

3. まとめ

本資料は、錫箔を漆で貼り付けた平脱鏡であることがわかった。錫の腐食が著しく台形部分の明確な形状は分からないため、何を意匠としたものかは不明であるが、蝶文や瑞花文、あるいは盛唐以降の鏡の文様としてよく見られる仙岳文の可能性があるとのご指摘があり、波形の文様の意味とともに今後の課題としたい。他にも製作地の問題、平脱技法の問題(特に漆膜の下の下地と思われる部分の技法について)など検討する点はまだまだ多い。

宮ノ本丘陵は平安期の太宰府官人の墓域とされる場所であり、これまでも被葬者の高位の身分を推定させる品々が出土しているが、そのような中で ST045 では当時貴重なものと考えられる平脱鏡が副葬されている事や、木棺を木炭で覆う特殊な埋葬法をとることなどから太宰府内において特別な立場の被葬者像が想像される。こうした葬法と副葬品との関係をさらに調べていくとともに、平安期の太宰府の墓制を考える上での資料として発掘調査の成果とともに検討を加えていく必要がある。

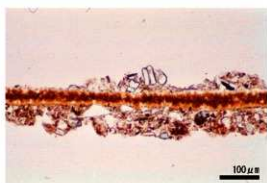
最後に、平脱鏡あるいはまた違う技法を用いた宝飾鏡はほとんどが伝世鏡であり、数も少ない。今回のような平脱鏡の出土は極めて稀であり、貴重な例となったが、今後も発掘によって出土する可能性は皆無ではない。今回の場合は初期の段階で X 線写真により“何かある”と推測された事で、慎重に作業を進めた結果得られた成果である。これまでに国内で発見された鏡の中には平脱鏡その他の宝飾鏡の一部、たとえば漆膜などが残存しているにもかかわらず、鏡を入れた漆箱の材料として判断されたり、文様の有無によってのみ素文の鏡とされたりした例があるかもしれない。宝飾鏡の形態的な特徴をおさえ、鏡背面の観察を丹念に行う必要がある。また言うまでもないが遺構の性格を踏まえた上で資料調査の手順や方法などにも十分な検討が必要である事を再認識している。



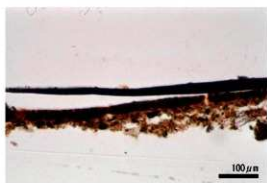
Pl. 1



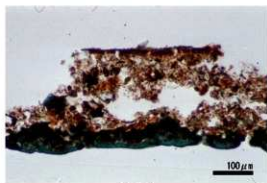
Pl. 2



Pl. 3



Pl. 6



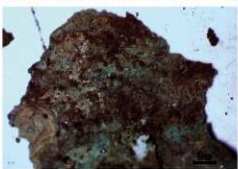
Pl. 7



Pl. 4



Pl. 5



Pl. 8

註

- 1) 日焼遺跡第7次調査において、ST807より八稜鏡1面、ST606より方形の漆箱、ST220より円形漆製品が出土し(太宰府市教育委員会2005『太宰府・佐野地区遺跡群20』)、日焼遺跡第5次調査においても八稜鏡1面、走獣葡萄鏡1面(未報告)が見つまっている
- 2) 太宰府市文化ふれあい館設置のTrex650(テクノス社製)を使用した。分析条件は、管電圧:30~40kV、管電流:1.00mA、フィルター:なし、コリメーター:0.03mm、測定雰囲気:真空(鏡本体は常圧にて測定)である。
- 3) 平脱と平文という表現の違いには2とおりの見方があるらしい。一つは技術的な違いはなく、唐での呼び方が平脱で、和名が平文とする見方と、平脱は平文の一種で全体を漆で塗りこめた後に文様部分の漆膜を剥ぎ取る「剥ぎ取り平文」、つまり漆膜を脱する技法から平脱という見方である。どちらが正しいのかは結論がでていない。本資料については、とりあえず平脱鏡とした。
- 4) 中国社会科学院考古研究所編著(2001)『甌師杏園唐墓 中国田野考古報告集考古学專刊丁種第64号』科学出版社
- 5) 太宰府市教育委員会(1995)『太宰府・佐野地区遺跡群V-宮ノ本遺跡第7-2次調査-太宰府市の文化財第27集』
- 6) 今津節生氏(九州国立博物館)のご指摘による。

参考文献

- 梁上椿著(1989)『竈窟藏鏡』田中琢・岡村秀典訳 同朋社
中野政樹(1973)「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鑄造技術」『東京国立博物館紀要第8号』
京都大学文学部(1987)『京都大学文学部博物館』
片山昭悟(1994)『奈良時代の鏡千二百年前にあこがれた紋様』
片山昭悟(1999)『奈良時代の鏡千二百年前にあこがれた紋様(続編)』
杉山洋(1999)『日本の美術No.393 古代の鏡』至文堂
小松大秀・加藤寛(1997)『漆芸品の鑑賞基礎知識』
小林行雄(1962)『古代の技術』塙書房

謝辞

本報告を行うにあたり、次の方々に資料調査のための便宜を図って頂き、また貴重なご教示とご指導を賜った。末筆ながらここに記して感謝申し上げます。

猪熊兼樹氏、今津節生氏、大重薫子氏、小松大秀氏、志賀智史氏、竹浪遠氏、鳥越俊氏、中野徹氏、橋詰文之氏、廣川守氏、本田光子氏、(五十音順)

2. 13ST045 出土木炭の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

宮ノ本遺跡第13次調査では、平安時代前期と考えられる木炭塚を備える木棺墓13ST045が検出されている。

本報告では、13ST045から出土した塚の炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築や埋葬の年代に関する資料を得る。また、併せて炭化材の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、平安時代前期と考えられる木棺墓13ST045内に詰められていた炭化材であり、年代測定用試料と樹種同定用試料の2点がある。樹種同定については、年代測定用試料と樹種同定用試料の2点について実施する。

2. 分析方法

a) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用いた。

b) 樹種同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を表1に示す。試料の測定年代(同位体補正年代)は約1200年前の値を示す。暦年較正を行った年代を表2に示すが、ほぼ9世紀代に相当する年代である。炭化材は広葉樹のニシキギ属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・ニシキギ属 (Euonymus) ニシキギ科

表1 宮ノ本遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定結果および樹種

試料名	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
S-45	炭化材	ニシキギ属	1170 ± 40	-22.27	1120 ± 30	IAAA-30960

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2 暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)						相対比	Code No.	
		cal AD	782 -	cal AD	791	cal BP	1,168 -			1,159
S-45	1167 ± 35	cal AD	809 -	cal AD	845	cal BP	1,141 -	1,105	0.300	IAAA-30960
		cal AD	850 -	cal AD	897	cal BP	1,100 -	1,053	0.441	
		cal AD	922 -	cal AD	942	cal BP	1,028 -	1,008	0.167	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

散孔材で、道管は小径、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

4. 考察

年代測定を行った炭化材は、出土状況等の発掘調査所見から、墓坑にともなうものとされ、その放射性炭素年代は墓坑の年代を推定するための検討材料になり得るものとされている。今回の測定結果は、較正暦年をみても、平安時代前期とする発掘調査所見とほぼ一致する。したがって、墓坑の年代を示す良好な資料が得られたといえる。

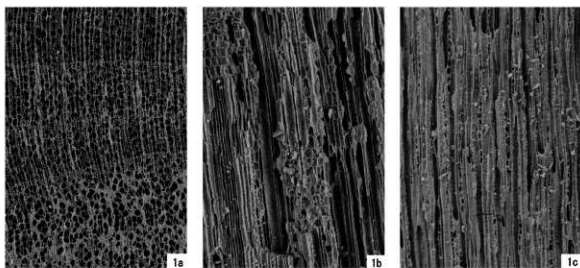
炭化材の樹種は、年代測定用、樹種同定用のいずれもニシキギ属であった。日本に生育するニシキギ属には、18種類がある(清水, 1989)。属としては北海道から沖縄(西表島)まで分布しており、亜熱帯-温帯の林内、海岸林、ブナ林内、亜高山の林縁部など様々な環境に生育している。木材は、一般的に緻密で硬い部類に入る。

今回の炭化材は、墓坑内の木棺を取り巻くように詰めていた炭化材の一つであり、木棺内の防湿等を目的として詰められていた可能性がある。地域は異なるが奈良県の太安萬侶墓では、防湿等を目的としてカシ類、コナラ・クヌギ類、カバノキ類、シデノキ類、サクラ類、カエデ類、ヤブツバキ?、エゴノキ?等硬質の木炭になる種類が利用されていることが確認されている(小清水・嶋倉, 1981)。今回のニシキギ属も緻密で硬い部類に入ることから、吸湿性に優れた木炭を詰めている可能性がある。今後、墓坑内の炭化材の樹種同定を行うことにより、炭化材の利用状況に関する検討を行う資料が得られるものと思われる。

引用文献

小清水 卓二・嶋倉 巳三郎, 1981, 木炭の樹種. 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊 太安萬侶墓, 奈良県立橿原考古学研究所, 89-91.

図版1 宮ノ本遺跡の炭化材



1. ニシキギ属 (S-45)
a:木口 b:柱目 c:板目

VI. まとめ

縄文時代の包含層について

カヤノから宮ノ本にかけての大佐野川沿いの丘陵裾部では縄文時代の押形文土器が石織などの石器とともに出土する。宮ノ本 11 次調査で検出した包含層は丘陵上部もしくは宮ノ本丘陵南裾をめぐる流路により上流から流されてきたと考えられる。今後も遺構の検出は困難であろうが、遺物の分布状況を把握することは大佐野川周辺での当該期の人々の活動を跡付けるために必要であると考えられる。

古墳時代の集落について

竪穴住居が丘陵裾で散漫に検出される。4～6 世紀のもので、大佐野川対岸の京ノ尾・畑中と比較すると、時期的に宮ノ本が先行するが掘立柱建物はなくかつ数が少ないようである。

古代の墓地について

宮ノ本遺跡は今までの発掘調査で奈良時代から平安時代前期の墓約 30 基を確認し、官人墓地として位置づけられている。今回確認した地形は北東から南西側を下る緩やかな斜面になっており、標高は 38～39 m 前後を測る。本調査地は奈良～平安時代の墳墓群を検出した宮ノ本 2・7 次調査の下段にあたり、いままで確認された宮ノ本丘陵の中では最も低い丘陵のふもとにある。今回の 12 次調査では 1 基、13 次調査では 7 基の土葬墓を検出し、宮ノ本丘陵の一連の墓地が、丘陵裾部まで範囲が広がることが判明した。土葬墓の内訳は、鉄釘が埋土中より出土したことや鉄釘に付着していた棺材の木質痕から木棺墓と判断できるものが 5 基、また木棺墓か土壇墓なのか判別できないものが 2 基ある。墓全体の配置状況は等高線沿いに南北方向に並ぶ形で、ひとつの墓地群を形成しているが、造営時期は奈良から平安前期と幅がある。13ST005 以外は供献土器があり、それを見ると一番古いものは 13ST043 で IV～V 期である。次いで 13ST045 が VI 期、13ST018 と 13ST025 が VII 期、13ST019 が IX 期、13ST050 が X 期の造営である。つまり今回の調査区では 8 世紀後半から 11 世紀にかけて断続的に墓が造営されている。副葬品では供献土器の他に 13ST045 から銅鏡、13ST050 から鉄と毛抜き、13ST018 と 13ST019 からは毛抜きが 1 点ずつ出土している。埋納品の内容から階層差が想定され、鏡が出土した 13ST045 が上位になり、土器と鉄製品が出土した 13ST018・13ST019・13ST050 がこれに次ぎ、供献土器のみもしくは何も副葬されていない 13ST005・13ST025・13ST043 が下位になる。また埋葬施設に関しては、13ST045 の墓壇は圧倒的に大きく、木炭柳を使用するなど群を抜いた厚葬である。墓壇軸は一番早い段階の 13ST043 は東西軸を向いているが、それ以降の墓地は南北軸を向いている。太宰府で確認された奈良時代の墓地を見てみると、墳墓を隣接して造ることがなく、広い範囲の墓域を持っていることが確認されている。この調査地でも 8 世紀後半造営の 13ST043 と同時期の墓は存在していない。

写真図版



宮ノ本遺跡第 11 ～ 13 次調査地遠景（西より・正面の山は大野城跡）



宮ノ本遺跡第11次調査区全景（上が西）



宮ノ本遺跡第11次調査区北側全景（上が西）



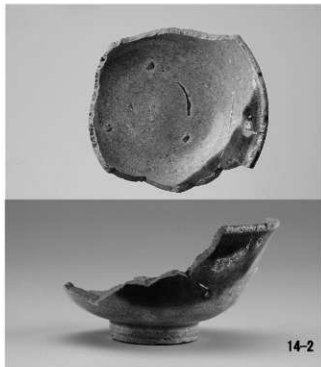
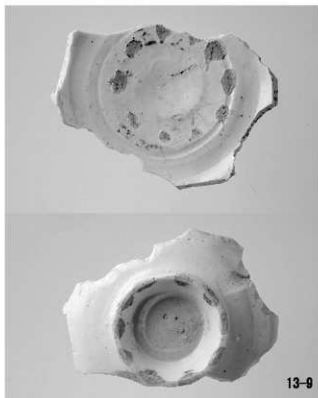
宮ノ本遺跡第11次調査区南側全景（上が西）



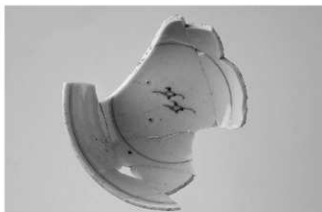
下層包含層土層（Jライン）（南より）



下層包含層土層（10ライン）（東より）







14-18



14-19



14-20



14-21



14-22



14-23



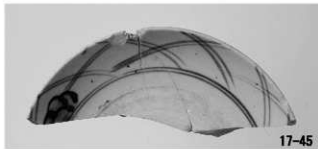
14-24

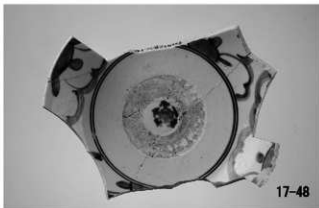


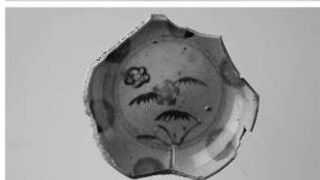
14-25













宮ノ本遺跡第12次調査区全景（上が北）



宮ノ本第13次調査調査区遠景（北より）



宮ノ本第13次調査区全景（上が北）



13ST045 木炭検出状況（西より）



13ST045 棺内木炭除去状況（西より）



13ST045 鏡出土状況（東より）



報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん									
書名	太宰府・佐野地区遺跡群 22									
副書名	宮ノ本遺跡第11・12・13次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	86集									
編著者	城戸康利、松浦智、下川可容子、(株)パリオ・サーヴェイ									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2006(平成18)年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	桑坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
みやのもといせき 宮ノ本遺跡 第11次調査	桑坊外	太宰府市 大字向佐野	402214		55750.0	-46590.0	19980406	19980807	1,186	区画整理
みやのもといせき 宮ノ本遺跡 第12次調査	桑坊外	太宰府市 大字向佐野	402214		55730.0	-46630.0	19980708	19980904	500	区画整理
みやのもといせき 宮ノ本遺跡 第13次調査	桑坊外	太宰府市 大字向佐野	402214		55800.0	-46580.0	19980729	19980930	550	区画整理
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
宮ノ本遺跡 第11次	包蔵地 集落	縄文、弥生 古墳	竪穴住居、土坑、溝		縄文土器、弥生土器、 須恵器、土師器、陶磁器					
宮ノ本遺跡 第12次調査	集落・墓	古墳	竪穴住居、竈、墓		須恵器、土師器、陶磁器、釘					
宮ノ本遺跡 第13次調査	集落 墓	古墳、古代	竪穴住居、墓		須恵器、土師器、陶磁器、 青銅鏡、釘、鉄、毛抜き			木炭榎木棺墓		

太宰府市の文化財 第86集

太宰府・佐野地区遺跡群 22

— 宮ノ本遺跡第11・12・13次調査 —

平成18年3月

編集・発行 太宰府市教育委員会

太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 有限会社 システム・レコ

福岡市東区土井 1-11-21

宮ノ本遺跡 11 次調査



調査員 藤田 隆
縮尺 1/100

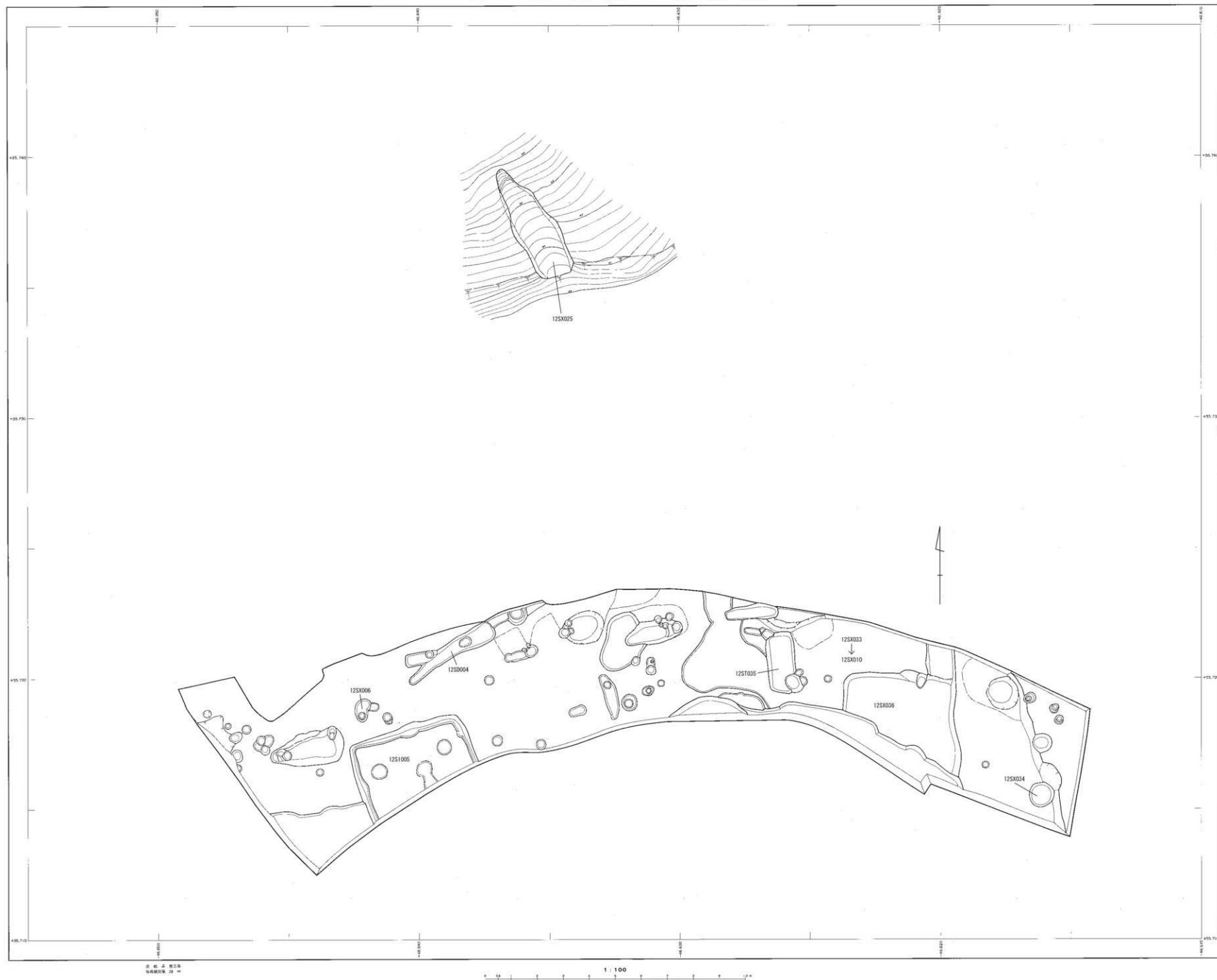
付図1 宮ノ本遺跡第11次調査 遺構配置図 (1/100) ①

宮ノ本遺跡 11 次調査



付図2 宮ノ本遺跡第11次調査 遺構配置図(1/100)②

宮ノ本遺跡 12次調査



付図3 宮ノ本遺跡第12次調査 遺構配置図 (1/100)

宮ノ本遺跡 13 次調査



大宰府市教育委員会

付図4 宮ノ本遺跡第13次調査 遺構配置図 (1/100)